川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二年六月二十五日　印刷
平成二年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七五八号

日川協加盟

No. 758

同人特集・川柳と私

七月号

「川柳塔」碑参拝と同人総会・本社句会

本社では毎年秋、同人総会を開き、同日、本社句会を行っていますが、今年は昨年11月、みなさんのご浄財で高野山大霊園に建立した「川柳塔」碑への参拝も兼ねて実施いたしたいと存じますので、各地からこぞってご参加くださるようお願い申し上げます。

日程は**10月6日**（土）に「川柳塔」碑に参拝して同夜、宿坊で一泊し、翌**7日**（日）午後から大阪市内で同人総会、続いて本社句会を開き、夕刻閉会します。

この行事へは、誌友の方の参加も歓迎いたします。

なお、詳細は後日、発表いたしますが、各地から高野山の「川柳塔」碑への参拝をご希望の方は乗り物や宿舎等の準備の都合上、**7月31日**までに川柳塔社事務所、または川島讓二児（〒569 高槻市宮田町3―8―8・電0726―96―2765）までお知らせくださるようお願いします。

川柳塔社

「大阪の人」展

府民センター巡回展

- 大阪府南河内府民センター
  6月20日(水)～6月29日(金)
- 大阪府泉北府民センター
  7月2日(月)～7月12日(木)
- 大阪府北河内府民センター
  7月16日(月)～7月21日(土)
- 大阪府豊能府民センター
  8月2日(水)～8月14日(火)
- 大阪府泉南府民センター
  8月16日(木)～8月23日(木)
- 大阪府三島府民センター
  8月27日(月)～9月6日(木)
- 大阪府中河内府民センター
  9月10日(月)～9月20日(木)
- 大阪府中河内府民センター（分室）
  10月1日(月)～10月5日(金)

■主催／大阪府写真家協会

（左の写真は、同展展示の西尾栞氏）

うちわ撒き行事

西尾栞

去る五月十九日、唐招提寺のうちわ撒きの行事に始めて行ってきた。大変な賑わいであったが、何時行っても心足るたたずまいのお寺である。こんな良いお寺の近くに住んだ幸福を沁々と思った。私は人様をご案内するのに、このお寺と秋篠寺のあるのを、こよなく楽しみにしている。

一歩入って仰ぐと、風雪一、二〇〇年の鴟尾の美しさ。

大寺のまろき柱の月かげを
　土にふみつつものをこそ思へ

会津八一の苔むした碑の前に佇つと、幽幻の世界に入る。

御影堂へ行く道に、舎利殿が軽快な姿で建っている。この二階から今日のうちわ撒きが行われる重層建造物である。その舎利殿をとりまいて、撒かれるうちわより一回り大きいうちわが行儀よく飾られている。

近づいて見ると、有名人の一筆書きや書家の一字描き、大学教授の短歌や名の知れた人の俳句が彩とりどりに描かれていた。

武原はんさんの

　米寿とて花の浄土へ舞の道

というのがあるかと思うと、

桂米朝の

　ゆうだちくる大和三山すじかいに

という一句も見つかった。

川柳がないかと思って、仔細に見て回ったが、一句もなかったのが洵に淋しかった。正四時から恒例のうちわ撒きが始まったが、軽いうちわは堂の下のみ撒かれると思っていたら、遠い所へはうちわの柄の先に大根を輪切りしたのや、小餅をつけて投げていた。

老齢の私は人混みをさけて、夕映えの中の楽しい光景を遠くから眺めていた。取り合いっこしたうちわは破れていた。

うちわ撒き破れたのをかざしもち　栞

座右の句

人はみな善なり向かいあったとき　（緑之助）

私の句

輪廻とや落葉が冬の手にもどる　金村青湖

川柳塔　七月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　うちわ撒き行事……西尾　栞…(1)
法悦……野村太茂津…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…(4)
自選集……(33)
■川柳太平記(146)　川柳の群像　内藤凡柳……東野大八…(38)
■連載　柳籠裏三篇研究（四丁）……(40)
日本の最短詩―武玉川調(四)……阿達義雄…(42)
水煙抄……黒川紫香選…(44)
秀句鑑賞　同人吟……児島与呂志…(37)
　　水煙抄……矢野佳雲…(64)
川柳と私―同人アンケート……(74)
　谷垣史好・西山　幸・新家完司・都倉求芽・板東倫子
　竹内紫錆・遠山可住・小野克枝・高田博泉

法悦

野村太茂津

大乗仏教は「人は死ぬ。そのことによって土が肥え、草木がよろこび、つややかになった葉や、実って赤く熟した実を、鳥やけものが食べる。同時に人も養われる。だから天気は輝いている」という。

万物は関連しあい、盛衰、生死という回転の中で生きています。否、生かされています。これほどの華やぎがありましょうか。

死こそよろこびであり、再生は即座に保証されます。それどころか、死の中に既に生が芽ばえ、まだ一個の生命の中でも、細胞が刻々に死に、刻々によみがえっています。

だからといって、あなたという人が、もう一度この世に戻ってくることはないのです。

「それではあんまりだ」

「そう思う自分自身から離れなさい」

「離れれば、すぐさま天地があなたの中に入ってくる。あなた自身、天地になることが永遠ということなのです」

銀河系……河内天笑選…(78)
■女性コーナー　茴香の花……八木千代選…(82)
「仏」……小林由多香選…(84)
一路集「送る」……林荒介選…(84)
「童謡」……西出楓楽選…(85)
初歩教室「先走り」……辻白渓子…(86)
■川柳こぼれ話　川柳と表記法……田中正坊…(88)
■句集紹介『夾竹桃』に夏がくる……高杉鬼遊…(89)
■ずいそう　羽衣……布施幸子…(90)
柳界展望……(101)
本社六月句会……(102)
■各地句会だより　あしなみ川柳会……保西岳詩…(118)
各地柳壇（佳句地十選／林はつ絵）……(106)
七月各地句会案内……(119)
■編集後記……(120)

座右の句

かかわりは無いが捨ててもおけぬ義理　（五楽庵）

私の句

言わないで良かった本音抱いて寝る　**村田善保**

それが悟りです。自力で悟る力をもっていないなら、他力（仏）にすがりなさい。

生命が生死することを、ありがたく思い、光に向かって感謝せよ、よろこべ、躍りあがってよろこべ。欣喜雀躍せよという。

以上はお坊さんのお説教ですが、妄者としての老兵めにとりましては、自力で悟る力もなく、仏さまに仮りに縋ってみましても、そこまでは悟れません。

大量の人間の殺しあいをしたあの第二次世界大戦が終わると、人命の尊さが説かれ、命の創造から、生命の維持、健康、病気の研究は地球をあげて普及し、国家も政治も経済もあるいは芸術も、「あらゆる学問が人間の生命の質を高めるためにある」との認識が強くなってまいりました。

私は戦場では、朝目が覚めた時から寝るまで一日中、死ぬことばかり考えていました。今日こそ死んでやろう、明日こそ死んでやろうと思いつづけていました。幸いに死神にも会わず、終戦を迎え、祖国に帰ることができて、今は命が惜しくて惜しくて、一日でも多く生かしてほしいと希うばかりです。

健康で生きる体力があればこそ生き残れ、精神的には、意欲、判断力などが体力ということでありましょう。

健康がすべての幸福の基礎です。皆さんどうぞお大切に。そして命ある句をどうぞ。

西尾栞選

うどんやの前で逢いたい人を待つ
大根をコトコトと煮る妻の章
丁寧な言葉で遠い人になる
叙勲の朝　車窓の富士に見送られ
生きてきて勲章もよし男たり
大内山の薫風に会う凡夫婦

西宮市　門谷たず子

実直の疲れを向日葵知っている
逆境にもう逆らわぬ仏顔
カラオケの音痴六十路のそれもよし
神さま仏さま助けてくれたは医者でした
ブランドにちょっぴり歩幅若返る
高原の駅に七月老いふたり

和泉市　西岡洛酔

幼稚園もう先生に憧れる
先生の噂ひそひそ花ばさみ

西宮市　西口いわる

溜息のルーツを知っているペンよ
消しゴムで消したい今日の一頁
一言を抱きしめ鬼も鶴を折る
封を切るまでは弾んでいた手紙

豊中市　安藤寿美子

連休が長すぎ拗ねても居られない
連休がすんで出かける老夫婦
今要るもの救急箱にありません
銘酒かな呉春の里は青葉光
野良猫に大喝人間とび上る
庭青葉ほったらかしのさつき咲く

堺市　藤井一二三

屈託ない表情が好き邪鬼撫でる
色即是空桜の下を霊柩車
蝶ひとつ名もない花に戯れる
母の日に子の無い朝のコンパクト
双六もあがりの見えてきて寂し

きざはしのまるみも女人高野なり

竹原市　小島蘭幸

師の眉がやさしくありぬ淋しいね
夢を見るときの鏡は伏せておく
燕夫婦の愛を毎日見て生きる
飲んでいる父が笑っている夢か
姫鏡　現実というものがある
わたくしによく似た長女次女叱る

大阪市　江城修史

母の日の花の命をいとおしむ
逆境で知る人間の裏表
妻の私語働く日日が母の日よ
父ありき赤旗スクラム労働歌
お蔭様今年も半ば生かされた
老いらくの残り火昔の風に逢う

京都市　都倉求芽

流れ星梅雨の日本見失う
言いたいことは梅雨の雷に言わせとく
五月雨の闇を見据えて鬼瓦
汗拭いてふいて運など考えず
えらい人だけど自分の定規しか持たぬ
ビデオテープの継ぎ目で首相痙攣し

藤井寺市　吉岡美房

人間の大きさ負けたなと思う
晩成を信じた母に詫びるだけ
立夏ともなりぬ少女の女めく
水芭蕉思い出ばかり追って夏
あじさいの雨が迷いを深くする
飲む程にブッシュ サッチャー ゴルバチョフ

岡山県　嘉数兆代賀

今日生きて今日吹く風の言葉聞く
なにもない二人へ飯茶碗がふたつ
祈ることばかりで老母の背が曲る
傘さしてたたんでやはり訣れよう
欺されて一人笑いをしています
なるようになるさ夕餉の目刺し焼く

八尾市　内海幸生

背伸びなどしてはくれない爺なり
忠実な鏡にすこしも罪は無い
穏やかに今日も暮れたり幸せか
詩人にもなれず金持ちにもなれず

八重山諸島めぐり

蛇皮線に足どり軽し過疎の牛
エメラルド海水パンツになれという

松原市　谷垣史好

薄れゆく景色の中の乳母車
少年の或る日すべてが淫らにて
今はもう義務と思うてめしを食い
健康なお方に何を話すべき
輪廻とはかくの如きか観覧車

ジャンケンを三度もやれば元の鞘
松原市　玉置重人

境界線争いごとはせぬように
おもちゃ売場で足もとを見すかされ
おしゃべりが済んだら妻の寝る時間
指繰って初心忘れぬ数を読む
まっすぐな男が好きな河内弁
癖のある筆で証拠をつかまれる
松江市　舟木与根一

信号で命を拾う物思い
深呼吸して見て土地を買うておく
帳消しをカーネーションでしたつもり
まだまだ殺し文句の効く若さ
新居にも枕にも慣れ蛙聴く
田植機が週休二日をみんな埋め
島根県　西村早苗

米びつに五升位はいつもある
顔にくるカミソリ止める花粉症
七月の空七色のシャボン玉
歩こうと話がきまるかずら橋
湖の宿しじみ味噌汁さわやかに
花博の人波の中の立ちくらみ
和歌山市　西山幸

ぬり絵塗る今日も貧しい絵具箱
にんげん讃歌気随気儘に独り居て
たそがれ色の鏡を磨くきのう今日
聖五月なり新しい日傘買う
またの日は朱に交わってみるいのち
露草の咲くひとときをたいせつに
倉敷市　小野克枝

夫婦になる前の手紙が笑わせる
本音丸出しでわたしの血を継ぐ子
芥子ときながら女になれぬ母
正面に強情っ張りの席を置く
反省の顔を枕へ引き戻し
しんがりを歩くかしこい足を撫で
大阪市　西出楓楽

余命表どんでん返し秘めている
ブランデーかたむけガルボ偲ぶ宵
民主化がなかなか進まないわが家
煩悩を友に楽しく生きてます
ロボットの故障は愛に飢えたらし
いつまでも親離れ出来ない財布
和歌山市　福本英子

他所さまと一緒に咲いたぼけの花
個性ない手紙せっせとおぼろ月
ゆっくりと鈍行列車に乗り遅れ
母の日の一日だけが物足らぬ
成田離婚するかも知れぬ娘を送る
村一番の鯉が届いた初節句
鳥取県　土橋螢

仏さんの慈悲の光が眩しくて

夫婦心中の心配はないらしい
親切な隣があって住みにくい
一輪車が楽しくなった一年生
わたくしをまたも夢中にさせる女
忙しい女に軽くあしらわれ

和歌山県　寺田裕美

籾蒔いて夫婦に祈ることばかり
包帯の中で忠告疼きだす
順調だから神様が信じられ
赤トンボ唄えば会いたい顔がいる
一日の長さが違う農繁期
念願の橋を渡って根をおろす

竹原市　森井菁居

長靴が知る兼業のスケジュール
跡継ぎの苦悶おふくろには見せぬ
いくさから戻る憩いの灯へ戻る
ある時はぶつかり合うて夫婦独楽
そして初夏日々が愉しい花マニア
終止符が欲しく夜中に墨をする

米子市　林荒介

鳩尾に土鈴が届く途中下車
少しだけ紙を汚して生きている
落書きの相合傘も朽ちてきた
渦を出て森でいのちを干している
火を抱いたままで崩れる曼珠沙華
平常心になるまで蹠を洗う

青い鳥絵本の中で呼んでいる
至近距離夫が直球投げてくる
運命線大事に生きる掌を合わす
芋虫のことには触れぬ蝶の羽根
日本語の判るイルカを友だちに
沿線に億の値のつく野が萌える

米子市　林瑞枝

ふとんなど干して帰りを待つばかり
すばらしい家族があって豆ごはん
母の日にうでたてふせを五回ほど
この頃はあまえ上手な妻になり
二のうでを女もまくることがある
深追いのついでに海を見ておこう

松原市　佐藤奏月

妻にないものを探して風の街
老いて尚妻が恨みを書きためる
埋め草の数多くなる句読点
涅槃図に母が重なる昼の月
もの言わぬ妻へ不安の膳に坐す
赤いベレーが似合うている雅号もつ

兵庫県　辻文平

忘れろと言うほうが無理ほっといて
妻の愚痴目のまわるほどいそがしい
吹き込んだテープで毎度おさわがせ
番犬も寄る年波に勝てなくて

笠岡市　松本忠三

聞き分けのない子に誰が育てたの
ストレスの解消遊ぶことですの
下関市　石川侃流洞

やまいだれ明るい話してくれぬ
水落ちて来るから水車休めない
売りことば買うと火の粉が飛んで来る
信号の赤でライバル距離をつめ
ささやかな抵抗黒を塗りたくる
結んで開いて老人体操遊戯だな
米子市　小西雄々

絵に描いた餅がふくらむまで待とう
招かれて脚色された幕が開く
余震まだつづく家族を守らねば
民宿の儲け時計がボーンと鳴る
がらくたを捨てると広い部屋になる
水玉のネクタイ結ぶ天邪鬼
鳥取県　新家完司

雨の漏る家に生まれてからの旅
目が覚めてみると桜の花の下
要るものは僅かなものよ花の下
可愛気の無い子ハキハキものを言う
むかしから年寄りだったおじいさん
話してもわからぬ人と話する
和歌山市　松原寿子

贈られておんなきらめく刻がある
ちぎり絵の浄土はいつもむらさきで
明日みつめ炎える掌で書く懺悔録
紫陽花の蒼と契って満たされず
眼を閉じて貴方の海が見たくなる
残り香に胸の痛みをうるおされ
堺市　中川滋雀

許されて仏が宿る月の暈
拱いた腕からたかが知れた知恵
にこにこと笑って取りつくしまもない
それからが気になる雨の交響詩
ブランクを埋めるあめ玉なめただけ
美禰市　安平次弘道

悔しさをバネに明日の夢を追い
一人芝居が好きな小指を持て余し
真実の叫びへ神も寝ておれず
彩あせた造花が耐える晒し首
てにをはにこだわり真意ぼけてくる
倉敷市　稲田豊作

銭の要る日めくりばかり疲れ果て
身を責めて自問自答の夜が更ける
世の批判どうあれ神の答待つ
老い楽や嫁はやさしく孫かわい
角立てず笑って済ます老いの主義
堺市　高橋千万子

人生も花も蕾にある期待
花と花頬ずりしてる春の風
真実の恋を童話にする大人

床に入るともう明日が動き出す
ゆるかった財布のひもの昨日今日

八尾市　宮西弥生

長生きをしてほしい人が沢山いる
友達の情けが切れる花の冷え
安住の地の雑草が抜きにくく
肉親に貸し借りはなし墓磨く
前向きが過ぎてリズム狂わせる

倉吉市　奥谷弘朗

仏にも鬼にも成って生きてます
現実と理想の谷間で出た手腕
三猿に尽きると悟り平和です
衣食住足れば相性までが良い
この俺を太陽と見る妻が居る

東大阪市　森下愛論

今までのツケを払って飲み直し
春の小川メダカのお家はお留守です
金運は大吉なるに株下がる
縄のれん名はしりまへん顔馴染
日曜のジョギング赤いシャツを着て

甘日市市　林野甦光

さよならをする気花瓶の花を変え
弱いとこへ目星をつけたサーブ権
二階から口笛トントントンと降り
手料理をお皿に盛った母の唄
昔見た夢を叶えている老後

柳井市　弘津柳慶

耐えに耐え監督ついに腰を上げ
言いわけへあなたわかっていますわよ
三カ日だけはあなたの天下です
引出しの鍵まで疑いの目で見られ
新任は派閥のドンの種馬さ

伊丹市　樫谷寿馬

傍目には悠々自適と写るらし
五月病青い背広を重く着る
つっかかる妻へカーブを投げてみる
仏像を観る目男女を意識せず
連休の疲れへ冷えたマスカット

今治市　矢野佳雲

アジサイの花の重みは乳房かな
豆腐にもドラマがあった浮き沈み
黒を白と言わせるだけの金があり
男だから倅の嫁とうまくゆき
楽しみと不安少うし土地があり

松江市　恒松叮紅

平成の手に根性のない指紋
贅沢に時間使っている無職
出稼ぎの与作が嵌まる花名刺
老いらくが恥ずかしい夢見てしまい
粗大ゴミでも居てほしい不眠症

松江市　柳楽鶴丸

妻が怒ると泣き上戸になる

僕は馬鹿の隣の阿呆です
天国にも喫煙室がありますか
ウインドーのマネキンへ生唾をのみ
風の便りは真っ赤な嘘でした

西宮市　林　はつ絵

推薦書先生少し嘘を書く
体温の伝わるペンで母へ書く
好かんなと相手の虫も独りごと
眉少し動かすだけで止めておく
花束よこのまま死んでしまいたい

玉野市　小谷仙山

りんごむくナイフにしては切れすぎる
愛鳥週間何んの事やら雀の子
新緑にせかされて居る朝鏡
御免ねと言ったでしょうと噛みつかれ
ただ立って居るそれだけで気に入らぬ

奈良市　宮口笛生

朝からの頭痛へ雲が垂れ下がり
程々という程々のむずかしく
ど阿呆でよし大阪弁が憎めない
分の悪い役にも馴れたお人好し
雑魚取りの記憶佐保川逆のぼり

京都市　山本規不風

喜寿祝いに新車貰ろうて謎もらう
好きなのよ給料安いけど結婚す
パンティーの花柄まで霊感に当てられる
来年の厄を今年で済ます怪我
恋猫の怒り鉄線花を砕く

豊中市　田中正坊

一期一会思い出はみな美しい
四面楚歌一人の穴を深く掘る
ルビーより美しいのは愛だろう
さわやかにサラダ記念日風光る（七月六日）
なつかしや少年倶楽部　紅緑忌

名古屋市　越村枯梢

通り抜けこれが庶民というものか（造幣局の桜）
ギャルの街おじんは路の端をゆく
へそくりを温めて妻の頭が高い
古手紙わたしにこんな過去もある
釣糸の細さに今日も騙される

呉市　槇田英詩

補聴器外して初夏の日射しの無風かな
背のチャック閉じる好意の恥じらいや
妻老いて頷く型の乳房もつ
ご好意の礼を失した夜の悔い
肩抱いて明日逢う小指からませる

大田市　藤田軒太楼

約束を無視して喋るだけ喋り
おしゃべりに先を越された自尊心
形見分け心の動き見破られ
良心のうずき逢いたい人の夢
考えた口実孫を抱きに来る

経済大国裏を覗けば兎小屋
今朝もまた為替と株のノイローゼ
金婚の後まだまだ山も坂もあり
白砂青松それは昔の夢でした
スクールバスゆっくり春を抜けてくる

守口市　羽原静歩

筍を噛める歯があり春送る
大正の笑いが消えて寄席にＪＡＺＺ
大正の心を燃やす意地がある
雑音が音楽になる世紀末
未だ余力残してホームストレッチ

尼崎市　春城武庫坊

落ちつきのない物腰で逢うている
深刻な顔を娘にのぞかれる
運動が足りませんなと皮下脂肪
小咄がとっても好きな昼の月
主義のない貌でバイトに精を出し

堺市　河内月子

衣がえまだリラ冷えというところ
孫の探検三面鏡の引出しを
世紀末の風が少うしあらあらし
毎日が変りないのは幸せか
魂胆の含み笑いを見破れず

尼崎市　春城年代

鬼になり仏になって子を育て

奈良市　天正千梢

贅きわまりてあり犬ホテル
魂の再生戸隠の杉並木
古希の春　哲学の道あゆみ
七十歳パレットに原色を買い足して

熊本市　永田俊子

一生の糸のたわみが深くなる
表編み裏編みせっせと人の世や
ゴマメの歯ぎしりビリヤードを突く
あなたが怯えているのはあなたの足音
教え乞う無知に重たい広辞苑

富山市　舟渡杏花

向う岸へ着けぬと知って渡る川
滅ぶ日まで美しかったちちとはは
旅ごころ満たす峠の草だんご
いのちの余りたしかめる日が多くなる
エンマの前で居眠りの胆っ玉

大阪市　津守柳伸

目に青葉スイスイ走る時間帯
それからは財布に入れた健保証
アルバムの整理はじめた丸い背な
後継者なく停年のない居職
下町が好き筍のお裾分け

仙台市　川村映輝

福祉年金さえ文句を言われてる
連休の楽しさやっぱり金次第
呑むほどに酔わず頭が冴えるのみ

夫の言動意外な面を聞いてくる
新幹線近くの親戚遠くなり

大阪市　河井庸佑

ひとりだけ良い子になって悩み増え
じれてきた証拠ゆさぶりかけてくる
好調が続き自分を見失う
プライドをきっぱり捨てて生きている
優柔不断陰口もよし生きる道

大阪市　本間満津子

旅終えて私に帰る家が有る
話す気にさせる大きな胸の人
物指しの古さで情けに流される
陽のあたる場所で日陰を探してる
母ひとり埴生の宿に灯を消さず

大阪市　神夏磯典子

夫婦して歩いた道が胸にある
古い皿割った悔いよりほっとする
面借りて言いたいことが言えました
気がつけば傘さしてるのは私だけ
歳月を経て美しい古時計

大阪市　黒田真砂

通院のために服選るあほらしさ
遠ざかる影呼び止めた熱い胸
立膝に女が匂う紹の単衣
不吉な夢見た衝撃の夕桜
アンコールに似た人生の句読点

大阪市　藤田頂留子

卯の花についロずさむ夏は来ぬ（住吉神社卯の花苑）
砂時計老いの速度も計ります
やな顔も気付かぬ私語のご当人
活け花展パントマイムの花と人
便利さに老いの部品が錆びかけた

大阪市　大塚節子

先頭もしんがりもよし長い坂
ビル谷間細い日ざしは猫のもの
父曰く飲めなくなったと酌いでいる
受話器から独楽まわせたと舌たらず
成田山違反乗車は守れない

大阪市　北勝美

NHK視てる男に肩が凝り
行者道叱咤の声に慈悲がある
何の日か箸を迂闊に小豆めし
明日から八十歳なる日をさりげなく
つっかけをズックに履き替え万歩計

大阪市　板東倫子

中国旅行にて

謝謝を言い馴れた頃旅終る
寒山寺我が手で衝いた鐘が鳴る
妹が姉の世話やく遍路旅
休日の朝から聖書売りに来る
一億が思い上っているこわさ

集りの温い余韻と月の道
行く処あって朝から手順よく
やり直す気励ますように若葉萌え
発見のよろこび散歩から貰う
治療法あれこれ仕入れまだ迷う

大阪市　冨上光代

記憶してそれは女の想いです
花から水の精へわたしも張り切ろう
葉ざくらの繁り財布はやせてゆく
逢いにゆくくちなしひそやかな歩幅
おばあちゃんに似てると言われ叱れない

大阪市　渡部さと美

銀行は交差点の角が好き
忘れぬようメモしたメモをもう忘れ
青空にローンが残る鯉のぼり
迂闊にも墓穴をほった手帖メモ
あの人の弱味つかんでいる強味

大阪市　中西兼治郎

生命線信じて飲んだ酒煙草
老骨にノルマ指示する万歩計
ご朱印を集めて老いの道しるべ
メロドラマ視ている妻の生返事
感情が先走りする縺れ糸

大阪市　井上白峰

山笑う私も笑って背伸びする

大阪市　桝本蕗児

ふぐ提灯　通天閣が夕暮れる
芯のある男と言われ裏長屋
浪人も三年目なり海を見る
過疎の里今年限りの鯉のぼり

和歌山市　堀端三男

他生の縁とても大事にして生きる
影さえも敵かと思う日の焦り
思い切り笑ったあとの空虚さよ
致死量の睡眠薬を持ち歩く
図太さを買うて渉外まかしとく

和歌山市　垂井千寿子

手鏡の中から魔女に誘われる
頂上で降り口降りるタイミング
窓際の椅子で自分を取り戻す
指名手配の髭は無い方がいい
法話より横のバザーが気にかかり

和歌山市　内芝登志代

何よりの倖せ夫婦仲がいい
路傍の石きっときっとと空仰ぐ
夏帽子少女可愛い夢を抱く
挨拶のように血圧たずね合い
好ライバル私の人生もりあがる

和歌山市　牛尾緑良

バラが咲く理性こわれる音がして
カウンターで男の雨期を耐えている
バックミラー昨日がうつるから見ない

昨日から逃れる写経一字ずつ
善人にとても厳しい法の網

和歌山市　桜井千秀

手始めに鉛筆の芯尖らせる
乗るか反るか反ると後ろは崖っ渕
目のうろこ剝がしてレール敷き直す
おざなりの慰めでもよし初夏の鬱
花博の話は避ける見舞籠

和歌山市　福井桂香

君子蘭そんなにおすましなさらずに
恋人が若葉キラキラ見つからぬ
鏡の中の会話が弾む美容室
脱毛症いい人ばかり狙われる
肩に手をふれて驚くか細さに

和歌山市　山田高夫

我慢にも限界がある喉仏
悔ゆること無しにさよなら出来ますか
出世した友を自慢に裏話
支え合う木組に塔の芯柱
ご多忙中顔だけ見せに来た市長

和歌山市　青枝鉄治

また一つ嘘を残して出る港
分けられた株に芽を出す蘭の意地
手みやげの底に潜んでいる踏み絵
みやげ買う楽しさで行く祖母の旅
ほんとうの味方を知った落ち目の日

和歌山市　田中輝子

開き直って水の澄むのを待っている
したいようにさせてくれてる監視
とりあえず信じて握り合う両手
素足で走る若さで逢いにいく積り
顔洗う嬉しいことが一つあり

倉吉市　渡辺独歩

土地売れて雑兵きのうの顔でなし
ビアガーデン女の道で浮き沈み
連休でペットホテルは花盛り
よいとまけ土地ころがしの地しめ唄
少し派手ままよ緑の風に乗ろ

西条市　片上明水

葉桜になって落ち着く酒の味
朝顔の種ここへ播く窓の位置
抜刀の仕草でわかる付け焼き刃
絵馬一つだけが叶うた春の家
腹黒い男ですぐに掌を合わす

松山市　谷真風

菜の花を活けて蝶蝶は来ないかな
生きていてやろじゃないかと励まされ
乳母車を押せば歩けるお爺さん
ティッシュペーパーで涙を拭いてはなもかみ
整形をしたので笑えぬ顔になり

町田市　竹内紫錆

バリウムはあったが父に時遅し

鬱蒼の母校と知った戦前派
目には団地　鎌倉古道探る会
緑から戻れば痴漢に注意の字
缶捨てる妻㍉に強くなり

高槻市　川島諷云児

ネクタイを締めると演技したくなる
金の要る話寝た振りしておこう
その先を話すと困る人がいる
年金の許す範囲で酒たばこ
言いそびれためらい傷をまたつくる

松原市　小池しげお

仁王さんすこし雑談しませんか
一線を守らぬ猫に眠られず
針千本のむ約束をした口だ
しょうもない男とおもう髪洗う
戸車がこわれています福の神

大和高田市　岸本豊平次

野仏の視界に明るい村がある
シルバーシート予備校生が眼をつむり
学生の頃の文字癖消えぬ嫁
墓よりも深い地階に人が住み
正座椅子持って法事の客になり

香川県　松村迷観子

他人とは思えぬ話陰で聞き
かかわりを避けて通れる道もある
筋書きの通りにならぬ春一番
平仮名の国にカタカナ語が攻める
親しさに笑い話で済んでいる

有田市　松井かなめ

五十年まで夫婦の余白不安ある
消費税を含めた額をへそくろう
桐の花色は好きだが高貴過ぎ
ヘアセットするとおたやん変身す
番地違えて宅急便が逆戻り

貝塚市　行天千代

花咲けば人も小鳥も晴やかに
花博へ花の趣味ない人も来る
衣替えサマーウールへ青い風
老い一人ストレス捨てる場所がない
就職の初日は親も落ち着かず

高知県　赤川菊野

過労死へこれが豊かな国ですか
ブーメラン戻る他人の顔をして
伴走のない人生の旅つづく
食べて寝て犬にもおとる昨日今日
ライバルも同じ願いの流れ星

京都市　松川芳子

自己主張女大きなイヤリング
物識りがちょいちょい腰を折りに来る
今日も又反省猿になり下がる
安らかな寝息に解けるわだかまり
花博へ行く風船が萎みだす

尼崎市　奥山美智子

切れ切れの言葉をつなぐ日のゆとり
会社では椅子取りゲームしています
春の鬱傘をななめにさしてゆく
興奮のほとぼりをすく髪を梳く
ささやかな奉仕献体するつもり

河内長野市　井上喜酔

限られた生命を知らぬ千羽鶴
断りの返事上手に電話切り
入院の母へ集まる三兄弟
相槌が知らぬ間に鼾かき
もう我慢できぬ娘の長電話

奈良県　長谷川春蘭

老連れは無口になりて花つかれ
春の雨駅の別れのあっけなさ
春を待つ心整わざるままに
吊橋の風と女に山笑う
草萌ゆる少年走り犬走り

箕面市　坪田紅葉

年の事言いっこなしと花の下
妹と亡母の思い出寒の餅
美人画の白い素足にある色気
美人ではないけど番茶出花です
迷惑をかけない程度好きに生き

高石市　浅野房子

看板の美人姉妹共に老い
ポケットで粉々になっていた喜劇
ビアガーデン ビール飲む人喋る人
袋帯締めた記憶の中の亡母
何べんも修羅をくぐってきた無職

宝塚市　丸山よし津

消しゴムが欲しいと思う日が暮れる
竹に彫る表札掛けて隠居する
駅員の帽子を脱げば老けている
窓際の椅子で季節が流れ行く
小雨決行みどりの駅で待ち合わす

島根県　堀江正朗

淡々と闇　一日の長い日も
蜜蜂の羽音は花の天使かな
酔うて寝て妻の声から朝を知り
盲人の夢は笑われそうなこと
寝そびれて雨に相づち打っている

島根県　小砂白汀

喜々として稚鮎は鬼の手になつき
ニュートンの説に従い椿落つ
折れそうでしゃんと伸ばせぬ蟹の足
ペンギンの歩く姿に似てきたぞ
なめくじが梅雨入り宣言して歩き

島根県　榊原秀子

雪の名の句集北から送られる
絢爛と牡丹の奢りみてしまい
たんぽぽの綿毛の旅を風にきく

ハッパかけられ冷えびえする私
風習を笑って世間へついてゆく

島根県　堀江芳子

追伸として大胆なことを書き
こんなとき泣かぬ私にする指輪
人間の不器用笑う蟻地獄
お茶ついで昨日のような事ばかり
七十の恋はあなたの寝顔から

島根県　石田清泉

屑籠の山に書作を左右され
七十路残り火燃やす書作展
雑念に脱字の写経阿弥陀経
老木に花も咲かして水墨画
人様が出るから出掛けて見たものの

島根県　松本文子

何があったのか白い足袋干してある
姑として見送る場所はきめてある
浮き世の義理つなぐ絆に切る絆
水っぽい涙で今日をごまかして
バッグの中で何かもめごとあるようだ

羽咋市　三宅ろ亭

無鉄砲という武器を担いでいる強味
七人の敵三人ほどに礼を欠き
我ときて遊べる者はロクでなし
石をもてブツ啄木の如きなし
君一つ空いてる仮面貸さんかね

静岡市　渥美弧秀

吾が歩み平凡なれど詩の世界
訪う客もない生活に老いも良し
本音聞く酒にとろりと山野菜
金バッジ晴れの受賞を記録する
妻病みきフルムーンまた遠く去る

十和田市　斉藤劦

五分咲きの桜見に来た戻り雪
花人にさせてはくれぬ核談義
先生の顔で君が代唄うてる
木の芽雨私のペンは眠たがり
カーテンにしだれ桜を借りて宴

弘前市　小寺花峯

心にも化粧が欲しい薔薇の花
席ゆずる声喉元でつまってる
雑念を裁ききれずに今日を生き
生きている笑顔泣き顔道化顔
会費制の招待客が足を踏む

米子市　石垣花子

海渡る汽車を見送るサヌキ富士
残されて部屋の広さへ寝つかれず
時計屋の壁も鏡も同じ影
水槽の女王夜店のあの金魚
闇魔から少し早目に来た招待

米子市　野坂なみ

プラトニックな恋お静かにおしずかに

恋文が万葉がなで読めません
初恋は貴女でしたとガキ大将
山菜のありか小狸知っている
歩き続けてれんげ畑で眠りたい

米子市　政岡日枝子

喝采の海に溺れないように
老兵にもう声援は届かない
樹を燃やす話はとても言いだせぬ
ミシリミシリと家の割れる音がする
足が痛くて鳥の仲間に入れない

米子市　田中亜弥

真っ先に母を背負って逃げ出そう
花粉づけ梨はほどなく実を結ぶ
人恋しゅうてとうとう声を張りあげる
結びめが解けぬまま春から夏へ
オーデコロン恋をゆすぶる匂いして

米子市　菅井とも子

頼られてもつっかい棒が頼りない
登る山あるので夢が捨てきれぬ
宍道湖の夕陽恋しい都市砂漠
カーネーション届いて老母の皺がのび
子の夢を少し修正して見送る

米子市　青戸田鶴

パレットへ五月のみどり溢れさす
いのちめくるように暦が薄くなる
まぶしい陽私の老いをきわだてる
温かな貌した人と手を結ぶ
少女から女に変る髪をゆう

米子市　光井玲子

ひたむきに生きた証を子に譲る
さわやかな出会い緑に満たされる
二人連れ淋しくないね仁王さん
紫陽花は太陽だけに気を許す
大きな声で言える自由がありがたい

米子市　川上より子

愛の雨　日毎に毬が鮮やかに
地球自転す幸せは輪廻かな
草ごよみわが菜園で諳んじる
にこにこと白旗振られても困る
初恋を明かし母と子の絆

唐津市　田口虹汀

歩に弱い桂馬個性は知っている
度胸より金が欲しいと妻は言う
横道じゃないぞと蟹は強く言う
案山子から見れば優柔不断なり
川柳のような返事が跳ね返る

唐津市　久保正敏

待つだけの暮しに猫も養われ
成田着内気な婿を誂にする
マドンナが女は度胸と言うている
連休の団地まばらに灯が点る
謙信はガスを止めたりなどしない

顔の泥自分で塗ると落ちません
僕の舌二流で閻魔目もくれず
お銚子を振る頃妻が席を立ち
転勤へニックネームがついてきた
初七日の帰りにひとつ裏話

唐津市　仁部四郎

連休で埋めた唐津の駐車場
休耕田補償へ農政不備を埋め
無農薬菜振り向かぬレジャー客
村起しUターン雀も翔んで来た
未だ審議中です軒場むら雀

唐津市　筒井朴竜

天があり地あり未来へ子が育つ
鶯が鳴けば朝寝もしておれず
和洋混飲して胃袋のストに会い
色褪せて散るを忘れている造花
四連休どこまで続く渋滞か

唐津市　浜本義美

口下手が差出口には並以上
賞められる時こそ油断ならぬとき
使い捨て温い心も使い捨て
結婚と葬の日べた賞め面白し
山路来てふと小虫らの生活見る

唐津市　浜本ちよ

春夏秋冬心に留めてほほえもう
しあわせを悪魔も嫉妬するらしい
ふるさとに佇つあの辺りこの辺り
肩パットはずして女の物語
糸たぐる未来が光る未来が踊る

岡山市　川端柳子

だんだんと事勿れ主義追うも老い
可愛げのないおいぼれかふり返り
髭をそり下着かえてる医者行く日
横道を歩き拾うた人間味
お互いにアベック連れを見較べる

岡山市　井上柳五郎

罪裁く神の手綱が優しすぎ
みんなして百姓騙す罪つくり
闇を漕ぐ罪滅しを陽にさらす
罪深いメニューを追うて来た余生
罪のない海を野心が埋めていく

岡山県　小林妻子

見解の相違だ笑うて済まされる
母の指一本ずつに積む歴史
牛歩よし生きて悔いなく踏みしめる
紀子さんスマイル大内山の若返り
誠実という財産と生き残り

岡山県　矢内寿恵子

アルバムの昔の僕はよく笑う

岡山県　荻野鮫虎狼

バス乗場妻も他人の顔で待ち
花嫁に合わせ姑の道歩く
吟行会酒一杯のおつきあい
下手なのが一番に来た筆供養

岡山県　山本玉恵

流れ矢をくぐって義務も果たさねば
近道で昨日の人とまた出遭う
長生きをして良いのやら悪いやら
野心一つふくさに包み歩を早め
模索ばかりつづけてゆるむ靴のひも

岡山県　千原理瑛

忘れよう切れた絆はもう追わぬ
私は私なりに五月の風を吸うている
馬鹿でいい馬鹿は馬鹿なり意地もある
霧雨の中愛猫二匹土葬する
愛猫二匹土に還して雨しきり

岡山県　二宗吟平

ユーモア度チェックで知れた脳硬化
講演が老いの涙を絞らせる
本番がパス辷り止め落ちていた
下宿先電話もつけて親心
今昔の思い新婚空の旅

寝屋川市　江口度

松若葉千のローソクたててくれ
鏡見ないで他人をブスという妻で
もう孫に夢托すしかない妻で
妻の切り札風呂敷をすぐ広げ
ポルノ館出た明るさは罰なのか

寝屋川市　稲葉冬葉

間違いの電話にしては詫び上手
男性が誕生石を聞いてくれ
長生きをする気にさせる漢方薬
来世は男と決めた夫婦岩
付和雷同に踊らされ日は暮れる

寝屋川市　岸野あやめ

寝たきりを切なからせて花便り
電話口お顔が見たい声美人
この美女に案外野暮なおつれあい
老人の旅はめいめいサロンパス
大陸の武勇伝など灸屋で

岸和田市　福浦勝晴

連休は雨それでよいそれでよい
飲んで食うてうだうだいうて寝て仕舞い
諍いに行くひと爪まで染めてはる
勲章は貰えず番付にも載らず
インフレが何だはだいぶご銘酊

岸和田市　原さよ子

待っていた春花粉症を置いて行く
仲人の務め果したうまいお茶
花嫁のパパにもママにも似た笑顔

ただ歩く萌える若葉が嬉しくて
母の日のなかった亡母へ紅い花
岸和田市　古野ひで

たまに会う嫁の甘えに心溶け
お隣はまたも仔犬を飼いはじめ
茜さす帰路ルンルンの軽い足
夢の中一期一会の人にあえ
忍従の亡母の暦に春がない
岸和田市　高須賀金太

にっこりと笑って女斬りたいね
銀行の扉がかるいボーナス日
美人には電話番号訊いとこう
死ぬときも金で序列をつけられる
紫陽花が咲いた貴女は過去の人
岸和田市　岩佐ダン吉

緑消える地球の涙知ってるか
野良犬に当てあるらしい歩きぶり
小選挙区制狸が指を折っている
プランだけでついに連休消えました
連休にもてていました水車小屋
鳥取県　林露杖

桜芯踏んで無人の駅に佇つ
もう疾うに易者予言の年齢を過ぎ
老いらくの恋はセピア色の思慕
人間の不遜憐れむ鶴の首
相槌は打たぬ孤高の鶴の首
鳥取県　松下たつみ

波紋のなかで一人腕組む石になる
迷惑な催しもある案内状
ブランコが帰り一気に夕暮れる
足踏みを止めぬ男にチャンスくる
唖になる夫婦歩みに春がない
鳥取市　両川洋々

ときめきへ仮面のヒモを締め直す
広域出向そんな踏絵は踏めません
ポックリ寺の前でばったり逝ってやる
精力減退妻が重荷になって来た
ばったりと地獄でいやな妻に逢い
鳥取県　森山盛桜

まっすぐな道しか見ない鬼瓦
せせらぎを聞くも聞かぬも吾は吾
やいば未だ爪切りの刃に甘んじる
水煙血煙人は生きている
太陽に見せる帽子を買ってくる
出雲市　吉岡きみえ

花言葉あげて誤解されたらし
小袖にもふくらむ風は春のもの
肩のこる話はしない五月晴れ
春の風一層辛い歯の痛み
恋人のひとりやふたり春だもの

出雲市　園山多賀子

朧月愛は確認出来ません
背の丸みいちばん気にする御当人
献体の自己満足に独り住む
十指からこぼれて落ちる自我がある
五月晴れ明るい嘘が言えそうだ

出雲市　久谷まこと

一雷に春の眠りを浅くおり
一雨に道路もしばしかげろえり
影ぼうしこぼした愚痴は耳貸さぬ
笑顔だけ写して鏡伏せておく
風化した噂を風があおりたて

羽曳野市　榎本吐来

初老乗せるバイクに朝の音を聞く
コップ酒少うし法螺を吹いてみる
旭屋の辞書で盗んできた新語
心ない相槌打った春の鬱
ラッシュアワー脂粉気になりまだ男

羽曳野市　佐野白水

草津温泉（三句）

ここも過疎草津の湯もみはみな熟女
湯もみする熟女の腰のたくましい
人魂が出そう西の河原の湯の煙
妙義山でさくら前線つかまえる
小さい雀の土産の葛籠大き過ぎ

羽曳野市　田中透太

連休の疲れた靴を磨いてる
鬼の首取らぬ男を飼っている
四捨五入しても好きにはなれぬ人
気まぐれな男と植えた枇杷の種
言い訳はしないがあなたにも落度

羽曳野市　吉川寿美

矢を弦につがえたままでたそがれる
自画像の翅を小さく折り畳む
口止めの酒をうかうか酌ぎこぼす
ジャンプまでボクの助走路長すぎる
下手な嘘に騙されてやるのも情け

西宮市　奥田みつ子

先生と呼ばれパチンコしそびれる
先生の先生のこと聞かされる
大好きな先生ママも好きと言う
若葉道何かいい事ありそうな
若者の愚痴はギターの曲にのる

西宮市　秋元てる

散る桜いよいよ細いこけしの眼
以って瞑すべしといけるかこの迷い
愚痴止めた妻がだんだん怖くなる
敵の手に握られていた縄の端
自分につける鈴の大きさなど思案

八尾市　宮崎シマ子

父の強さを童話で聞かす母子家庭
給食の小母さん子供ないそうな
おさまった夫婦喧嘩に夜泣きそば
当てずっぽ言えばにっこり笑う彼
亡妹の下手な手紙を読む涙

八尾市　鷲見章

草笛よ少女に還る揚雲雀
弥次馬へどっと火の粉を吹いて見せ
爪楊子和菓子がこぼす季節感
老眼へやっと踏み切る広辞苑
草の名は確かに老妻の記憶力

竹原市　岩本笑子

危機いくつ乗り起え妻の丸い鼻
バカだなと思う日影法師が長い
一面の緑よ末っ子が巣立つ
私は私よ双生児の自己主張
葉桜の下で握手が離せない

竹原市　信本博子

笑い方知らぬ仁王の立ちんぼう
焼き芋が好きと言ったら笑われる
赤ちゃんの笑いへ笑うほかは無い
株安へ泣いている友笑う友
高笑い重い空気が動くだけ

姫路市　大原葉香

桜咲いた散ったで今日の記事が出来
鯉のぼり女系家族にある嫉妬
山からの烏の便り淋しすぎ
傲慢なインタビューする二重顎
数学が得意で融通きかぬ人

姫路市　丁坪サワ子

旅なればこそお言葉を交わす幸
ゴールデンウィーク知らない母の割烹着
健康食品これから何を信じます
道具立て出来た芝居にだまされる
究極の疲れ父さん子供の日

姫路市　中塚遊峰

人の名が仲なか出ないじれったさ
行くまでにちと疲れたり旅鞄
山の湯は我待ちしよな八重桜
籐椅子に雲海一人欲しいまま
たとう紙の紐解かぬまま花は散る

藤井寺市　福元みのる

老人へ老練と言う褒め言葉
老いて子に従うような親でない
釣好きが釣った魚を口にせず
自己人生真の占い師は自分
ジャンケンポ最初出す手が本音です

堺市　柿花紀美女

新社員の鞄だんだん重くなり

亡母の歳越して坂道きつくなり
節約の美徳が隅へ追いやられ
躊躇無視ぱっと開いた自動ドア
次々と青信号で今日の運

守口市　結城君子

あらだきの匂い鼻から帰宅する
さみどりの野に想いはせ山独活を貰う
地の豌豆出るまで待って豆御飯
夏茶碗遺品となりし風炉点前
青梅や真白きカッポー着の亡母よ

吹田市　栗谷春子

若葉の旅におとなり漫画よんではる
新茶摘む人も私も春霞
すれ違う籠に新茶の静岡や
残して逝った薬を捨てられるでしょうか
現実が押しよせてくるそろりそろり

豊中市　辻川慶子

三井寺の鐘ミシガンで聞いている
夜桜に旅情が冷える宿の下駄
碧い海一度は見たい竹トンボ
蟹の泡思わぬ事が多すぎる
きれい事底のへどろの幸不幸

神戸市　山口美穂

老母と語るあうん呼吸がままならず
夢醒めて肝腎なとこがわからない
自分史に秘めておきたい小さい傷
雑魚の群れにもルールがあるらし遡る

唐津市　山口高明

このままに永眠(ねむ)れば楽と捨台詞
またひとつ苦労が増える縁を持ち
記念金貨にむらがる蟻が火をかぶり
雲水の衣は風に逆らわぬ

神戸市　仲どんたく

連休の輪からはずれてテレビの子
うだる夜を風神雷神粛清す
おっさんの時代もはるか南無阿弥陀
芳紀まさに八十歳と言うてみる

倉吉市　野中御前

安売りはしない美人に薹がたち
家中によろこびの風サクラサク
油断すなカラスがそばにいるらしい
百までは覚えていない旅枕

高知市　北川竹萌

夫婦個々孫結婚の留守を守る
鼻唄で摘み終える日の茶摘唄
手づくりの新茶へ礼が先にでる
五月空故郷は遠くで思うもの

諫早市　原田メイシュン

熨斗紙を替えて御中元すましとき
せかされて嫁ぐ気のない生返事

言い分もあろうに嫁のわびる顔
PTAよくしゃべる顔ばかり来る
弘前市　真喜内　實

嫌なこと右手で顎を摘み言う
デパートで座って休む場所捜す
腹割ったように見せるもテクニック
もうなにも言うまい妻よはよう寝よう
大阪市　塩田新一郎

掛軸の滝は決して涸れはせず
春眠だいっそ昼まで寝てやろう
人間は何故死ぬのかと生きて居る
資本主義知性も汚水もたれ流し
大阪府　坂口公子

海苔巻きになって初孫顔がない
私の気負い許さぬ万歩計
高峰三枝子の二の舞ちらちら落ちつかぬ
笊さげておうな絵になる海苔岩場
大阪市　坂本仙吉郎

山陰の旅

額縁に嵌め込んだ如く春景色
大山の登山道路に残る雪
標高九百開拓農地黒い土
登山道左右にブナの原生林
大阪市　町田達子

紫陽花のつぼみ生き生き雨を受け
ふっと浮く采女の大和物語
孤独感匂わせ花博の青いけし
ペーパーアートにオーロラを追う午後の椅子
大阪市　冨岡温子

素晴らしい話題もなくて喫茶店
下積みの傷みを分けた日の仲間
ニュース欄明るい記事に飢えている
特売の雰囲気に負け無駄を買う
大阪市　松永すすむ

花の雨心地よさそな地蔵さん
只管にそうかそうかと聞きながす
似て来たとつくづく思う父も子も
旅疲れ空にひとはけ茜雲
和歌山市　細川稚代

一瞬の出合い大事な雨の夜
連休にまだすてきれぬ置きごたつ
明日香路で石の言葉を拾ってき
止り木でわけありそうな二人づれ
和歌山市　木本朱夏

スタートで躓きゴールでまた倒れ
結婚退職などと啖呵を切りたいな
手土産の分だけ愚痴をおいてゆき
それぞれの旅の始まり桜散る
和歌山市　山川克子

痛い程解りますとは体験者

よくもまあ八方美人の美辞麗句
それからの扉につけたのぞき穴
他人から見ればなんでもない悩み
和歌山市　内田結実

摩周湖が霧へかくれた夢語り
初採りの茄子へ糠床よい加減
初鰹嫁の実家が串本で
母の日の花だけ届く距離でいる
鳥取県　土橋はるお

安売りのうまい調子に乗っている
ひたすらに古い時計のネジを巻く
白蟻が新築祝い持ってくる
父さんの男結びは俺が解く
鳥取県　江原とみお

個性ゆたかにスリッパがぬいである
葉ざくらの頃にでてくる裏ばなし
お隣がそろそろクシャミする頃だ
大根の花がきれいはおべんちゃら
鳥取県　羽津川公乃

順番に女の春を知りました
逆縁の子が順番を狂わせる
匂い袋はおしゃれ無縁な老母のもの
食べ頃の漬物石が重すぎる
鳥取県　津村八重子

夫に肩かして余生の歩をそろえ
こっそりと涙ぶくろは干しました
ハンドルよ急くなお守りゆれている
島根県　藤原鈴江

雨の音タップダンスをトタン屋根
野辺の花かれんでそして意地っぱり
夫婦茶碗並べてけんかもしています
喜寿近くビジョンをすこし変えようか
鳥取市　小谷美っ千

幸せのいちごは白い皿が好き
好きですといつも貴方に無理を言う
遊び上手別れ上手の視野にいる
一の矢をわざとはずした舞扇
倉吉市　渡辺菩句

花を見て孔雀を見てまた花見
花の雲から笑い声降って来る
あんれまあ電話のベルが天で鳴ったよ
酒の力が法螺をパオパオ吹かせてる
倉吉市　淡路ゆり子

素直には喜ばぬのが他人の癖
連休の留守番役を喜ばれ
安売りと祭の好きな嫁姑
民宿の井戸の深さを思い出す
寝屋川市　柴田英壬子

里がえり真珠のぐちは一つのみ

たとえばの話で好きな石を言い
余暇活用のヒントを読んでいる多忙
噴水で待つ人待たせた人眺め

寝屋川市　平松かすみ

この指へきっちりはめてくれました
誓詞読み他人の妻になりました
切り札はハートへ刻んでいる単語
上げ底を外すと直る肩の凝り

寝屋川市　堀江光子

思い立つ旅の荷物は画帖のみ
花かげが葉蔭にかわる待ち合わせ
ロボットを相手のような係員
快く仕事を終えた日のシャワー

出雲市　石倉芙佐子

花吹雪天女の舞や姫小袖
微笑んで振り向くはずのない人を
一枚二枚と愛は計れるものでなし
忘れ霜下弦の月は試される

出雲市　小白金房子

暴落の野菜現場で花ざかり
牧草の種まきほどよい風に会う
百姓に嫁いで愛す農の詩
鍬杖にひと時ふかす揚げひばり

出雲市　金村青湖

風は初夏街はおしゃれな顔になる
それからの噂話が風に乗り
生臭い髭を伸ばして糖に病み
人情の豊かな里に嫁がない

出雲市　板垣夢酔

米のコメ育ててチャーハンなどにうけ
涼み台出すと夜空は銀の星
石橋がチャンスの声に騙される
なぜなぜと子等が詰め込む知恵袋

出雲市　竹治ちかし

少しずつ重荷となって恋実る
兄弟もライバルとなる春の道
時々は子供にタクト振らせます
故里を愛して遠い地で暮らす

出雲市　園山良子

王将戦もゲームも負けて子供の日
水音にこっちを向いた白い花
五月晴れ父の青さと母の風
風媒花よく知ってたね母の庭

米子市　金山夕子

貧しさの中でおこぼれ受けている
いい女少なくなった路地の奥
五月の緑こころに染めて笛を吹く
月を見て跳ねる兎が帰らない

米子市　茂理高代

風光る二人で担ぐ荷は軽し

木の葉髪平凡だけを願う日々
反省は何時もしてます座禅草
負けるのが嫌で棘もつ鬼あざみ

米子市　白根ふみ

旬をかりたてるみずみずしきものへ
三尺も垂らして藤のひたむきな
黄昏があり安堵する翼たち
頬杖をつくと長閑な面となる

米子市　小村てい子

矢印の向きを変えたはできごころ
吾亦紅自我の中にも深い愛
不揃いの縄目一途に生きている
素直さが続く風車がまわる

米子市　木村富美子

大きすぎて地球影がみつからぬ
梨山を売る若者を叱れない
目を伏せる方が此の頃男の子
素朴な鉢で花が幸せそうに見え

岡山県　岩道博友

区画整理地価を上げたい人が寄る
バーゲンで靴を買ったらタコが出来
病む窓辺点滴綺麗に陽が映り
一日が経てば善意も無視せられ

岡山県　花田たけ志

年ですと逃げてもチョッピリある未練
宮仕えの過去は消したいものばかり
楽しさを空しさにする二日酔い
日中の交わり黄砂に似て霞む

岡山県　池田半仙

私なら只でもいらぬピカソの絵
新茶の香はや一年が巡り来る
蒜山はのどかジャージー草を食む
散歩兼ね青空市場一回り

岡山県　松本元江

今日を生きる今を大切に生きる
ホームシックにかかる静かな奈良の夜
絵筆にふくむ色は新緑みどり色
けんかにならぬ相手の深いふところ手

岸和田市　清野こう

亡夫の死へ励ます故郷の友の声
春爛漫花に背いて夫が逝く
あかしやの花咲き日毎亡夫を恋う
拝む背に孫も小さな手を合せ

岸和田市　芳地狸村

花博の花の香りに酔う二人
戻らない幹事を探している幹事
古民具昔話の老夫婦
ばあちゃんがひと花咲かすのど自慢

八尾市　山下美津留

連休の蟻はみどりへ旅に出る

親子だと言わぬばかりの瓜二つ
民主化を急ぐあまりの仲間割れ
古ぼけた眼鏡で世間見ています

宇部市　平田実男

定年の足へ地下足袋馴染んで来
人間の悲しさ同じ血が縺れ
裏切っても裏切られても眠れぬ夜
埃出ぬ人で大臣にはなれず

七尾市　松高秀峰

心では妥協頑固な父の首
懸命に勤めて花も実も成らず
ああ言えばこう言う嫁に似た孫で
二度の職重宝がられる軽い腰

福岡県　横地正好

直線に行きたい過疎に橋がない
脱サラが焼酎に馴染めなく孤独
雑草も弱肉セイタカ草が殖え
地下足袋が去って空かん独り言

倉敷市　田辺炎六

職人芸年期に花が咲いてくる
花嫁の涙は父母に綺麗すぎ
媒酌の席雑談の離れ島
母さんの美人になんで似て産めぬ

海南市　三宅保州

一言を大切にする初対面
噂広がって決断つきました
見栄という足場に乗っている背伸び
鉛筆を削れるように育てたい

西宮市　瀬尾六郎太

塾選びこれまた大変激戦区
春日遅々居眠る人よ中之島
ステイタス仕事三昧過去のもの
やはりねえ親の背な見て子は育つ

東大阪市　崎山美子

買いそうなポーズへもみ手ついてくる
負け犬の心に温い故郷の風
言い訳もないので少し笑っとく
ちっぽけな世界が老いには住みやすい

奈良県　中原比呂志

コーヒーの香りうれしいプロポーズ
川下へ流す善悪考えず
石仏のご加護とどかぬ魔のカーブ
雑学の一知半解役に立ち

今治市　越智一水

披露宴父の涙を見てしまい
田を売ってしまえと空かんほりこまれ
流行に一歩さがって世を見つめ
ファッションは平和の流れ世の流れ

富田林市　片岡智恵子

問いつめて哀しい事実知る破目に

穴ひとつ繕うための嘘いくつ
還暦へ趣味を加える二つ三つ
潮干狩り去年の場所は埋められて
守口市　森川まさお

町の音造り酒屋の前で消え
葱坊主冗談好きな連れができ
げんげ田に立つとおしっこしたくなり
教会の裏口簾がかけてある
黒石市　相馬一花

アンケート妻はうっかり酒に○
長生きのために女房と車間距離
アデランス買う金酒に化けました
狼の中から選ぶ婿養子
箕面市　椎江清芳

弔電は肩書き順に読んでゆき
上座から順番に抜く鮎の骨
故郷に桃の流れた川がある
特級も二級も同じ黄金色
伊丹市　山崎君子

連休を里の情けでうめてゆく
罪知らぬ虫と闘う花時計
いつまでもメロン一切れ冷蔵庫
五月晴れ空まわりする鯉のぼり
広島県　藤解静風

あきまへんか円安株安金利高
晩学の妻よ鉛筆削ろうか
しあわせが溢れてボケがはよ来そう
ネクタイを外すとにっこり笑えるぞ
川西市　松本ただし

肩の荷を下ろせばむなしく見える虹
知恵の輪を解き合っている夫婦箸
無菌室に育ち免疫持つ陛下
気休めに日にち薬と決めただけ
松江市　竹内すみこ

ようやくに独りに馴れて猫といる
言いすぎたことは自分で判ってる
職安へ行く日で今日もいい天気
すぐ人を信じてしまう風見鶏
茨木市　堀良江

手鏡の中で背中の児が笑う
子らの声弾む飛ぶ飛ぶ竹とんぼ
パビリオン避けてお花の中に居る
長谷寺のことなど牡丹苑に居て
高槻市　竹内花代子

長髪が顔にからむ満員車
はるみ節見てんね受話器切らされる
返金の千円戻る付録つき
蝶蝶も飛び交う観賞さくら草
豊中市　上田登志実

メーデーをすっぽ抜かして小旅行

老夫婦商う店でちまき買う
田植機のリズムあたりと調和する
紫陽花に繋がる想い懐しむ

豊中市　吉田あずき

入学金父の力も試される
万歩計つけて俄かにまめまめし
線乱とカタカナの花ばかりなり
ショッピング買わぬ修行も積んでいる

島根県　松本はるみ

出雲路に優しい風のへんろバス
その時に思い出すのは母の唄
利回りが良いかそうかと聞いただけ
絹百パーセント自己満足が歩きだす

島根県　北川民子

闘病に明治の女は音をあげぬ
夕焼けに酔うてる幸せ孫といる
浮き沈み鳴咽がもれる金魚鉢
秒針をうつろに追うて日が暮れる

大阪市　寺井東雲

若葉マーク制限速度無視してる
水垢は金魚の暮し楽にする
制服は停年前も折目ある

岡山県　直原七面山

初声は神の声
旅に来て旅に酔い
妻逝けど陽は昇り

和泉市　岡井やすお

母の日のパーティー母が後始末
一キロの太ったやせたで一喜一憂
役者の子役者力士の子は力士

豊中市　一瀬福一

よそ行きの顔できれいな嘘を言う
母と娘がうらはらで見るメロドラマ
描く思想それが正義であろうとも

広島県　田村新造

琵琶湖周航声が揃った船の上
周航の歌で琵琶湖が暮れなずむ
れんげ草枕に春の野に寝よう

出雲市　小玉満江

蝶になりモデルになってぼたん園
休暇明けくずれるようにぼたん散り
連休はどこへですかと合言葉

吹田市　茂見よ志子

夕刊を待ちかねている怠惰な日
相槌をどうせ打つなら間合よく
勧誘に保険年齢過ぎました

十和田市　阿部進

母さんが居るから温い茶の間の灯
椅子とりをあきらめ雑魚の群れに居る
予定ない日曜の空晴れわたる

岸和田市　三輪通彦

子宝も重荷適齢期が三人
落ちこむとすぐに神様ほとけ様
求人欄読んでも歳が邪魔をする

鳥取県　谷口次男

矢面に立った男の潔さ
ドブ掃除新興団地にぎやかに
外面と内面腹で睨み合う

鳥取県　乾喜与志

療養をして空腹の有田焼
快気祝だろう躑躅も咲きそろう
核におびえて地球も老いを見せている

弘前市　村田善保

病人へ明るい話題だけ選ぶ
核心にふれて絆を確かめる
暖かい嘘で病床励まされ

出雲市　河原恵美子

となりまで振ったタクトが折れました
これはこれとこのセリフでいつも負け
まっすぐに我家に帰る犬の足

河内長野市　植村喜代

他人には親切まわり道もする
はずかしい握手された手の温さ
ベランダへ山の空気を吸いに出る

鳥取県　田村きみ子

ひまわりの苗植えました楽しみで
広い世間に娘の婿が見当らぬ
十八の孫に聞きたい事がある

鳥取県　さえきやえ

花句会市長も一句添えて輪に
一期一会はらんだ猫といるわたし
死んだっておもろないから生きてやる

奈良市　米田恭昌

僕健康見舞帰りの深呼吸
にらめっこ鯛のおめめと孫の目と
我が家にもペレストロイカの風が吹く

島根県　小田川智重子

同窓会課長に助役に議員さん
日展でコスモス見つけてほっとする
一坪へ無農薬菜園するつもり

竹原市　石原淑子

菜種梅雨訃報が続くまだ止まぬ
ひさしぶり親子ごっこの九州路
お別れは逢う日の為の一里塚

和歌山県　西口忠雄

豪遊の男にまぶす塩加減
買いたくはないが隣についてゆく

自選集

日本中ゴルフ場とは苦々し
我は関せず円安も株安も
空白が多く日記も齢をとり
叱られて薬を飲んで酒飲んで
虹の色ほどのカプセル掌に並べ

工藤甲吉

押し入れの隅のすみまで五月晴れ
新聞のコラムを読んで納得す
長い目で見てくれている靴スベリ
ぼそぼそと私の恥を書くペンよ
夫にはまだ褒められたことはない

小出智子

松籟のさわぐ大内山静か
万感を君込め給えふるさとだ
杯に膝が崩れて主義が無い
脱ぎ捨ての靴を揃えんのか市長
舌の根を洗うてにっぽん人となれ

水粉千翁

めがねには叶うが値段へ手が出ない
面倒をかけっぱなしで栄転し
喜んで貰うプランは伏せておく
吊り橋の長さ悲鳴が谷へ落ち
匙投げた子が面倒を見てくれる

辻白渓子

口喧嘩呆け封じの薬かも
風化する明治うまれが生き残る
武装などいらぬ屋台で飲める酒
肩書のある葬列が派手に出る
酸素吸入妻の命の音がする

岩本雀踊子

てのひらを返すと噂満ちてくる
陽ざかりを避けて妥協の道を選る
言い勝って突然意見に素直にて
大門の仁王の吐息すり抜ける
口喧嘩昔とかわり無いふたり

児島与呂志

一と皿の好物姑は騙しよし
銀行でお茶をよばれたことがない
青空へ内緒が言えぬ揚げひばり
ジーパンのやがてこの娘も母になる
病む夫の目に答えなしつつじ咲く

遠山可住

どの顔も疲れています通勤車
照明のスイッチ一つで夜にする
階段の下りが怖い後遺症
披露宴帰りとわかる紙袋
図書館でしばし休息する散歩

野田素身郎

雨の日に届く短い手紙だが
とりあえず傘屋と結ぶにわか雨
手をつなぐ肩を濡らした神さまと
結びめを解けば疵だらけの紐で
蟬の駅　若葉青葉の木隠れに

八木千代

一か五かお前に任すご仏前
兄の死へ逆算の指雨しきり
天寿全う時計の中の乾電池
頭撫でられる息子を見たくない
長話そろそろ底を見られてる

大矢十郎

シグナルの青へ過信はしておれず
年金になって話題は湧いて来ず
蓄えは無いが笑いをもつ家族
負けて勝つゆっくり眼鏡の玉磨く
シグナルの赤へ台本急遽替え

月原宵明

片手拝みでスピード落とす事故現場
ボスの顔汚すくらいは気にとめぬ
大きく深く溜め息の果て石となる
拝むよりほかなし葛藤無視できぬ
幸せが続く息吐く暇もない

野村太茂津

お化粧をしても生活の藻が消えぬ
トラバーユしましょう風が呼びにくる
六十歳毀誉褒貶にゆすぶられ
月の夜の砂絵は蟹がつくります
紫陽花の里に住みつく老教師

波多野五楽庵

初夏の風足の痛みにまだ懐炉
割勘でもこの男とは分が悪い
勘違いでもいいのんよ狂い咲き
すみませんの言葉素直に出ぬヤング
俺も長老か乾杯を頼まれる

金井文秋

セールスのお世辞にじわり攻められる
ささやかな善意名前は伏せておく
新人の靴がこれからちびてゆく
胃カメラを呑む絶食へ気が重い
たすきにも帯にもならぬから迷う

小林由多香

高野山群雄仲良く眠らせる
針のある一と言急所をよけて刺し
冷汗と脂汗とがにらみ合い
孫たちよ後に続けとラッパ吹く
島の空だけしか知らぬ雀の子

本田恵二朗

奥山のみどりはバスの客を待つ
少しさびしい別れを励まして握手する
息子の門出へ前進を説いておく
若い頃の写真が一枚もない不思議
種に苗植えへせわしくなる畑

藤井明朗

宝石より涙が光るときがある
年金の単衣一枚風邪を引く
うつされた風邪が嬉しいなどぬかし
ドラマから貰った台詞で試してみ
悪口も言える素顔の恋になり

有働芳仙

気の毒なことをしたとは皆思う
花便りあそびに来いとは書かずおく
忠告にきたとは言わず靴をはく
みどりだけの庭の広さのなかに居る
たたみいわしを土産に春の旅終る

正本水客

労ってくれる子がありまだ死ねず
一斉に咲き不揃いな林檎たち
煩くて聞こえぬ方の耳を貸す
農学校出ても自営の子がおらず
それとなく諭してみても馬の耳

久家代仕男

星まつり重たくたわむ笹の枝
餌やったばかりに転がり込んだ猫
鈴の音が石段降りて来る旅情
名鐘の余韻静かに古都暮れる
泥酔の男の涙をふとみつめ

藤村〆女

嘘の句の出来てた頃はまめだった
身動きが出来ない鬼が患いて
患いてしみじみと七十四
いのちふわふわ五七五になりませぬ
見てもらう句が出来なくて寝てばかり

山内静水

ときどきは雀もこちら向いて来る
いつ来ても山はいいなとひとりぼち
借景を毀す工事の音がする
手を借りる坂　階段もまた楽し
炎えているなどと怖いことを言う

黒川紫香

世の中は人情だけでないらしい
あばら骨鬼が鬼見て笑うなり
四十九キロ肩で風切るほどに痩せ
あげまんの妻が用意の墓ふたつ
いちにちを生きて一つの罪を負い

高杉鬼遊

平凡という幸せに掌を合わす
買うてから万を越した事ない万歩計

母の日に（三句）

母のない子にカーネーション赤過ぎる
絵日記へ母の日の母に白いもの
何も要りません電話一つを母は待つ

松川杜的

うっとおしおますなだけですれ違い
何べんもおんなじ人と会う日なり
諦めた筈が呑み屋でぶり返し
遊ぶのが上手でらくなおじいちゃん

阿萬萬的

水子ぞろぞろ水子がやがや白昼夢
寝たままで好いと見舞いが気を使う
損得が絡み本心出しそびれ
いつからかゴルフに凝っためくら判
知らぬ間に保険かかっていた養子
役不足だと自分でもそう思う

河内天笑

半分は妻のおかげという賞与
不機嫌な箸から逃げる冷奴
人妻と裸の交際とも言えず
老妻にあんじょう口を封じられ
七人の敵目裏に抱く自信

西田柳宏子

第14回

茗人忌川柳大会

とき　8月26日（日）午前10時
ところ　鳥取市富安　鳥取工業福祉会館「鴻南閣」
（鳥取駅南口徒歩5分）
お話　吉岡　美房氏
兼題
「鍵」　河内　天笑選
「指」　堀端　三男選
「泡」　河内　月子選
「壁」　小林　妻子選
「鏡」　八木　千代選
「甘い」　小林由多香選
「蛙」　福代　天雀選
（各題2句、席題なし）
会費　3,500円（作品集・懇親会・昼食含む）
投句料　1,000円（作品集呈）
8月15日締切
〒680 鳥取市相生町3丁目204（森田熊生方）
うみなり川柳会

秀句鑑賞

―前月号から

児島与呂志

―同人吟

花咲けば咲いたで偲び散れば又

石垣花子

ひたすら彼をいとおしむ心の句だと思う。しかし、その絆は戻ることはなく、ただ偲ぶしかない彼である。それを大事にしながらも新しい貴女の句がほしいと思う。

ワンクッションおいて言葉の棘を抜く

西出楓楽

人は言葉の棘が相手に刺さることを案外、知らないのではないだろうか。その棘の痛みを知る句主だから、言葉を使い分けるゆとりを持てるのだろう。ワンクッションがいい。

触れた掌に微かな迷い打ち消され

松原寿子

話す時に触れる掌は、指の一つ一つの動きにもささやきがあるらしい。迷いを打ち消すほどの思いではなくても、相手には伝わる。

念のため打った一目だけ敗ける

樫谷寿馬

欲にからんだ一目が邪魔になったのか、それとも本当の碁の布石だったのかは、碁を知らぬ私には分からないが、念のため…で敗けるというのが面白い。

向うの鏡にあのオバハンは誰あれ

永田俊子

いつまでも若々しい句主の中に見た面白い自分であろう。キャベツを二つに割る、辞書の「ん」に重みを感じる貴女は、いい女だと思う。人生は重いよ。

裏切った人を許した花の雨

恒松叮紅

人は人を裏切る時、その人はとうに忘れていた人だったらしい。一寸ややこしいが、物事はそんなものだと私は思う。それで花の雨だけで裏切りを許せるのだ。いい句である。

ひと通り掃除が済んだ陽の高さ

都倉求芽

昼前に掃除も済ませて、さてそれからが女の…という心構えだと思うのだけれども、はたして句主の句意や如何に。

ひと言を足してもろうて借りができ

河内月子

そのひと言は借りではなく、返してもらったのだと思う。常に心安い人間同士の貸借は情けのうち、私はこの句の情けを「足してもろうて」に感じる。

見えた日を追う愚かさと知りながら

堀江正朗

正朗さん、それは愚かさではないんだよ。いつまでも見えた時を追い続けていなければ芳子さんの支えが、笑顔が消えるのだから。

ほろほろと心とけゆく春の酒

堀江芳子

いつまでもありがとう。父さん大事にね。

美しく勝つべし強いだけでなく

本間満津子

心のつながりの句として、秀句だけを追うのではなく、この句に弱者に対するいたわりの心を見る思いがする。強いだけではなく、勝ちたいと思う心を句に託してください。

かがり火に物狂おしく桜舞う

木本朱夏

例年になく桜の候が早くて忙しかったこの春、かがり火の中の桜を桜と感じられた。今年の春一番だった句だと嬉しく心に秘めて。

スギナにはなりたくはない土筆坊

田中正坊

人に疎まれる杉菜、その胞子の茎が春の土手に筆の形をして生えるつくしんぼ。食用にもなるつくしだが、いつまでも土筆坊のままでいられないのが世のさだめ。

つばめの巣五百羅漢が見ています

羽原静歩

しんどい事がいっぱいあった頃が花

内芝登志代

世に散らぬ花なし人もまたしかり

佐野白水

川柳太平記 (146)

川柳の群像

内藤凡柳

東野大八

「大正十一年秋のころ、日車・半文銭が興した『小康』は、番傘から蹄二氏が走り、蚊象も加盟、これらの番傘同人を加え、革新川柳の旗を堂々と押し立て勇ましく立ち上った。

番傘一辺倒だった若手で期待の同志麦郎・刀三も『小康』の同人に迎えられ、つまり番傘の古参、熱のある若手現役の主要メンバーを陣営に入れて『小康』が誕生したといえる。番傘の句会にこの新勢力が押しかけ、番傘の会が小康の会の如き句会に終始した。僕はこのような空気を、何ともいえぬ淋しい気持で見守らざるを得なかった。(略) 大阪の柳界の空気は、新風に見える『小康』に一番打撃を食ったのは『番傘』であった。

大阪の柳界がこのように風雲急を告げる頃のある日ある夜、所は戎橋の上、橋筋に向って中央北寄りの、東側の欄干によりかかった夢路・水府と僕(凡柳)―。水府は番傘運営上のこと、現状のこと、今後の話を持ち出された。夢路はまだ番傘の同人ではなかった(というのは愛誌『はこやなぎ』を自分の手でつづけていたし、それにはやはりけじめというものがあるし)。夢路は、かくあるべきことを自分の胸に描いていたのであろうか、『はこやなぎ』を番傘への合併の形をとって、廃刊の決意を即座に批瀝したのである。

この瞬間は、永久に番傘の社史に残る戎橋上の会談である。けじめをつけて夢路の血は水府氏を助けて番傘へ集中したのである。円満なる人格も手伝って、水府のよき女房役として存分に、番傘を大きくしたことは歴然たる事実である。水府も恩人夢路を大いに銘記せねばなるまい」(『番傘』昭32・8所載〝はこやなぎから番傘へ〟内藤凡柳)

凡柳が折りにつけ興に乗ると、必ずこの話を持ち出す。「大正十二年夏のこと、ところは戎橋三人男誓いの場」は右のとおりだ。時に凡柳22歳。夢路25歳。水府29歳。この一幕は、川柳無限なる凡柳回想録にもある。

「夢路さんなら聞いてくれる、やってくれると思い、水府居から散歩、戎橋の川風に吹かれながら、長い話の三人はミナミにキタに浴衣がけの人の流れに逆らう三本の杭のように私たちは話しつづけた」

番傘一筋の内藤凡柳にとっては、この一件は生涯忘じ難い鮮烈の思い出にちがいない。

凡柳・内藤喬木(たかき)・明治34年7月25日大分県別府市生れ。大阪へ出て住込み奉公中の十七歳から番傘川柳に手を初め、戎橋の一件のあった翌大正13年帰郷。昭和7年大分新聞(豊州新報と併合して現大分合同新聞)に水府選の柳壇を新設、しばらくして凡柳選となる。戦後OBSラジオ・モーニングエコー川柳放送などを兼ねる。

戦後といっても全国の日刊新聞はタブロイ

ド判時代（朝刊のみ）、その最中の昭和20年9月に凡柳選の柳壇が復活していたのだから相当なものだ。このため、終戦の年の12月中旬に別府駅前旅館で初句会を開いており、これが翌21年3月の『川柳文化』の柳誌発刊に結びつくのだから、凡柳の若い川柳人育成とマスコミ面への働きかけの実力はけだし注目してよい。

凡柳は別府市内で食品店を経営していたが終戦直後で商品がほとんどなく、家の一室は若い川柳志望の連中の溜り場になっていた。この中に海軍から復員したばかりの斉藤清幸（後の番傘編集長）がいた。彼は兄弟六人の五男、奇蹟的にも一人も欠けることなく一同無事復員、このため清幸は父親とソリが合わず、三か月も凡柳宅の若衆宿に居候。その彼の働きによって『川柳文化』が誕生した。

『柳宴』（岐阜川柳社刊）の昭和60年5月号から「なんでも日記・川柳文化始末」を三か月にわたり連載。以下そこからの取材。

「21年1月本屋で見たなんとか文化という雑誌の文化を頂き『川柳文化』という名を勝手につけた。創刊号は三月十日菊判16頁五百部でヤミ紙捜し。小倉の新聞通信社に頼み、九州各県に誌友募集の広告を出す」

などして24歳の清幸は八面六臂の大活躍ぶりは涙ぐましいばかり。結局、23年10月大阪に清幸が転勤、後事を手島吾郎に托したがその一年後、吾郎も北九州に移転したため、同誌は誌数42号をもって廃刊する。創刊暫くして、表紙に「別府番傘川柳会発行」と刷り込まれ、発行責任者は内藤凡柳になる。

この川柳文化社主催で23年6月別府市朝見八幡神社で全国の著名柳人80名を集めて「西日本川柳大会」を盛大に催している（筆者も前田伍健一行11名と愛媛県から参加）。

凡柳は若い柳人達の選句は厳しく、むしろ硬骨なほどで決して妥協しなかった。このため熊本の読者からきた句「二、三人乗せて米軍専用車」の凡柳選が検閲に引っかかり、清幸はGHQ出頭という痛い目にあっている。

「雅号凡柳について昭和57年発行の『大分県川柳の歩み』の中で述べられています。平凡・凡人・へいへい凡凡と人並みという句いの字義に魅力を感じ、柳は風の吹くままに雪折れもせず、我を張らずに自然に順応の質が好きで合わせて凡柳とした」（正田青峰）

「かつて番傘同人句集で、知情意の何れを採るかとの質問に際し、同人の多くは情の川柳と圧倒的に答え、私などは川柳から情をとれば何が残りますかとイキまいたものであったが、先生は強いて申せば私は意の川柳でしょうと言っておられた。成程、先生の作品は意の川柳が多い。然し、意の川柳に徹するには確たる信念と、目的を表現する基礎がなければならぬ」（尾花白鳳）

「生まれ来た裸のほかは世の恵み　凡柳」

先生の代表句で、おそらく後世に残る名句でしょう。

四人の子育つ選手も歌手も居ず　凡柳

選手や歌手の派手な子供はいなかったが、日本鋼管の工場長や東京工大の教授など、四人の子供は立派に成長しています。

八十八年の生涯はほとんど湯の町、別府で過した心境が「かろうじて住めば別府を羨まれ」の句に少しユーモアに描かれています。惜しまれることは、奥さんを亡くしてより七年近く独り暮しをされたが、みんな東京に住む子供さんが案じて昭和63年子供の家に移り住むことになり、一年半で東京の地で亡くなりました」（手嶋吾郎＝以上「番傘」誌悼文）

平成元年12月2日死去。享年88歳

奥別府志高湖畔に凡柳句碑建立（昭44・11）

我が生くる幸志高の地由布の天　凡柳

▼次回は「**若本多久志**」

柳籠裏三篇研究（四丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

55　**すけやすよそこにおきなと糸をこき**

岩田＝「すける」は『俚言集覧』に「助他又酒令也」とあるように、元来は助ける意であるが、酒の作法にも言う。「糸をこく」は「糸をしごく」ことであるが、ここは三味線の三の糸であろう。糸を張る前にこくものらしい。さした盃をおさえられて、弱っているのをその男に惚れた芸者でもあろうか、「私がすけやすから、ちょっとそこに置きな」等と言って、三の糸をこいている、というところか。

佐藤＝賛。「糸をこく」のは、新しい糸をつけかえた時で、伸びを防ぐために、指でしごくのである。それでも新しい糸は、弾いているうちに、いくらか伸びる。

主題句の場合は「三の糸」が切れたので、それを買いにやり、糸がとどいたので、踊子が糸をつけかえた後の動作、ということができようか。

七久保＝橘町の踊子か、または深川の羽織でもあろう。

すけやんしょなどと盃引ったくり　明三松5

鈴木＝「糸をこき」は佐藤氏説、他は礎稿に賛。

三の糸こきこきそれは知りやせん　五34

岡田＝七久保説のように、踊子あるいは深川の娼妓の場合と思われるが、若い妓や仲居のような女がさされた盃を押える。そうすると三味の糸を替える妓が、いま私が酒の救援をするから…と言ってる場合ですね。酒を食べるは呑むことに普通用いています。

56　**合わせもの放レ山をさして逃げ**

岩田＝『俚諺集覧』に「あはせ物ハはなれ物〔仏語〕会者定離」とある。つまり、合わせてある物は必ず離れるという諺。特に夫婦の離合に言う。「離山」は鎌倉の山名。「合わせ物は離れ物」に「離れ山」を掛けた。ここは「離山」で松ヶ岡を示す。

はなれ山けんとくにする女旅　一四24
駕籠賃に小袖取ってる離れ山　安六天2
離れ山とは吉左右な松ヶ岡　安六宮2

鈴木＝賛。離山は鎌倉に行く途中、大船の近くにあり。

岡田＝大船駅から鎌倉行のバスに乗ると、北鎌倉駅までの間「離山」のバス停あり。横須賀線で大船駅を発車したら車窓の左を注意していると、二つ大小のガス・タンクあり、そこです。田の中にポツンと古墳があった。そこを戸塚からの鎌倉道は越えたもの。

57　**江戸町へけんぎやうもてる道理也**

岩田＝「江戸町」は吉原五丁町の一つ。一丁目と二丁目に分かれる。「検校」は盲人の最高官名である。両撞木杖、紫衣が許された。

検校が来たでつつじの色がさめ　玉14
検校の衣を孔子悪くいひ　笈二33
検校ハ此糸さまのお客也　一九ス2

など、検校と紫衣をほのめかした句の如く、ここも江戸紫をほのめかせて、江戸町で持てるのも道理だという句であろう。

七久保＝賛。しかし主題句は礎稿の如くなるも、なお小生は『武江年表』安永四年の項の烏山検校遊里に赴き遊女瀬川を身受けし巨万の金銀費せり。この検校、諸人に金銀を貸して高利を貪りける故に、ついに罪科に処せられしと聞けり云々

とあるを引く。

主題句は岩田氏の礎稿の様に「もてる」と解すべきでしょうか。小生は「江戸町へ…出る」と思っていました。

鈴木＝やはり礎稿のごとく「もてる」でしょうが、小生も烏山検校が暗にかかっているという七久保氏と同説。

岡田＝「も出る」でなく、「もてる」です。烏山検校説に賛。

58　**霊場を禿の時に踏ンだまま**

岩田＝「霊場」は寺社等の地を言う。『守貞漫稿』に、「江戸吉原町は上中下品ともに遊女は郭外に出すことを更に不許也」とある如く、遊女の外出は禁じられていたが、禿は外出できたらしい。禿の時に寺社に参詣したまま、それ以来外出してない事を詠んだもの。

西原＝賛。全くの籠の鳥になる。

佐藤＝霊場はここでは浅草観音と見てよいと思う。遊女の観音参詣の句もあり、また花見、芝居見物など郭外に出される場合もあったが、それらは極めて稀なことで、多くは郭外へは一歩も出ることもなく、十年の勤めを終えることが多かったようである。従って、つい目と鼻の先にある浅草への参詣すらできない。主題句はそれを詠んでいるのではなかろうか。

七久保＝霊場という語から、小生は上野の花見と思います。禿の時を想い出し感慨無量な面持で、あたりを見まわして、眺めている様を吟じたと解している。

鈴木＝霊場は佐藤氏説のように浅草観音が正しい。

岡田＝霊場は上野にも浅草にも用いられ、どちらとも解されますが、やはりこの句の場合は浅草の方が強いでしょう。

59　**二会目はほれそふにしてよしにする**

岩田＝「二会目」は「裏を返す」とも言い、同じ遊女を揚げる二度目を言う。三度目を「三会目」、あるいは「馴染になる」と言い、この時はじめて歓待するのが吉原の法である。はじめての登楼は「初会」で古くは、初会には決して同衾しなかった。「二会目」だから、その中間だというのであろう。

西原＝賛。期待感をもたせること実に巧妙。

佐藤＝賛。三会目にならぬと肌を許さなかったという。

見申したよふだぐらひが裏だもの　安八智1

七久保＝賛。遊女のもったいぶった様子。

鈴木＝賛。うらの句は案外少ない。

岡田＝賛。

紫香川柳六彩　黒川紫香副主幹の川柳作品6句を切り絵（岡村康裕画）にした絵葉書ができました。希望者は、川柳塔社事務所までは紫香氏へ（一組送料共200円）。

日本の最短詩—武玉川調 (四)

—俳諧と川柳との間に生まれた人間詩—

阿達義雄

昔、陸奥の習俗に、男が思う女に逢おうとする時、その女の門前に一尺程の色彩った木を立て、もし、その女が承知した時には、その木を家の中に取り込み、拒否したい場合には、そのまま打ち棄てて置いたという。

だが、男がさらにその熱情誠意を示そうとする時には、一本、二本、三本と、色彩った木を増して、千本まで立ててみることになっていた。

これが、いわゆる錦木である。今ならば恋文、または結婚の申込みのプロポーズに当たるであろう。

○母の自慢は錦木の数　（武・二）
○気根くらべのつもる錦木　（武・一七）
○江戸でも立てて見たい錦木（武・一二）
○横から惚れて錦木を蹴る　（武・四）
○母はとり込む雨の錦木　（武・初）
○障子を明けて見せる錦木　（武・一三）

右の句には説明は蛇足だと思う。

江戸の習俗として、結婚には仲人を必要としたが、

○雨までほめてもどる仲人　（武・三）

仲人たる者は、先方の親達に好感を持たれるために、雨でも猫でも何でも褒めてかからなければならなかった。

○従男も石を投げる婚礼　（武・八）

婚礼の晩に、何となく面白くない村の若衆が、婚礼のある家に石を投げる俗習があった。

その中に、てっきり自分が貰うつもりでいて、出し抜かれて口惜しがっていた従男も交っていたことであろう。

○さるさへこわき妻の大力　（武・一八）

「さる」は離縁することである。「離縁する」などと言ったら、大力の妻のこととて、何をやり出すか考えても全く恐ろしいというのである。

○去られた町へ意地に嫁入　（武・六）

離縁された女が、意地づくでも、その町にもう一遍嫁入りして、立派にやって見せようという珍しい句である。

○去られた後へ届く染物　（武・一四）

妻が離縁された後に、前に妻が頼んで置いた染物屋から染物が届けられたというのであるが、これが夫への心尽しの染物であったとすると、一層哀れの深い句となる。

○あたまへ恥のふりかかる鍋（武・一四）

近江国坂田郡入江村の筑摩神社の例祭の日は鍋祭と言って、祭の行列に従う女は、自分の関係した男の数だけの鍋を頭に戴いて参加することに決められており、もし戴く鍋の数を偽る時には忽ち神罰が下るとされていた。

従って、二つ以上の鍋を被ることは恥のふりかかるようなものであった。

○赤い信女の又ひとり産む　（武・一六）

未亡人は精神的に亡夫と共に墓に入るとい

う意味で、亡夫の戒名と並べて、その戒名を墓石の表面に彫って置いたものであるが、妻はまだ死なないのであるから朱で「何々信女」と書かれた。これが赤い信女であり、意味は未亡人、後家と同じことである。

江戸川柳にも「石塔の赤い信女がまた孕み」などとある。

○段々に夜の明ける三夫婦　（武・一七）

年老いた夫婦から順々に目をさまして起きることを、右のように表現したに過ぎない。

○妾が死んで家中落ちつく　（童の的）

騒動の種になり兼ねない妾が死んで、一藩の家中の者がほっとしたというのである。

○悟り切ったと女房を持つ　（橘中仙）

散々遊里に遊び、女遊びにもいい加減に飽きたのか、あるいは全くつまらぬことだと感じて、平凡に女房を持つというのが、江戸時代の普通の男の行き方であった。「悟り切った」とは冗談半分ながら、若干の真実もこもっている。

○二度崩さねば丸い大判　（武・一八）

大判（十両）を崩す（両替する）には、まず小判（一両）に崩し、さらに短冊形の一分金に崩さなければならなかった。

○小粒でためる恐しい金　（武・一二）

小粒とは一分金、または、それ以下の金であるが、この小粒で、例えば千両の金を貯めようとすると、容易ならぬ努力が必要で、それを貯める執念は全く恐ろしいと言ってよかろう。

○一文出して諸願成就　（武・一八）

一文は前記の一分金の一千分の一の価値に過ぎず、江戸時代の貨幣の最小のものである。この僅か一文を賽銭箱に投げて、「何事も成就しますように」と祈る人間の虫の良さは、既に西鶴の町人物にも、「神様もさぞ困るであろう」と笑っている。

○送って出れば低くいふ医者（武・一六）

これは、当今でも見られる情景である。

○多芸に生れ辻番で死ぬ　（入合帆）

多芸に通じながら、ただ人に重宝がられるだけの一生を終る人間を、生きた親父の捨て所と言われた辻番に例をとっており、「小粒でためる恐しい金」を持っていた者の多くが、目の見えない座頭であったことと好対照をなしている。

○あすの芝居に丑三つの髪　（橘中仙）

○あす剃る髪を燈明ですく（童の的・二）

前者は久々の待ち焦れた芝居見物に、夜中まで、否、朝方までもかかって髪を結って、明日の綺羅を期しているに対し、後者は、このような女の生命とも見られた髪を、何かの事情によって剃らなければならなくなった女が、いよいよ今宵を最後として、房々とした髪を燈明の光で梳いているというのである。

いずれも凄艶の感じがするものの、前者には色彩感があり、後者からは虚無的な墨絵のようなものが感じられる。

○あくびの尻を結ぶ念仏　（武・一七）

あくびをした後に自然と出てくる南無阿弥陀仏！　これは昔の老人が慣習的にやった所作であった。

第9年度 夜市川柳 募集

題　選者　締切

第1回「**押　す**」　**谷垣　史好**　**6月末**
第2回「**広　い**」　**小島　蘭幸**　**7月末**
第3回「脱　ぐ」　林　荒介　8月末
第4回「許　す」　新家　完司　9月末
第5回「叫　ぶ」　田頭　良子　10月末
第6回「拾　う」　高杉　鬼遊　11月末
第7回「　女　」　住田英比古　12月末

投句先　〒593　堺市堀上緑町2―9―2
河内天笑方　堺川柳会

黒川紫香選

公園のみどりは老いにやさしくて　羽曳野市　芦田絢子
近道の指図したがるペンの先
終点のない回転木馬の悲しい目
断って惜しい話になりました
握手した日を記念日にしておこう　熊本市　黒田緑
真実を回らぬ舌につつかれる
浅瀬ばかり選って泳げば楽なもの
今日ぎりかもしやと思う靴の音
うずくまる鳩よ目だけで生きる気か
価値観のちがいがわかる年齢のずれ　出雲市　原章峰
阿国歌舞伎の旗をくぐって割子そば
筆投げ島　波の心は画けぬなり
ふかぶかと頭下げれば拝まれる
釣竿と添い寝してたらベタ凪に

隣にはゴルフ焼けだと言うてある　浜田市　中尾まゆみ
花の香を這わせて初夏の部屋が満ち
平行な愛をゆさぶるにくい風
酸性雨ポストは今日も耐えている
星の降る郷でのんびり背伸びする
手毬つく軽さで逢いに行こうかな　尼崎市　新井朋子
どことなくあなた私に似ています
縦糸はいつもあなたへの想い
耳がじっと説教聞いている
連休といえど汚れる作業服
馬鹿になることもひとつの才能よ　八尾市　高杉千歩
ファミコンの特訓うける子の城で
嫁の荷に出会う土手道通り雨
女々しさもお人柄です煙草の輪

あさはかな恋を笑えぬ過去をもち
四面楚歌ひろい空に憧れる

名古屋市　藤井高子

こんなとこにも心を遺して逝った母
差し上げるものがないから笑顔なと
まだ欲もあって時には軽い嘘
紫陽花は口説かれ上手もやい傘
すんなりと乗ってあげましょ下手な嘘

徳島市　宮武まつ女

ひと色が足りないままに愛を盛る
うそ一つ二つは許す母のくし
しんみりと数える月日　雨の午後
月よりの使者を峠で見失う
花ばかり追うてひとりの茶をすする

佐賀県　寺中三枝子

桃熟れるまでのストレスだったかも
無になれば飛んできますか青い鳥
エネルギー朝の納豆から貰う
甘えんぼそれが長女で以下つづく
ある決心ついたら橋を渡ります

尼崎市　児玉歌子

どの子にも水位合わせる母の池
勝ち目ない波紋静かに受け止める
条件を呑んでカバンを持たされる
欲得で無い人の目が美しい
借金をしてブランドを着て歩く

静岡市　沢田きん

人形と話す日もある独り部屋
逆らわず水の流れに添ってゆく
写経して豊かな心積み立てる
雑草も花が開いて助けられ
自分史へ遠いロマンス書いて見る

広島市　流奈美子

親の組む足場でいつか鳥になる
控え目な影で半分だけ写り
こみ入った話に酸素薄くなる
打ち寄せる波に妥協がまだできぬ
夢を見る少女緑の風になる

摂津市　木下道子

聴診器背中と相談しています
背の瘤を取れば魅力のない駱駝
ルビーには縁のない指いちご摘む
小遣いをねだる可愛い父になり
休刊日明けて連なる黒い枠

鳥取県　西川和子

紫の袱紗に包む義理一つ
ご近所に気兼ねしながらごみ燃やす
女同士やっぱり姑と腕を組む
大海を漕ぐ夢だけは持ち続け
種をまく土地に恵みの雨が降る

鳥取県　西浦小鹿

一枚の葉書に夢が託される
父の掌の指紋のなかで子が眠る
路地裏の夢を肴に呑んでいる
土壇場の運命線を太くする
最後まで地獄を信じてる男

熊本市　宇野昭代

連休にとり残された老いの足
子が出来て愚痴がばったり来なくなり
きれい好きの家に招ばれて気が疲れ
例えばの話にだんだん熱が入る
参観が終ると教室はしゃぎ出す

藤井寺市　高田美代子

縄電車降りたい駅が見つからぬ
花博へ何時行こうかという悩み
反抗をした日を笑い合う絆
別れ道風が哭いてる戻れない
切羽詰まって切った尻尾が其処にある

富田林市　池森子

手紙が届く　やさしさの形して
妻　母としてのホームに着く電車
真っ赤な羽根で妻は高く高く翔ぶ
深い別れを笹舟にのせました
夢中にはなれず寝ころんでしまう猫

熊本県　大川幸子

どう働いても蟻には負けている
年号が変わり数えにくい歳
一寸いい話へ心ふくらます
掌の上でころがすなんて出来ますか
頭より大きな口で餌を待つ

大阪市　上田柳影

泥かぶる気骨はとうに失せて老い
瞬間を待っていました勝名のり
深海の魚でよかった酸性雨
カルシウム不足と目刺の日々になる
地価高騰働く意欲欠けてくる

堺市　楊井二南

粗大ごみ多くてわかる良い暮らし
交際の広さが義理にからまれる
貧乏籤ばかりに堪える平社員
新聞を読む順番を妻が決め
洗濯が多くて延ばす衣替え

尼崎市　森安夢之助

梅雨しきり口の五月蠅い妻と居り
夫婦仲悪くするかも下手な嘘
病んでから指輪が緩む佗しさよ
投げ遣りの言葉を吐いて荒れてる子
赤ちゃんはおかめの顔が好きらしい

久留米市　鶴久百万両

火の男になろうか柘榴熟れてゆく
困襲を破り青年家を捨て
エトロフへ帰る日もなく父は逝く

相談にいくと酒まで馳走され
時間売りで釣るスーパーへ吸いこまれ

今治市　野村京子

風は詩人　女心をなぐさめる
イヤリング内緒話が眠らせぬ
短編のシナリオ続く夏帽子
朝昼晩愛する人へ煮ています

鳥取市　萩原美雪

待っていますこっちをむいてくれるまで
待つ人が居る幸せをかみしめる
根掘り葉掘り他人のことなどほっといて
危機一髪なあに印ろう持っている

静岡市　小木久子

転職も離婚も軽くする世相
科学では女心はときかねる
目くばせを合図にそっと座を抜ける
会いたいと書いて来たのにそれっきり

吹田市　井上照子

花の下五七五の指を折る
来世があれば貴方に甘えます
健康を崩してからのビタミン剤
力闘の甲斐あり心満たされる

砂川市　大橋政良

マンネリの貨車一輌を曳いて父
歩調とる男へ道をあけてやる
一球を遊ぶ過信が怪我となる
とっときの笑顔で丸く逃げられる

守口市　森川春子

栄養剤飲んでも体重変らない
戸締りが気になりだして又戻り
花博は満員らしくゴロ寝する
よもぎ餅季節がくればほしくなり

和歌山市　田中みね

もしかしてあの方かしら電話ベル
もしかしてあるやも知れぬプロポーズ
面会謝絶只今私昼寝中
平和なり今夜も茶の間沸き返り

佐賀市　古川一徳

断ればすむことながら小さい義理
記念日に夫婦茶碗を買いかえる
他人から見ればいうことない同居
石段を数えて登り老いを知る

尼崎市　的場十四郎

阪神が負けるとテレビ叱られる
言いすぎて味方が欲しい独り言
父に似ず演歌きかせる次男坊
安全な道しか行かぬ万歩計

尼崎市　尾宮弘治

独立の野心溢れる父の書架
喪の帯に亡夫の魅力たたみこむ
さよならがポストの中で揺れている
慰めの病名　医者の目が揺れる

花嫁にハデな荷物も親の見栄
胃袋を切れと主治医は言うけれど
小雀が長いみみずとケンカする
ケンカして別れた妻にある魅力

尼崎市　山田保蔵

あなただけ妥協している訳じゃない
ついてると思ってはまる落し穴
サングラスの奥に一言物申す
あつあつの二人にスパイスいかがです

尼崎市　新井泰子

スタンスは変えないでゆく余命表
ネクタイを外せば世間見えてくる
ブランドを漁る世相に背を向ける
性は善　たとえ話に乗せられる

枚方市　中山おさむ

記念の樹早や拾歳になりました
新調の背広風きる朝まだき
手に取ればさほど重くは無い王座
ふる里の訛りも乗せて発車ベル

唐津市　野田旭恒

富士山の眺めやっぱり世界一
眺望がいいだけ家賃アップされ
エレベーターのいけずスカート噛んでいる
話す事ないまま暮れる老い夫婦

岡山県　伏見すみれ

コンサート四肢も体も曲に乗り
馬鹿馬鹿と言われて夫に従いぬ
疑いを抱いている瞳の寂しさよ
阿蘇山は五岳を抱いて眠られず

熊本県　岩切康子

目覚めると雨休息をくれるよな
脱ぎ捨てて何を急いで更衣室
こだわりを捨てた静かなプロフィール
蹲いた時から意地をひっこめる

和歌山市　森茜

盆提灯飾り無常を語りあう
産院の前で目出たい声を聞く
パソコンで指の動きが子に負ける
後ろから背伸びして見る好奇心

佐賀市　江口万亀子

むし暑くなるから屁理屈を言わぬ
むらさきを知るおしゃれとは美しい
美しい人魚が浜を占めにくる
父ちゃんに声かけてくる露天風呂

鳥取県　乾隆風

風の子が広場に居ない塾通い
終点へ可も不可もなく辿りつき
可能性信じて子等と四つに組み
七光り下積み苦労わからない

十和田市　阿部喜久江

鳥取県　太田幸枝

はったりで生きる女の肩パット
土地売って長者番付にも載らぬ
裏話こぼれて披露宴おわる
内申書に秘められていた誉めことば

岡山県　富坂志重

定年をやさしく送る古机
売られ行く牛の悲しい眼にむせぶ
天気予報とても気にする握り飯
少し呆け温い対話の中に住み

酒田市　永沢裕子

ブラックコーヒ眠れぬ夜と決めて飲み
使い捨て言い聞かせてる戦中派
フルムーン頑固同士の別メニュー
畦道を外車が走る里になり

東予市　小山悠泉

大胆に黒を着こなすいいセンス
敗者復活再就職の靴磨く
一徹を通して世間狭く住む
真っ黒い闇に抱かれて森眠る

貝塚市　池田寿美子

花みずき熟れ行く日々にゆとり持つ
雑巾を鼻歌混じりで縫うている
利休忌や駄弁許さぬ寂しさよ
モーニングショー心ぶつけた温い貌（木島則夫さん）

堺市　井上たかし

笑われる芸ならたんと持っている
ペアルック似合う男が飼育され
指切りで済む誓いならいと安し
父子僧読経見事なハーモニー

姫路市　松本一郎

効能は続けて飲めと書いてある
もて余す暇にストレスためている
草原を恋うライオンの眼が淋し
合戦の原因になる柿一つ

熊本市　北川一進

カーテンに子猫とじゃれる寓の家
上手とも下手とも言わずする拍手
相談が商談になる如才なさ
電話してそれまで約束忘れてる

尼崎市　野瀬昌子

若い人が入り新風吹き入れる
おせっかいが過ぎて善人うとまれる
運命線きれぎれに延び苦労人
女旅帰れば妻の顔になり

尼崎市　鈴木良征

的はずれの話がはずむ縄のれん
矢車が光る追い風向い風
男がほれるそんな男になりたいな
これ以上息抜きしたら敗けになる

尼崎市　吉永伊三郎

いい娘だが軽いお尻が気にかかる
一円が動いて手間な消費税
亡父に似た五百羅漢に手を合わせ
頬っぺたをふくらし孫は部屋の隅

熊本県　高野宵草

クラス会やるというのに禁酒令
意地悪な姑が青竹踏んでいる
庭の蕾友が来る日の指を折る
子の絵馬に父の禁酒も秘めている

田辺市　染道佳明

潤いが欲しくて土を買ってくる
宅急便不倫の下着つきました
遺物がすっぱくなって妻は留守
合鍵が溜まり疑い深くなる

尼崎市　住谷石舟

登校拒否する子がひとり積木つむ
吊り橋のスリル女の肩を抱き
影武者のほうが一枚上の知恵
背のびしてみても造花という引け目

岐阜市　渡辺杏村

泳げない水着で海をのし歩く
子の帰省聞いてフトンを打ち直す
井戸水と西瓜サービス過疎の宿
打ち水で暑さを防ぐ祖母の知恵

尼崎市　明壁敏之

酪農に条件つきの嫁が来る
ウインドの中に溜息ためている
移転日が近づき犬も落ち着かぬ
独り言聞いてる猫があくびする

尼崎市　中澤向西

老妻が欠伸しながら聞いている
低気圧生簀の鯉がまた跳ねる
寝袋が明日の夢路を追っている
母の後かくれて娘の独り言

尼崎市　佐野六浦

糊効いた浴衣姿の夏祭
束の間の夕立虹を置いて行く
喉仏鳴らして飲みほす缶ビール
それぞれの香水匂う婦人会

鳥取市　美田旋風

そのうちにあっと言わせるタネを播く
仲良しのコーヒー冷めないうちに飲む
ライバルが逝って張り合いなくなった
如才ない言葉でさぐり入れてくる

大阪市　亀井円女

この頃嫁さんちょっと強くなりました
海亀のお産見ました泣きました
遠い日に聞いた浪速の子守唄
針供養亡母も私について来る

病院にて母逝く（二句）

島根県　菅田かつ子

亡母を抱きあまりに軽くなり給う
亡母さんと話したくなる夕まぐれ

神さまへ賭けをしました負けました　尼崎市　長浜澄子
あっけなく牡丹はらりと散り果てる

嬉しさを隠し切れない独り言　川西市　野村静雄
銘のある竿でそこらの雑魚を釣る

誘い水言えぬ本音が顔を出す
線路際息をひそめて小花咲く

もう誰も泣く人の無い三回忌　静岡市　永倉柳華
立ち話足りぬを語るティールーム

わけありの女と男枯れて会う
それらしい顔に肩書してくれる

元所長平和な顔になって呆け　岡山市　中嶋千恵子
カラオケを覚え宴会好きになる

春闘の出来る会社にいて安堵
はじめての口付け心に残る人

蹲きを見せぬ男にある余裕
久々の友の便りに霧は晴れ

出会いから回るえにしの糸車
未練などなかった筈の流れ雲

わらぶきの屋根を見つけたなつかしさ　橿原市　西本保夫
人形とてむやみやたらに捨てられぬ

受売りの老父の話を書きとめる
ひとりなら泣ける涙だ今出せぬ　鳥取県　山根八重

草笛をならして帰るランドセル
大学に憧れている春の雲

借金とさよならをする汗を拭く　米子市　新正子
あっさりと許されたので怖くなる

そしてまた二人っきりの飯を炊く
今日もまた子猫捨てずに日が暮れる　箕面市　中嶋民子

膝の猫暮らしをじっと見つめてる
衣替え今年も家族恙なし

次々と人は去ってく待ち合せ　寝屋川市　井上すみれ
爽やかにどうせ余命は決ってる

夫は留守ゼンマイ時計の弛む音
痩せた脛かじられながら子に従い　寝屋川市　宮崎菜月

サービスの医者の言葉に満ち足りる
赴任地の雨の多さを嘆く夫

果たされぬ約束七夕に願いかけ

和歌山市　山口三千子

八方破れに見えてもすきがない
見縊った相手に足を掬われる
札束を積んでも解かぬ博多帯

鳥取市　武田帆雀

自宅待機滑らかな手になってきた
この人のために香水封を切る
ブラジャーの売場で妻を見失う

八尾市　向井しづ子

はじめての内孫玉のよう男子
チャキチャキの若手がガソリン入れるだけ
国道沿いグルメ天国めじろ押し

京都市　小林英子

水すまし童話の中に生きている
時効切れどこかで北叟笑んでいる
赤いバッグに潜ませている火種

和歌山市　堀畑靖子

叱られて平気な顔はできません
料理好き十年前の私です
セクシーな魅力モンローには負ける

岡山県　森下正子

歓びも悲しみも知る太い指
手ぶらでは行けない孫の顔浮かぶ
花めでる余裕静かにたそがれる

唐津市　山口ふさ子

生わさび効いたお寿司が来そうな日
お陽様が温めてくれた湯にはいる
長生きをさせてあげたい人が逝く

高槻市　芦田静江

趣味かじる事から老いの夜が明ける
白い紙つづく日記は愛にもえ
逢いにゆく足袋の白さにせめられる

島根県　高野律子

目が覚めてやはり一人の床畳む
一人でも朝はやっぱり若布汁
高慢な人に耳栓して別れ

堺市　桜沢あか里

植え過ぎを後悔してる狭い庭
真直ぐに帰る真面目な定期券
連休の後半日記は白いまま

兵庫県　酒井靖子

耐え抜いた女花火に点火する
陰口へいよいよ信念燃えたぎる
熟年の遊び適度な風に乗る

兵庫県　倉垣恵美

お隣のボンボン時計で昼にする
夜逃げした亀はどこまで行ったやら
えんどうの花ゆるがせたダンプカー

東京都　山口新子

ときめいて明日を待ってる今日が好き
去りがたき送る笑顔に京の雨
正直に生きて日陰を歩いてる

黒枠の左右に故郷の白牡丹　　枚方市　森本節子
帰るなり日蔭に犬を移動させ
ハラハラとこてまりの散る庭の隅　　京都市　渡辺圭坊
ゲートボールの話がはずむクラス会
四迷忌や浮雲浮ぶ夏の空
花博に人満ち浪花繁昌記　　摂津市　もちづき遊美
桜には悲しい思いも秘めている
先進国のふところ深さ学べ君
政治知れば知る程燃える正義感　　和歌山市　北山好笑
囲まれたカメラ　モデルにある自信
稲の穂よ頭を下げるむずかしさ
急ぐ時一つの輪ゴム見当たらず　　岡山県　杉本伊久栄
貫禄を備えて牡丹の花は咲き
母の日の倖せ嫁のプレゼント
差入れのコーヒー気遣う子の机　　静岡市　中西雅
うらやまし喧嘩のできる夫がいる
縁日ですくった金魚よく育つ
うぐいすが手にとどきそう温泉郷　　西宮市　菊池トミエ
姉の愚痴昼の苺をつぶし合う
三日分花に水やる金曜日
草餅を頬張る海女のたき火の輪　　鳴門市　八木芳水
青春に還るビールを溢れさせ
もて余すこの苛立ちを老いと知る
定年の椅子の周りがさわがしい　　豊中市　三宅つえ子
向日葵に生きる勇気を貰う朝
草木燃え父も燃えてる春の庭
限界に仏の顔を思い出す　　神戸市　木村貴代子
人工の島で坂道恋しがる
三浪でやっとあきらめついたらし
鬼が待つ方へ進んだ岐れ道　　富田林市　楠美子
抜け穴を掘った積りが行き詰り
目立たない脇役がいて光る芸
一言のうそが波紋をよんでゆく　　鳥取県　大角正道
あの山の向こうにきっと夢がある
手放しで喜んでいる流れ星
骨ぬきの魚を食べて新人類　　広島市　中村要
無意識のなかで映像ふくれだす
乾杯の底に沈んだ胃の痛み
プライドが鏡のなかで汗をかく

物欲は一筋縄で縛れない
古里にみどりが満ちて売れぬ土地
ためらわず腹の底から好きと言う
眠れぬ夜進軍ラッパの夢を見た
お悔みの言葉も出ずに涙出る（妹の主人二人亡くす）
道端のお地蔵さんもはねられて
病む人に悲しい嘘をついたはる
留守番の横から猫も顔を出し
どうしてと言えずに話耐えて聞き
それとなく病状探りに来る職場
二つ目の角まで付いて来た子猫
鯉のぼり褪せて太郎は一年生
都合のいい時だけ爪を塗って行く
綾取りの自信　裏目でもつれ出し
ロマンスの終り修羅場となる浮気
峠まで来ると甘茶が欲しくなる
ちぎれ雲思い出一つ乗せて浮く
追われてる日課楽しい趣味と夢
孫の絵が自由のびのびして語る

吹田市　廣屋利通
広島県　森川抜智
大阪市　小糸昭子
枚方市　山崎彩子
岡山県　土居ひでの
兵庫県　森脇和子
鳥取市　森山豊子

青い鳥抱いているから幸せよ
胸の内隠して笑うのも辛い
ライバルの握手が温い停退日
大好きなケーキのような孫にキス
蝶々とわたしも憩う花時計
耕して土の息吹が聞え出す
プレゼントそのままにして母は逝き
花真珠ドラマ見てから好きになる
神さまにときどき嘘をついてます
いと易く椿ポトリと散りました
島根医大　今日も祈りの鶴を折る
弱い方の肩もちたがる泣きぼくろ
夏やせを気にして女よく食べる
煩悩が川面流れる月明かり
ライバルの笑顔に一歩踏み外す
春の絵に一つ入れたいボクの彩
振り向けば喜劇で済んだいい履歴
頂点にたった傲慢哀しすぎ
運命の偶然しかとにぎりしめ
ひとり者分相応のなかで生き

川西市　西脇冨美
和歌山市　谷口信子
出雲市　岸桂子
芦屋市　根来敬
旭川市　朝倉大柏
泉南市　坂根流水

しんがりを走る兎に気を許す
見とおしが甘くていつも飢えている
まっすぐに歩いて迷うことばかり

姫路市　谷　清柳

金毘羅船ふね今は大橋汽車でゆく
八十過ぎて自慢は針に通る糸
孫の物ばかり目につく土産物

岡山県　後安　ふさえ

朝顔の蕾あしたを約束し
肉牛が春の草食む夢を見た
京の寺尋ね回ってつきぬ旅

岡山県　牧野　秀香

風邪声ですまぬすまぬと電話口
鍋の底見え出してから母食事
妻の風邪　子と外食に街へ出る

茨木市　藤井　正雄

きわめつけ最後の一本抜歯され
今朝もまた小鳥に負けたさわやかさ
どの顔も孫に見えます運動会

青森県　福士　トキ

児のふくむ乳房に母の愛滾る
几帳面に青い果実が熟れてゆく
散髪のたびに白髪の多くなる

愛媛県　八塚　三五島

おはようと言えばわだかまりが消える

今治市　渡辺　南奉

連休をぼんやりこれも楽でなし
歳時記の通りに咲いた春の彩

出雲市　森山　健歩

省略語駆使して若者胸を張る
いつでも良かったのにと全部取る
鈍くさい方が面倒見てくれた

藤井寺市　中島　志洋

プレーボール第一球をホームラン
台風に水を差されたフルムーン
セールスの苦労知ってる靴の底

鳥取県　中西　智恵子

水割りの氷が何か言っている
いつまでも平和でいよう白い鳩
花博へ花を見に行き人に酔い

東大阪市　大平　太一郎

三文の徳に挑んで万歩計
願掛けは迷わず神さま仏さま
出る釘を打たれて知った円と株

吹田市　西岡　豊

いちゃもんは役所でいえと突っぱねる
このへんで一か八かと酒が言う
花博で世界の花が和みあい

相生市　中塚　礎石

笹舟を流した溝が見当たらぬ
いつからか猫背になっていた背丈
父の日の尾頭付きは鯛でない

島根県　兒玉幸子

明治からの神さまの駅幕をとじ
名残り惜しくて大社往復いつまでも
山の朝小鳥のコーラスお早うさん

鳥取県　中村幸代

分岐点に立つと煙がすっと晴れ
逢っているのに次の約束念を押す
大切な言葉はいつも短すぎ

静岡市　宇佐美寿美

思い出をせりの小径が連れてくる
たらの芽をつむ仕草に亡母がいる
夜桜に誘われ月と内緒ごと

島根県　加本義良

三寒四温リズムを変える春の風邪
新郎が胴上げされている門出
空振りをした夜は妻の膝枕

米子市　中井ゆき

切りすぎたバラの木凄い意地で伸び
夕暮を用ありそうに犬がゆく
年とった時計にやさしいねじをまく

静岡市　柳沢たま

まけろとは勇気がいるよミエッパリ
ホラを吹く天狗もまじる釣仲間
厚い辞書いつも枕の役をやり

静岡市　浅子まつゑ

出戻りをかばう親子の厚い情
けなげにも皮肉られつつ世を渡る
花粉症母も娘も仲が良い

出雲市　伊藤寿美

爽やかな風ならおいでかごめの輪
相槌が昔ばなしに草臥れる
孤児対面老母にも貧しい皺がある

岡山県　江口有一朗

鯉幟屋根の掃除もして泳ぎ
泉のような頭脳が欲しい初夏のうつ
生き方を変えたいような花の日

和歌山市　前田美子

がらくたも捨てればゆめが消えそうで
山里のおいしい水で茶がゆ煮る
聞き流すことも覚えた影法師

河内長野市　大西文次

離婚するチャンス退職金入る
騒がれた頃に着ていた赤い服
温室の花が見舞に来てくれる

唐津市　浜本治幸

電話口息子と孫を間違える
肩書きがとれてすんなり屋台酒
今日も晴ひねもす花と語り合う

青森県　波　ただお

仕舞風呂都はるみの唄で締め
Gパンはお尻で呼吸してるよう
晴天へカメラカチッと音を立て

寝屋川市　河合時弘

滅法に明るい嫁にくたびれる
陽の当たる椅子に初心も忘れがち
旧友が集まり通夜のやり直し

米子市　小塩智加恵

電話なら胸の高鳴り伝えます
結婚記念日一日おくれ思い出す
通知表息子を越えぬ孫でよし

今治市　渡邊伊津志

失恋のショックのように椿落つ
見舞客帰り病人起き上がり
夫々の個性を出している切り絵

米子市　小西五十鈴

観光のコースで稼ぐ武家屋敷
廃屋へ過疎の足跡いたましい
世渡りへ水の流れにそって生き

八尾市　橋本信江

三歳が弾んだ空気連れて来る
浴槽で今日の反省明日の糧
旬のもの旬にいただくありがたさ

奈良市　米田芳子

柳生への道（二句）

ギャル達に追い越されてる万歩計
霧雨に峠の茶屋のおでん鍋
旧き友会うのに少うし若づくり

秦野市　三原浮木

無の一字やたら好んで老い深め
風邪引きのクスリに迷うコマーシャル
じいちゃんになってもばあちゃんまだこわい

大阪市　山北三三三

親友も時にはもめる酒の席
他愛なし寝る子の口に残る飯
桜散りやっと静かな土手の道

熊本県　増田一乗

魚の骨区別がつかぬ総入歯
歯の治療美人の顔も崩れがち
奇しき縁キジ馬工房の主と会い

唐津市　福島紀一

紛れ入り紛れ出て来る人の波
あの世には地獄は無いときめており
もう沢山極楽だけを見ておこう

鳥取市　岩原喬水

電話線切ってやりたい長話
兎小屋似てて隣へ迷い込み
七十になって人生まだ迷い

河内長野市　中井彗楢

一年の計はバリウム飲んでから
これで最後これで最後と老父の旅
表札にポチの名前も書いてやる

島根県　喜島ノブ

青梅も丸味を帯びた初夏の風

苗物が猫の額の畑にも
催しの多い世間に事故多発
岡山県　平田たけよ

農日記土のかおりと父の汗
ことことお粥がたけて病夫の朝
かけがえのない仲間です影法師
川西市　田中喜俊

母がまつ連休は田植ときめてます
プロ野球老いてももえるファンです
母の日に娘の心宅配で
八尾市　籾山隆

迷い道一すじ川は流れてる
三度ほどあったチャンスを棒に振る
神様は縁は結ぶが保証せぬ
島根県　渡部好栄

わがままを言いたそうなるペットの目
孫の知恵少し借りるとクイズ解け
背伸びしても見えぬ私の十年後
大阪市　家村高雄

道標に船頭が多て小休止
夢に見た表彰台で震うてます
敗け戦さまた出陣すパチンコや
岡山県　後安江山

風邪一つひかず思わぬ肺炎に
風と来て窓をたたいた亡夫の顔
病院で花の寿命の長さ知る
泉佐野市　真崎浪速子

三男という身軽さを買う辞令
親戚の子の顔もいる新学期
白魚の指こぼれ出す想夫恋
米子市　服部朗子

ユニークな文にほだされ旅に出る
我が家は安心　嫁が天下一
眉上げて可愛い口をとがらせる
静岡市　片平静代

東京の空　後悔をする家出
相性は悪いと言うが孕んでる
吊り橋を渡ると許すことにする
泉佐野市　大工静子

妊娠を拒まれポメラニアンの嘆き
潜り戸へポストを掛けた里の門
死病と思ったが神は見棄てない
静岡市　増田扶美

話題みな健康のみのクラス会
母の忌に味たしかめて木の芽和え
葛切りの甘さを残し旅終わる
島根県　福間博利

マンションに形ばかりの鯉のぼり
ピーポーをうつつに聞いて床の中
羽曳野市　麻野幽玄

止めてほしい思い一途に酒を酌ぎ
丸々と太って毛虫捕われり

羽曳野市　徳山　みつこ

連休のプラン持たぬが見る予報
花博の子ら花木へは寄りつかず

大阪市　今西静子

半端のように黒一点がまじる旅
飼い犬に咬まれて犬が怖くなる

羽曳野市　福田満洲

郵便受けに心ぬくもる大きい字
家族みな乗り気で遅い縁結ぶ

藤井寺市　田中孝子

暈をきた月もまた佳ししのび逢い
それとなく会釈をかわす愛もあり

八尾市　片上英一

寅次郎だんだんひねてきてひとり
黒白はつけず暫く放っておく

静岡市　大石たき

痛いとこつかれとまどう反逆者
世辞も無い鏡に向いポーズする

鳥取市　松本伊都子

孫の絵はおしゃれなママとチューリップ
花時計四季のいろどり刻み込む

鳥取県　木下芙葉

おしゃれして顔の小じわがじゃまになる
単身赴任妻が美人に見えてきた

吹田市　山本希久子

恋人ができてポストが近くなり
言い過ぎた悔いごしごしと皿洗う

鳥取県　石尾かつ乃

連休の疲れが見える棒グラフ
フルムーン変る景色を語り合い

鳥取市　西村黙光

アルミ貨の風化はしない消費税
新築の庭へ雑草派手に伸び

鳥取市　中居武士

消えるまで待てずローソク消して立ち
利口すぎ部下が一人もつきません

新潟県　高野不二

ワープロに似た間違いで大学出
日曜も尾をふってると知らぬ妻

神戸市　岩田信義

片袖を濡らして妻になる気無し
日程表持ったこと無い紙コップ

今治市　和田宏

下駄箱に靴だけがある新世帯
言わなければならぬゴメンが切り出せず

岡山県　大石あすなろ

波はひたひた女の愛は満ちてくる
ポスターの絵についのって旅をゆく

東大阪市　岡田寿美礼

名園に心洗われ古都巡り
主婦寄って世間話に日が暮れる

幼な児のように夫が駄々をこね　島根県　松本聖子
祖父に似た顔で一字を貰う孫　鳥取県　上田俊路
適当に消した自分史綴ってる　鳥取県　山内芳江
真相をよく知らぬからよく喋る　八戸市　島田昭治
歯の浮いたような祝辞に座がしらけ　出雲市　金森知恵子
箱書きを信じて中味確かめず　兵庫県　奥野テル（モスクワを偲ぶ）
意地悪い眼をしてるのは小心か　堺市　神原文
親の意見蛇足のようだが有難い　鳥取県　石谷美恵子
野の花に夢を托して草木染　島根県　今川三津江
野いちごのツルゲーネフに出遇う森
夢いくつ積んでくずしてまだ嫁かず
むずかしい話がきらいコップ酒
帰国して自分の背丈伸びたかな
犠牲打はパパ走るのはわたしです
弱点を消せば人間味がうすれ
家中の空気明るく嫁が変え
悪代官多く黄門出番多くする

幸せの四ツ葉クローバー探すとき　大阪狭山市　桜井荘次
目から鼻へ抜けた話がたよりない　鳥取県　黒田くに子
とっときの愚痴を零したわだかまり　富田林市　浦田トシエ
孫台風障子の穴の置土産　鳥取市　加藤二代
愛無限母の乳房がまるく張る　静岡市　青柳金吾
花博に行かねば心落ちつかず　大阪市　乾哲静
一人言猫が顔見て通り過ぎ　鳥取県　西原艶子
二つ目の仮面はずすと敵が消え　藤井寺市　菊地繁男
子供よりポチが利口でこまります　寝屋川市　豊福路子
ボタン操作孫に教わる新製品
笹落葉世代交代教えられ
天性の漫画の顔で人を食い
利休忌にわび茶の風情解る雨
しあわせにいきなりなれた夢が覚め
新人の自信驕りものぞかせる
嘘言えぬ二の矢がじっと狙ってる
明日への命をつなぐ米を研ぐ

順繰りという確かさに老いてゆく
順番を狂わせた娘の位牌抱く
広島市　名和喜一郎

左遷地の言葉になじむ子の早さ
人脈の細さを知ったある辞令
大阪市　武田昌三

ネオン裏赤提灯が通せんぼ
ガンに死す人間的な医者の手記
箕面市　岩津ようじ（岳夫改め）

抜き衣紋の年増とバスで隣り合う
深呼吸してから入る歯科治療
河内長野市　岡崎実

大都市ががら空きになる五連休
チャンスだ禁煙しよう風邪のいま
大阪市　清水利武

鯉のぼり団地の窓より顔を出し
妙見山五月になっての桜咲く
東大阪市　松山隆

路地雀どうにもならぬうさ話
新聞の記事だと言えば納得し
豊中市　滝北博史

甲子園一回戦で消えた夢
妻の靴揃えて妻ににらまれる
島根県　岩田三和

北極の花も日本で咲かせます
鳥取県　美浦美代子

衣装箱役者の汗と旅をする
順番にメニュー眺めてうどん食う
宇部市　中村三良

頼り切られて困る日もある飯茶碗
待ちぼうけ狐うどんの七味効く
弘前市　肥後和香子

手作りの我が子のはずがこの始末
紅椿の海に我が首そっと置く
唐津市　小下剛司

ストレスをマイク片手に解消す
うさばらし飲めば飲むほど目がすわり
富田林市　山原昭水

ご近所をしっかり見ようと窓磨く
宝くじ今度今度と買っている
寝屋川市　北岡波留吉

駅が出来村の名前が売れはじめ
胸張って日の丸揚げる平和主義
大阪市　川原章久

八つ当り水かけ不動の御災難
鬼一人塾へ消え去るかくれんぼ
鳥取県　今本早苗

煙たがられても鳴らしてしまう咽
昔話は陽だまりで語り合う

大阪市　尾崎黄紅

花を購う軽い男と見られそう
包丁研ぐか妻よ粗忽のないように

鳥取市　近藤秋星

都市化したこんな所に鬼あざみ
コマーシャルお尻を振って金になり

唐津市　入江喜久亭

巣に帰る鳥を染めた茜雲
地下鉄の階段のぼるミニの足

富田林市　大澤三四子

あの噂風にまかせて町歩き
八百もないけど時にうそをつき

奈良市　井上大

ヘルメットかぶって回るパピリオン
春の野が淋しがってる塾通い

鳥取県　伊吹富恵

山彦のほしい孤独に声送る
特売に流されまたも無駄を買い

八尾市　橋本龍典

あてこすりマッチのように燃えもせず
新緑に妻の機嫌と晴れ続く

鳥取県　中藤俊子

夫は旅友をさそってお茶を飲む
晴着着て隣の席を横目で見

藤井寺市　武部敦子

屋台の灯今日も一日お疲れと
何歳になっても童謡うたいたい

岡山県　福原辰江

急流を操る夫の太い腕
荒波に挑んでしっかり夫婦岩

静岡市　大神静枝

たそがれて向き変える孫の花電車
山菜に舌鼓うつ春の宵

岡山県　福原悦子

一灯に生きる証の歌日記
隣から飛んできた種花咲かせ

寝屋川市　坂上高栄

人並に喧嘩して来て金婚式
人の世は迷いがあるから面白い

静岡市　三浦つね

てのひらに欠伸を包む長談義
一回は逆らってみる悪いくせ

鳥取県　幸家單車

借金が重くて三途渡れない
懸命にとちる祝辞が温かい

和歌山県　吉田武治

鼻いきのわりに本番もの足らず
向い風避けて機会をじっと待つ

大阪市　平井露芳

事故現場ボートはどれも目をつむり（花博）

蝶蝶まで見世物になるパビリオン
松江市　原　長三

窓ぎわで若い蛙の声を聞く
旅に出て手ぶらで帰る独り者
島取市　中澤正恵

升酒が決断させて口を割り
花束が泣いて笑って宴締める
静岡市　大村正雄

顔色を見て冗談と強く言う
辞書引いて六十年目誤字を知る
鳥取市　谷口侑里

拝まれて貸した金からミゾが出来
連休に遠い先祖の墓参り
鳥取県　前田嘉津江

ごり押しでつかんだ椅子に胡座かく
大臣の根城汚れた金が舞う
鳥取県　久野野草

晴の日は休みわたしはかたつむり
しかの笠ぬいで木蔭で汗をふく
豊中市　田中道胤

戎橋今も昔も暮れなずむ
鵜の目鷹の目男が探す宝島
高知市　山崎一求

万緑に染まり息抜く峠茶屋
残酷な食鳥という人のエゴ
池田市　林　すて

あれこれと思うばかりで日が過ぎる
思いきりあくびをしたらスッとした
大阪市　清水絹子

甲子園負けて悔いない背の泥
図書館へ夫婦でいって休館日
守口市　福本勝美

うれしくてあなたの顔がにじんでる
淋しくて留守番電話と話す夜
姫路市　福本好花

能なしも人の真意はよくわかり
虫干しに絞りのヘコ帯亡夫偲ぶ
大阪市　平山登代

歌にきく卯の花を見る街育ち
卯の花のほのかに匂う雨の住吉
唐津市　野崎ハル

初とりの蕗で祝った誕生日
この景色切ってゆきたい汽車の窓
鳥取市　前田一枝

あせる程足の進まぬ夢を追う
神仏に力借りたい手を合わせ
富田林市　加藤ミツエ

潮干狩今夜のメニュー貝づくし
話の種に冥土の土産と花博へ
松江市　松浦登志子

そばにいるあなたが一番遠い人
たんぽぽが道案内のお遍路さん

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

矢野佳雲

防犯のカメラをなんとなく探す

上田柳影

べつに銀行強盗をしようとは思わないのですが、話に聞いたカメラがどこにあるか、見回している私です。強盗より一足先に写っているかも知れぬ、おちつけぬ世の中です。

めんどりは生んだ生んだと歓喜する

木下道子

生んだ生んだと濁音をひびかせ、歓喜するとさらりと退いたリズムのよさ。句から歓喜の声が聞えます。

独り者には寂しい日が多い

新井朋子

なにかスーッと抜けるものがあります。読み返すとナカ六字になっています。しかし、そのナカ六字がかえって寂しさを表現するのに、適当なのでしょう。

母さんに替われと息子から電話

和田宏

お父さん、ついがっくりきましたが、次に頼られるお母さんと成長した息子を考え、これでいいのだと思われたでしょう。お父さんの出番もそのうち来ます。いいご家庭です。

句読点つけると息が楽になる

大石あすなろ

単なる句読点でなく、息切れせぬよう休み休みやりなさいの教えでしょう。押しつけでなく、こう言われると納得できます。

階段へ来てさりげなく手を添える

宇野昭代

知らぬふりしていても、気にかけていてくれたのか、そっと手を添えてくれました。さりげなくが生命でしょう。

メロン切る嬉しいことは頒ち合う

渡邊伊津志

一読爽やかで温かい気持に包まれたのは、作者のあたたかい人生観が、メロン切る爽やかさと混然一体となったせいでしょうか。

万博の近くの友を思い出す

高野不二

あれ以来、賀状だけは続いているのですが、泊らせてくれと言えるほどの仲でなし。私は親類を思い出しました。

老眼鏡拭き拭きヌードしかと見る

菊地繁男

楽しい句です。老いこんではなりません。よく言ってくれました。まわりも老人は枯木だと思わないでくださいね。

彼の名を喋るオウムを持てあまし

美浦美代子

彼の名を喋らせるようにしたのは誰でしょう。人がいなければ結構楽しんでいるのでしょうに。いろいろ想像をして愉快でした。

ジョークだと課長が言ってから笑う

新正子

職場の一コマが目に浮かびます。あまり冗談を言わぬ課長のジョークにぎくり。おもむろにジョークだよと言われて一座大笑い。安堵とお追従の混じった笑いでしょう。

妻だって辞表出したい時もある

芦田絢子

ただ夫と妻という関係にあぐらをかいていると、こういうことになりかねません。死に水を取って貰うのですからお詫びしましょう。世の中はどうせ男と女だけ。あやに優しく切ない仲を描いた秀句で終ります。

念入りの化粧挑戦的になる

児玉歌子

甘い罠かしら愛してくれるのは

堀端靖子

振り向かぬ背中をにくいなと思う

大川幸子

突然の愛に戸惑う熟い息

西岡豊

お荷物でしょうがと女従いてくる

吉永伊三郎

暑中御見舞申し上げます

川柳塔わかやま

——1990 盛夏——

橋本市・紀水川柳会・岩倉天彦
由良町・川柳ゆら・寺田裕美
岩出町・川柳岩出・岩崎瑞穂
和歌山市・川柳塔わかやま・野村太茂津

創立二十周年記念川柳大会ご案内

とき 平成二年九月九日（日）10時開場

ところ 和歌山県農協会館（ＪＲ和歌山駅前）

兼題
「足跡」 橘高薫風選
「いたわる」 大矢十郎選
「腕」 中田たつお選
「選ぶ」 小出智子選
「帯」 森中恵美子選
「書く」 田中好啓選
「希望」 黒川紫香選
「はたち」 野村太茂津選
（八月十日締切・所定のハガキ使用）

句会費 千五百円（記念品・句報・昼食共）

懇親会 三千五百円（十七時半終了予定）

出句数 各題共二句宛（欠席投句拝辞）

宿泊ご希望の方は八月十日までにご連絡下さい。

連絡先 〒640 和歌山市駕町十四 野村太茂津
電話・〇七三四—三一—三七七三

暑中御見舞申し上げます

（アイウエオ順）

矢野佳雲
794 今治市南宝来町一-九-四三
☎〇八九八―二三―四五三七

小山悠泉
799-13 東予市壬生川一九六―二
☎〇八九八―六四―二五四一

渡邊伊津志
794 今治市八丁東三―四―六
☎〇八九八―三一―四一七九

月原宵明
799-15 今治市桜井一-一一-一八
☎〇八九八―四八―〇〇八八

渡辺南奉
799-15 今治市桜井団地一―三―一〇
☎〇八九八―四八―〇四六六

野村京子
799-15 今治市桜井一―一〇―六
☎〇八九八―四八―〇〇九四

和田宏
794 今治市北宝来町三-三-二六
☎〇八九八―三一―二八五三

暑中お見舞い申し上げます

翠洋会

橘薫風　高杉鬼遊　山根いつを　阿山みよ子　井上照子　稲本凡子　上田佳秋　上田登志実　内田結実　梅田宣司　奥田みつ子　片上英一　北田綾子　栗谷春子　坂本仙吉郎　清水絹子

末次真　住谷石舟　園田文子　高杉千歩　田中正坊　寺井東雲　中西兼治郎　西出楓楽　藤井正雄　藤村宏子　堀良江　堀江光子　松永すすむ　横山為子　米田恭昌　渡部さと美

川柳展望　主宰・時実新子

雑詠出句　10句
誌代（年間）　4,840円（〒共）

〒563-01　大阪府とよの町ときわ台3−4−17
天根夢草方
川柳展望事務局
電話（0727）38−1845
振替神戸5−49710

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔とっとり

両	山	美	前	福	春	早	西	西	西	中	谷	武	武	上	上	岩	岩	岩	池
川	沢	田	田	田	木	瀬	尾	原	尾	島	口	田	田	村	田	原	田	田	本
洋	新	旋	一	多可志	圭一郎	友	砂山花	艶	呼	一	侑	粗	帆	洋	俊	喬	林太郎	秀	山
々	風	風	枝			夫		子	風	歩	里	粒	雀	平	路	水		和	人

もくせい川柳会

村	三	満	桝	星	春	額	辻	玉	玉	田	滝	栗	小	江	上	一	安	黒	橘
上	宅	仲	本	野	城	田	川	置	井	中	北	原	畑	口	田	瀬	藤	川	高
とく子	つえ子	きく子	蕗児	登代子	武庫坊	明吉	慶子	英子	房子	正坊	博史	富子	よし子	明光	登志実	福一	寿美子	紫香	薫風

定例句会　毎月第3月曜日　豊中市立中央公民館

暑中お見舞申し上げます

熊本川柳会

岩切康子　大川幸子　宇野昭代　永田俊子　高野宵草　北川一進　鶴田謹爾　有働芳仙　黒田緑

暑中御見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局　〒641 和歌山市東高松３丁目８－12
菅井智水庵

暑中御見舞申し上げます

久世川柳クラブ

二宗吟平　森田甫正　伏見すみれ　三村美恵子　池田半仙　杉本伊久栄　矢野山人　富坂志重　後安江山　後安ふさえ　牧野秀香

第14回茗人忌川柳大会
ご来会お待ちしています

うみなり川柳会

鳥取市相生町３丁目204
電話　(0857) 23－4672

姫路　川柳化粧櫓の会

暑中お見舞申し上げます
平成二年　盛夏

丸尾はる子
中塚遊峰
丁坪サワ子
松浦輝月
松浦大鷹
北山越山
大原葉香
保西岳詩

植村客遊子
内海美代
菅原朱玉
本多茂章
美原嘉
福島姫女
福本好花

川柳と私

同人アンケート

眼鏡

谷垣史好

眼鏡をかけ始めたのは、私が中学三年の春であった。視力〇・三の世界と一・〇の世界とでは、こうも違うものかと別の宇宙を見る思いで、それは感動的な驚きだった記憶がある。以来今日までご厄介になっているわけだが、最初は物を視るための単なる道具にすぎなかったものが、馴染むにしたがい愛着が生まれ、いつしか肉体の一部のようになっている。その間、度が進み眼鏡を幾たびか替え、そのつど新たな感動を味わってきた。

私にとって川柳とは何か、と考えるとき、この眼鏡のようなものではないかと思う。迂余曲折の三十年の後に、今は毎日の生活の中に自然な形で溶け込んでしまった。川柳と私の親密な仲を引き裂くには、かなりの勇気が要るような気がする。

しかし、それはまだ確信といえるほどのものではない。本当に自分に似合った眼鏡なのか、他にもっといいのがあるのではないか、時折そんな迷いにとりつかれ、訳もなく心が揺れ動くのである。

筋肉のゆるみと共に、とりわけ近ごろ眼鏡が顔にしっくりしなくなった。油断していると突然スルリとズリ落ちるかもしれない。

万華鏡

西山幸

「私にも出来そうだ」から軽い気持で関わり始めた川柳に、今ではがんじがらめにされて離れられない毎日になってしまいました。

こんなに難しくて、奥深いものであったのか、と溜息をつきながら、追われ続けてきた十余年を振り向いてみての自問に、まだ自答を返すことも出来ません。

理論や理屈ではなく、やりたいからやってきたのに違いない川柳ですが、いつまで経ってもみすぼらしい私の川柳、つまりは万華鏡に写る私のみすぼらしさを、いよいよ痛感しています。

上手な句を、きらきらした句を、作りたいと分不相応に望んだ時もありましたが、それが偽物では何になろう、平凡でも地味でも確かな本物の輝きがあって欲しい、幽かに光って欲しい、と今は願っているのです。

愛憎の日々を繰り返すには長い一生ですが、悪汁を出し尽くすには短すぎる一生を、焦るあまりに道を踏み外したり、落伍だけはしたくない、(たかが川柳)なのに……と思うとき、川柳の嗤い声が聞こえるようです。

「川柳をしています」と誰に言っても恥ずかしくない私でしょうか?と、時々、私に聴

いてみることにしています。

口誦の習慣

新家完司

感動して心に刻み込んでいるつもりの句でもスラスラと口に出てこない時がある。

記憶力が悪いということもあるのだが、口誦する習慣をつけていないせいでもあろう。

四月末に急死した住田三鈷は口誦の名人であった。

どれほどの句を覚えていたのか知らないが会話の中に次々と適確に挿入するのである。

友人や先輩の句を口にする時の彼の嬉しそうな顔を見ていると、その句がとてつもない名句に思えたものだ。

私の思いがけない句を彼の口から聞いた時は本当にびっくりした。

自分の句を覚えてくれている、ということは嬉しいものである。

短詩文芸は口誦されてこそ存在価値があるのだから、自分の句を覚えてくれている人に出会うということは、川柳作家冥利に尽きるというべきであろうか。

活字になっただけの句はまだ生きているとは言えない。

感動した読者が心に刻み込み、折にふれて口に出してくれた時、はじめてその句は息を吹きかえして生彩を放つのである。

私も三鈷に習って、友人や先輩のすばらしい句をいっぱい覚えようと思う。

そして声高く口誦する習慣を身につけたいと思う。

川柳教

都倉求芽

近頃はやや下火になったようですが、新旧を問わず宗教団体の布教活動の方たちが、悩める人を求めて路上で、あるいは家の中まで押し入ってくる時期がありました。

そんな時の断りに「私は川柳教です」と応えるのが常でした。相手の出方によっては、「教祖です」とカマしてやる時もありました。

しかし、たいていの相手は川柳をすら知らず、たとえ知っていても、何で川柳が宗教?と不審がる者もおりました。シラけて帰ってしまえば儲けもの、それでも食い下がってくる時には、「川柳は人間陶冶の詩である」と路郎先生の受売りを大上段に振りかぶって煙に巻いてやることもありました。

私は常に作句するにあたって、路郎先生のような高邁な精神にはもとより足元にも及びませんが、私は私なりに、生きてゆく道に外れないために句を作る、その基本的な心はこれからも持ち続けてゆく覚悟です。

昭和三十一年、『大鉄川柳』に初投句して水客先生、杜的先生と出逢ったのがそもそも川柳とのご縁。私自身が気づかなかった面を引き出して頂き、それからの生き方を大きく導いて下さいました。このご縁をいつまでも大切にして、生涯、この坂を上る幸せを心のよりどころにしたいと考えています。

人間の句

板東倫子

人間いろいろ　人生さまざま
面白くて哀しくて楽しくて淋しくて……。

生来の「人間大好き人間」で上方芸能の持つ人情・風俗に特別の愛着を感じます。人間の切なさ、やさしさ、哀歓を見事に表現する

松竹新喜劇、芸人さんの軽妙な話芸が大衆の共感を呼ぶ漫才に魅せられ、漫才台本の研究グループで勉強するうちに上方芸能の本質は「人間」そのものだなあと思い至りました。その頃に故川口弘生先生のお誘いを受け、城北川柳会にお仲間入りさせていただきました。

暗中模索、無手勝流の日を過すうち、

『川柳は人間陶冶の詩である』　麻生路郎

の一言に打たれました。川柳の理念はここに極まると思い当りました。

古川柳のうがちに笑い、鶴彬の凄絶さに涙し、時実新子の感性に驚きながら、いずれも「人間」の目で見据え、「人間」の心で作られた「人間の句」であることを知りました。

生い立ちが洒落・滑稽の庶民文芸であったため、卑俗性の上に立った「おかしみ」と「うがち」が川柳の特性と見られていました。その後の時代変遷と共に人心・社会の矛盾をあばき、皮肉や諷刺、そして反戦作家を生むに至りました。このバイタリティーこそ「人間」そのものです。

情報化時代、文芸志向風潮、いろいろと川柳にも課題はありましょうが、私は技巧を捨てた素直な「私の句」を作り続けたいと念じております。

ひたむきに　人生演じ　寛美逝く　合掌

文芸趣味

竹内紫錆

口の重い家族の中で、短歌に趣味のある母親だけが、正確な読み書きを教えてくれた。私は数学が好きで理工系に進み、技術屋になってから五十年、実験や計算を中心に観察の記録をとる仕事が続いた。しかし、縦書き文でも「科学的」な話題を書けば詩から離れてゆくし、内容もすぐ古臭くなる。文体は新聞の第一面のような堅い熟語の組立てになるのを自覚したし、最近は翻訳の作業に追われ、暗示的な短文をことさら考える必要はなかった。そういう記録も、貿易国の国民が励んだ後の泡のように消えていった。

一方で私が川柳を始めたのは、研究室を外された入院中の頃であった。患者句会を作って折込み都々逸から始め、会社の文芸部に所属してからは俳人達と十年以上付き合った。しかし川柳は、口コミもなく、新聞を手掛りにすることが関東では多く、面識のない大阪の選者へ句稿を送るのが習慣になった。そして三十年たつ。

過去の人生の半ばで療養したことを機に、自分の「見つけ」を元に、詩句・短文・評論を綴ると、それを社の文芸誌が載せてくれた。職場を去った今では話しかける相手がなく、「読ませ相手」がいることが楽しみである。母を見習って進んできた文芸趣味に、統計や文法の面から柳俳比較論をしたいとも思う。硬いが、それが自分にできる仕事かもしれない。

私の恋人

遠山可住

人生に二つの道。プロの道とアマの道、それが私の哲学の道である。プロの道は職業であり、収入を得、上司に仕え、部下にいじめられ、悪友を得る。そして私のもう一つの道が、ふと出逢った恋人「川柳」である。ここでは師を得、青空を得、心の友を得た。ここには大空の限りない広さがあり、生きることを実感する心のふるさとがあった。

私の川柳との出逢いはふとした偶然であったが、恋をするのにそう長い月日はいらなかった。ウマが合うたのだろう。以来三十五年

余り、この恋人は素人だから出来る冒険を危ぶみながら従いて来てくれた。きっと死ぬまで離れないでいてくれるだろう。

恋人にだけ見せられる素顔、それは「心」である。穿ち・風刺・ユーモア、そして近年の詩性、それらは個性によってより深く磨かれて行くだろうが、泥くさくて飾らない庶民の心——それが私の恋人「川柳」である。

命ある一句

小野克枝

新築・開店・子育てと三拍子揃った忙殺の中で川柳を知りました。心の呟きを短歌にのみ傾倒していた私を、川柳の道へと軌道修正して下さったのは、当時、「川柳たまし社」の編集長として大活躍なさっていた小幡里風さんです。

何の予備知識もないままに初句会に参加し、「手加減」という兼題で、「通信簿　手加減の無い　二が並び」がいきなり特選三席になり、びっくりするやら嬉しいやら、あの天井を揺るがす拍手が今も忘れられません。

後日発表された句を見て、中三の長女が、「わたし二なんかとったことないのに…」とカンカンになって怒りました。私曰く、「本当は三をとったけれど、二をとったことにしたから入選したのよ」と苦しい弁解をして謝まったことを懐かしく想い出します。

川柳塔社、川柳たまし社の同人の椅子を頂いてからも、悪戦苦闘の連続でした。題を見据えて、夢中で五・七・五と指を折ったものです。主婦である私は、趣味を最優先にすることはできませんから、時間の許す範囲内で句作りに挑戦しています。

川柳に駆り立てられて早くも二十年の歳月が通り過ぎました。良き師、良き先輩、多くの柳友に恵まれ、人の和の温かさを知りました。鈍行は鈍行らしく各駅に止まり、ホームを行き過ぎないよう走ります。遙かに遠い道程ではありますが、「川柳塔」を旗じるしに、命ある一句を目指して進みたいと思います。

出会い

高田博泉

昭和四十二年、大坂形水さんが発足させた職場川柳（オーエスケー川柳会）に顔を出したのが私と川柳との出会いとなります。当時、白柳さん、好郎さん、入仙さんが指導に当って下さいましたが、五七五にまとめるのが精一杯で、もともと文芸的才能のない私には苦痛としか言いようがありませんでした。仕事の都合で日程が変わったり、仕事にかまけて一人減り二人減りで、現在は休会になっております。

川柳らしきものが出来るようになったのは亜鈍さんの三井ヶ丘川柳教室（川柳ねやがわの前身）のお世話をすることになってからのように思います。薫風さん、小松園さん、柳宏子さん、古方さん…そうそうたるメンバーと昵懇にさせていただいて、作句する以上に人との接触のよろこびを感じるようになりました。現在、川柳ねやがわも所帯が大きくなってきておりますが、形水さんからは「川柳家には悪い人はいない。いろんな職業の人との出会いがあり、勉強になるから続けなさい」と言われてこの道に入ったようなことです。

今思うと続けていてよかったとつくづく思います。これからも人との出会いを大切に、作句を楽しんで行きたいと思います。私は破調の句は好きではありません。五七五に凝縮する苦労が作句の勉強課題であると思うし、リズムを大切にしてゆきたいと思うからです。

銀河系

河内天笑選

豊中市　辻川慶子
海碧く陽は燦さんと島貧し
紫陽花の埋まるベンチに弥陀の風
当てもなく旅に出たいと思う日も

藤井寺市　高田美代子
古い噂がふと気に掛かる雨三日
ニコニコとしているシャッター降りるまで

米子市　林瑞枝
どんぐりの森でにんげん取り戻す
向日葵のジョークに抱かれ生きている

大阪市　桝本露児
廃線を歩く機関士だった人
雪国の女に春は忙しい

名古屋市　藤井高子
平凡なくらしでパンは耳も食う
プライドが一直線に走らせる

鳥取県　江原とみお
枠にいれると小賢しい顔になる
あっけらかんと終る日照りのお葬式

青森市　工藤甲吉
リレー方式で家中風邪をひき
お茶の間をアナウンサーに覗かれる

大阪市　小出智子
デパートを三つ回ったプレゼント
ハンバーグ嫌いになってもう大人

西宮市　奥田みつ子
注目はわたしの横の人らしい
先生の好きという歌好きになる

羽曳野市　徳山みつこ
選挙後の心変わりをどう裁く
ふと会話途絶えたままに夕餉済み

西条市　片上明水
刑務所の塀の高さが眼に慣れる
ひとことをいつも付け足す母の便

倉吉市　渡辺菩句
眠れよ眠れ僧の家からシューベルト
笑い袋みたいな友の家である

海南市　三宅保州
好きという言葉が老化防止剤
止ったら始末におえぬ大時計

西宮市　西口いわ玄
蝶々も花園に来て迷い出る
赤ちゃんを囲んで未来語り合う

和歌山市　堀端三男
偶像崇拝　岩の割れ目も祀られる
寄らば大樹とっくに捨てた主義主張

和歌山市　内芝登志代
肩書きがとれたフリーの頼りなさ
審判に審判がいるプロ野球

和歌山市　堀畑靖子
ブラックホール逢うのはいつもそんな場所
どうなると二人の明日を問うあなた

松原市　小池しげお
目の位置を少うし下げて見ませんか
コップ酒内緒話はしてくれず

堺市　高橋千万子
シャッターを真昼におろす用が出来
横文字へ辞典がわりに孫を呼ぶ

大阪市　亀井円女
今のとこ嫁とは五分のまるい仲
亡母の声あんたも年や無理しなや

和歌山市　福本英子
猫三日行方不明の躁鬱症
悪友がうろうろしてるまだ死ねぬ

箕面市　椎江清芳
お天気をいつも気にする弁当屋
よい鴨が来るまで坂で待っている

出雲市　森山健歩
自分でも尻尾振りたいのがわかる
ジョークの矢　意外に深く刺さります

弘前市　波多野五楽庵
かき氷食べたいと泣く夏の鬼
振替の用紙も入れてくる無心

鳥取県　土橋はるお
庭石を磨くと喋るかも知れぬ
どっこいしょルーズな腰の根が切れぬ

米子市　光井玲子

珈琲館のしゃれたカップに逢いにゆく
想い出が詰まり引出しはみ出そう
鳥取県　新家完司

失恋をするたび部屋の模様替え
月はおぼろ花占いは中の吉
尼崎市　春城年代

矢印に警戒心が強くなる
嘘だけは達者で年を食っている
岡山県　松本元江

幾万の謎がまたたく銀河系
生れ合せた不思議な絆と契り合う
倉敷市　田辺炎六

手料理は畑でとれた豆の味
鉄線花自慢の数を見てもらい
佐賀県　寺中三枝子

お守りと思えば保険苦にならぬ
自家菜園いま虫取りに夢中です
米子市　小西雄々

民宿で人魚が酌をしてくれた
テリトリー守り明るい嫁姑
大阪市　津守柳伸

和歌山市　山口三千子

いざ家出持ち出す物が多すぎる
方便の嘘だが何故か胃にのこる
大阪市　今西静子

米子市　青戸田鶴

薄い月薄い絆をふと思う
兵庫県　遠山可住

神さまが置いた小石にけつまずき
空っぽの頭で女よく喋る
宝塚市　丸山よし津

夢さめて指十本を確かめる
尼崎市　春城武庫坊

しょうむない電話がかかる午後三時
豊中市　安藤寿美子

百姓を継ぐ気にさせた父のメモ
鳥取県　さえきやえ

うれしくてすこしの酒に酔うている
岡山県　千原理瑛

救う道これしかないと突き放す
和歌山市　田中みね

不整脈とれてシーツがバラ色に
堺市　神原文

鼻歌は父のエレジーかも知れぬ
広島市　名和喜一郎

遠景に君のほほえみだけがある
鳥取県　小谷美っ千

じゃがいもの花の白さに包まれる
和歌山市　後藤正子

振り切って歩く溺れてしまうから
和歌山市　松原寿子

里帰りこれだこれだと母の味
奈良市　米田芳子

何の罪だろうか風邪を引きました
鳥取県　田村きみ子

花博においでと言うてこぬ身内
倉吉市　淡路ゆり子

茨木市　堀良江

相方がよきライバルというコンビ
豊中市　田中正坊

びいどろの金魚が紅し沖縄忌
京都市　松川杜的

尻見せるCMがちと多過ぎる
摂津市　もちずき遊美

鯉のぼり若者狩りはもう許さん
唐津市　久保正敏

丁寧にスト決行のビラをくれ
岸和田市　芳地狸村

改革に命運賭けている首相
豊中市　滝北博史

靴音が揃わぬうちは平和です
羽咋市　三宅ろ亭

子の数が少ない日本どこへ行く
米子市　中井ゆき

不遜です水の流れを替えるなど
大阪市　塩田新一郎

花博を貶しながらも三回目
大阪市　北勝美

朝刊の三十頁にある不信
大阪市　板東倫子

児童にも登校拒否をする権利
岸和田市　三輪通彦

おやじギャル増えダービーは花盛り
岡山県　矢内寿恵子

世界一長寿へ福祉立ちくらみ
宇部市　中村三良

平和だなドッグフードを犬が選る

熊本県　高野宵草

札束でぎっくり腰をしてみたい
和泉市　中川楓

大自然の涙だろうか酸性雨
大阪市　山北三三三

言論の自由を否定する刺客
竹原市　信本博子

金だけの世ではないけど欲しい金
和歌山市　山川克子

大金はないが小銭にこと欠かず
茨木市　藤井正雄

審判の腕砂塵から出てアウト
大坂市　中西兼治郎

父親の威厳通じぬ子供部屋
奈良市　井上大

本業にかえれと株の値が下り
鳴戸市　八木芳水

先生の禁煙笑い吸う生徒
鳥取県　土橋螢

住田三鈷氏のご逝去を悼む

突然にさよならなんて困らせる
福岡県　横地雅風

争って出れば優しい庭の花
藤井寺市　中島志洋

紫陽花にどう化けるやら雨蛙
吹田市　栗谷春子

朝の道あの紫は桐の花
姫路市　福本好花

色変りしてもあじさい矢張り好き
弘前市　真喜内實

盆栽は蛇口の清い水が好き
河内長野市　植村喜代

飛んで来た蜂も酔ってる春の宵
出雲市　小玉満江

仏壇に長持ちする花選ってます
高槻市　川島諷云児

肩書を外すと丸い輪が書ける
姫路市　中塚遊峰

くそまじめで通し笑いの種を蒔く
和歌山市　桜井千秀

飼犬に咬まれたことは伏せておく
鳥取市　前田一枝

後れてた時計に恋を取り逃し
寝屋川市　平松かすみ

出てみよう大根足のコンテスト
出雲市　竹治ちかし

初恋は年をとらないままで生き
姫路市　丁坪サワ子

栄養剤より効きそうなちょいとラブ
和歌山市　西山幸

楚々と生きたしくれないにむらさきに
今治市　渡邊伊津志

新しい友を見つけた春の風
愛媛県　八塚三五島

週一度きちんと逢って愛つづく
鳥取県　西原艶子

どんじりで気楽に走ることを知り
今治市　矢野佳雲

漬け物にじわじわ母の味がのり
黒石市　相馬一花

カラオケの先生出ないのど自慢
米子市　茂理高代

伏せておく軽い火傷をした小指
有田市　生馬芙美子

腹臣に噛まれて長い雨に遭う
有田市　松井かなめ

あんたかてうちかて辛い長患い
米子市　金山夕子

わたくしの部屋にあなたの貴賓席
今治市　月原宵明

時効には妻の記憶が許さない
羽曳野市　麻野幽玄

ちびちび呑んでやがて呑まれる一人酒
和泉市　西岡洛酔

花時計お伽噺の夢を見る
十和田市　阿部進

願い事でかくて神にあきれられ
羽曳野市　吉川寿美

病名が夫と同じ計のたより
寝屋川市　宮崎菜月

嘘のないこの世はおよそつまらない
堺市　近藤豊子

母さんの白髪は僕のせいらしい
弘前市　村田善保

一億の中の夫婦という絆
寝屋川市　江口度

トンネルの中で仲間を見失う

堺市　桜沢　あか里

わからないまま先輩についてゆく
鳥取県　西浦　小鹿

一日は二十四時間平等に
羽曳野市　田中　透太

苦労して歩いた道は忘れない
鳥取市　近藤　秋星

心機一転枕カバーを替えて寝る
堺市　小西　小雪

正直に行ったら厭な顔をされ
倉吉市　野中　御前

海の彩いっぱいつけて船かえる
兵庫県　倉垣　恵美

乳牛の目があまりきれいで恥ずかしい
米子市　服部　朗子

荷造りに男結びが出番です
岡山県　福原　辰江

たたかいはさあこれからと紅を引く
枚方市　森本　節子

気さくなおっさん数珠忘れて帰りはる
箕面市　岩津　ようじ

悪いとこだけ当たってる占い師
芦屋市　根来　敬

物忘れのコツを覚えて使い分け
鳥取県　乾　喜与志

喉は往来胃カメラもよく通る
寝屋川市　堀江　光子

礼言えば今更と父笑うかも
静岡市　渥美　弧秀

握り飯がてるてる坊主信じきる
鳥取県　上田　俊路

結ばれた運命の糸信じよう
和歌山市　木本　朱夏

四の五のと言って縁談引きのばし
倉吉市　奥谷　弘朗

さりげない所作に人柄にじみ出る
唐津市　浜本　義美

特売場オバタリアンの手の早さ
広島市　中村　要

散歩道酒の匂いのする方へ
兵庫県　酒井　靖子

協力で咲かせた花にある和み
岡山県　富坂　志重

上等の茶菓子に話かしこまり
八戸市　島田　昭治

瞑想もあれこれ欲なことばかり
岡山市　小野　克枝

遠くから祈ってくれる母の在り
松山市　谷　真風

生きぬいてこそのいのちに光あり
川西市　松本　ただし

脳味噌の底から抜けぬ鯨尺
唐津市　筒井　朴竜

山海の珍味土産にUターン
唐津市　山口　ふさ子

記念写真昔は皆んな炎えていた
島根県　榊原　秀子

年中が連休雨を苦にしない
唐津市　入江　喜久亭

ナツメロのハミング妻も老いたなァ
七尾市　松高　秀峰

菜食と薄味に馴れ老いの膳
岡山県　小林　妻子

指切りを忘れて孫にしごかれる
寝屋川市　坂上　高栄

六十路越え時々はずす鏡掛け
橋本市　岸本　木魚

長短の針のようにと老夫婦
鳥取市　西村　黙光

ワハハハハッ恋に齢などあるもんか
秦野市　三原　浮木

大丈夫かいと鏡に駄目押され
仙台市　川村　映輝

妻の無い人を羨む不倖せ
鳥取県　林　露杖

父の日に銘酒セットの宅急便
熊本市　有働　芳仙

点滴の定連と言う顔になり
岸和田市　清野　こう

眠ってる間に死にたいと一人住む
岡山県　江口　有一朗

できるだけ娑婆に執着して死なん
川西市　野村　静雄

突然に明日の無い日が来るのかも
今治市　渡辺　南奉

お迎えに順がないからあきらめず

投句先＝川柳塔社事務所へ（川柳塔用箋に**3**句以内）

女性コーナー

茴香の花

八木千代選

冗談が過ぎると思う　死の眼を開けよ　米子市　林　瑞枝

誰でもそう思い誰も言いたいことなのに、めったには誰も書かない。力がないと書けない。いくたびも死の場面を見てきた作者は、絶対に冗談だとは思っていない。恐ろしい事実を真っ向から受け止めているのだけれど、億分の一の確率にでも賭けたい。その切々とした心情から「眼を開けよ」と書かずにはいられなかった。その真実の叫びが私を引きこんでしまった。

トマトを切るとなまくらなのがよくわかる　松原市　佐藤　奏月

実にいい位置にトマトが置いてあって、鮮烈な赤が主体のように見える。けれど本当の主語はなまくらの中に存在している。トマトには微妙な感覚のきしみが皮にあって、スパッと切るのは簡単のようで、包丁の切れ味と気合がいる。なまくらだと自省している姿が妙に気にかかって手助けしたくなる。なまくらどころか。あとはくり返して包丁と深い仲になるだけ。

白い紙の裏をときどき眺めている　和歌山市　後藤　正子
世紀末を考えているロダン　富山市　舟渡　杏花
見届けることがこわくて目を瞑る　和歌山市　西山　幸
カチカチカ　街を支配している音　尼崎市　新井　朋子
拾う気で歩けば何か拾えそう　大阪市　本間満津子
風邪ひいた訳を誰もが知っている　松江市　竹内すみこ
どこで芽を出そうと有為の風の中　大阪市　冨上　朝世
クリップで止めるあなたの過去ばかり　堺　市　板野　美子
逃げ出してさてその先に何を見る　和歌山市　森　茜
自分のこと自分で出来るまで生きる　米子市　木村富美子
総点検すると小さくなるわたし　兵庫県　倉垣　恵美
どうせなら皿十枚を割りましょう　和歌山市　木本　朱夏
本当の私を写す紙が無い　倉敷市　小野　克枝
赤と黄の夏ぞまぶしく老い初める　名古屋市　藤井　高子
咲き競う花に明日は問うでない　米子市　青戸　田鶴
愛憎の憎がうっかり出てしまう　和歌山市　田中　輝子
耳からの話に負けた蕁麻疹　倉吉市　野中　御前
美しい顔で紙屑捨てて行く　和泉市　中川　楓
反骨精神もってじゃがいも剝いている　和歌山市　福本　英子
出席と返事を出すと風邪引きそう　尼崎市　春城　年代
どの花もひとを優しくする色素　寝屋川市　豊福　路子
半端な鈴で神をイライラさせている　米子市　政岡日枝子
花吹雪わたしは風の掌の中で　静岡市　大神　静枝
日本人が手抜きしている日本語　大阪市　町田　達子
こだわりのない事だけど足が向く　倉吉市　淡路ゆり子
洗いたい過去がいくつも増えてくる　和歌山市　山川　克子
家という養に隠れて抜け出せぬ　大阪市　神夏磯典子
とても静かに妻は離陸を考える　富田林市　池　森子
ラブレターなんど読んでもいいもんだ　寝屋川市　宮崎　菜月
赤い花の話ききたくない気分　羽曳野市　芦田　絢子

唾つけて済むあなたとのかすり傷
イントロが一人歩きをして困る
花博の花ある限りいくさせぬ
つかないと毬が私を駄目にする
守る気もない約束をしてくれる
午後になると歪んでしまう左肩
みだれ髪　量られているわたしの負
洗濯物たんと干してる安心だ
荒れた掌をそっと労るのは自分
苦を解いておんな静かに歩き出す
ＳＯＳみどりみどりが足りません
どの子もうまく通ってほしい曲り角
鰭つけて潜ってみたいハートです
苦笑してやさしい人に思わせる
咲いてよし散ってよしオンナでいたい
自信過剰小さな穴は越えられる
糸とりの川で溺れているわたし
雲悠々目的ばかり追うでない
不信感　首を振らない扇風機
いとおしいものへ砦を開けておく
それは確かに北へ流れて行く情話
影法師そっと戸口へ置いたまま
猛毒のおいしさ少し解りかけ
迷いから醒めて眠たくなってくる
大きい声で笑う明るい庭の下駄

和歌山市　桜井　千秀
和歌山市　細川　稚代
大阪市　宮西　弥生
米子市　野坂　なみ
寝屋川市　岸野あやめ
島根県　松本　文子
大阪市　田中　弘子
和歌山市　内芝登志代
鳥取県　西原　艶子
和歌山市　松原　寿子
田辺市　染道　佳明
大阪市　鈴木　節子
寝屋川市　平松かすみ
米子市　新　正子
佐賀県　寺中三枝子
京都市　本荘　福子
大阪市　島村美津子
西宮市　奥田みつ子
大阪市　西出　楓楽
米子市　白根　ふみ
藤井寺市　高田美代子
岡山県　山本　玉恵
弘前市　肥後和香子
西宮市　西口いわゑ
米子市　小村てい子

傍線の朱がとっても多弁なり
企みを捨てた金魚の広い鉢
ビスケット薄く焼き上げ少女返り
書き損じばかり作って私小説
とても素敵な縁でしたね　あなた
一生をかけて泥舟塗り直す
腹立ちをうつした鏡憎うなり
遠慮なく語り合うてる水面下
姑となる日へ肩がこってくる
フィーリングが合うか野良犬しっぽ振る
今日からは私がママよ迷い猫
押し花が落ちて点滴思い出す
六十路だがピンクの花を咲かすかも
モチーフも大小あってわが起伏
心もう浄土に遊び写経する
ちょっと見て猿も大きい方を取る
行儀よくならんで夏の野菜畑
天国へ逝ったつもりで頑張れる
野に山に人の情けと恩恵と
量られぬ湖の深さが人を呼ぶ
有田川の水で染まった夫婦です
豌豆の花の乱れに添え木足す

◇

羽曳野市　吉川　寿美
富田林市　片岡智恵子
米子市　川上より子
和歌山市　古久保和子
岡山県　千原　理瑛
米子市　茂理　高代
岡山県　富坂　志重
貝塚市　池田寿美子
堺　市　高橋千万子
竹原市　信本　博子
姫路市　丁坪サワ子
吹田市　栗谷　春子
堺　市　三浦　和子
寝屋川市　井上すみれ
宝塚市　丸山よし津
堺　市　神原　文
岡山県　松本　元江
鳥取市　松本伊都子
岡山県　矢内寿恵子
米子市　服部　朗子
有田市　松井かなめ
熊本県　岩切　康子

投句先　〒683　米子市花園町14―8　八木　千代
（ハガキに3句）

仏

小林由多香選

仏様お願いしたいことばかり　恵美
仏には学歴問わずみな成れる　呼風
草餅を供え仏と対話する　鉄治
見物のついで仏に手を合わせ　兼治郎
三度目の願いに仏にが笑い　美津留
故郷の野仏の丘亡父もいる　彩子
相続の揉めに仏も浮かばれず　白光子
初ものはまず仏様召し上がれ　御前
仏心がよぎりゴキブリ逃げおおせ　希久子
仏との対話日課にしてひとり　和子
仏のエーと言われ万年平社員　度
仏さま拝んで今日を整える　きみ子
嘘一つ仏心に裁かれる　艶子
仏壇の下を一度は探すこと　隆
仏には済まない罪を着てもらい　明水
困ったら仏壇拝むくせがある　侑里
仏から継いだ負債のマイホーム　可住
子守唄未だ知らぬまま水子仏　たかし
仏様に夫婦げんかを見てもらう　はるお
生涯を島で脈とる生き仏　京子
仏は三度私はもっと許してる　正子
仏との出合い人生観変える　典子
野仏に立小便を見付けられ　しげお
夕ざくら明日を仏と予約する　三五島
仏壇を開いて今日が回り出す　高栄
鬼になる前に仏にごあいさつ　螢
孤に耐えて尼僧仏の道に生き　愛論
六道の辻で仏と待ち合わす　美代子
仏描く穂先へ仏宿らせる　博子
呑んで寝て仏師はノミを握らない　宵明
野仏と村の子供は仲がよい　諷云児
同窓会だんだん仏顔になる　温子
仏壇の造花を母は嫌いぬき　弘朗
極楽で退屈でしょう仏様　正坊
仏にも頼めぬことが増えてきた　雄々
仏の好きな花買いにゆく春の街　枯梢
お遍路を重ね仏の顔になる　蕗児
仏の道を淋しがりやの亡母は行く　玉恵
みほとけのお顔お布施に拘らず　やすお
路地裏の地蔵が小銭溜めている　四郎
傘さした仏に逢うたにわか雨　どんたく
連れ合いが逝って仏の道がつく　芳水
野良犬に仏心を狙われる　ただし
胸底の仏に今日は賞められる　みつ子
野仏の伏目に夏の陽がまぶし　元江
仏にはすまぬ再婚ばなし聞く　軸

送る

林　荒介選

新緑の新茶を送るありがとう　螢
子に送る荷へ余るほど紐を掛け　明水
駅止めの孫を受取る夏休み　たかし
子を送る　タンス電話機冷蔵庫　正子
菜の花に無人の駅を見送られ　杜的
送料で買える故郷の土の味　隆
早立ちをずらり人情に送られる　たつみ
書き足して次のページに送らねば　美智子
外孫を送ってからの肩の凝り　シマ子
いつまでも見送る母が点となる　諷云児
今日のこと明日に送るくせがつき　弘朗
塩送る心になれば縮む距離　大柏
花言葉送る女の風車　京子
ウインクを送るわたしは魔女ですか　きみ子
丸文字で送られてきた果し状　正坊
知恵袋送ると神の木をゆする　雄々
四十一円で送る秘密の無い便り　緑良
空白の心に送る春の画布　三五島
ライバルにエールを送る不整脈　ただし
一人ずつ送って母の樹が細る　ちかし
送り火に絆の切れる音がする　雀踊子
母さんに出合うとこまで送ってネ　はるお

月の夜を送ってくれる影法師　典子
病む友へ送る言葉を撰っている　倫子
送り仮名付きの名刺が温かい　保州
わたくしを送ってくれる妻がいる　枯梢
牛市に送る仔牛が啼いている　蕗児
吉報を送れるだろう九合目　比呂志
野辺送り済ませコーヒー飲んでいる　度
愛送るには少し年とりすぎた　文子
それなりの時間を送る余命表　御前
松茸を送らならぬ義理がある　可住
妻の背の老いは黙って見送ろう　清柳
花筏風の情けに送られる　寿恵子
送り仮名一つに辞書を借りている　英子
花の種送りあなたと暮らします　小鹿
旅立ちを送る子ばなれ親離れ　元江
惑星に合図を送る愛送る　みつ子
送られて送って月は中天にちよ　走馬燈に送られている魂　規不風
送り仮名やまと言葉を大切に　寿美
われものと書いたわれもの送って来　路子
送られて送って木曽の春の雨　静歩
父からの鋳型を男の子へ送る　しげお
まごころを送るまごころまた届く　艶子
わたくしを送りつづける向う岸　軸

童謡

西出楓楽選

童謡がちひろの絵から響きだす　高子
童謡が一番うまいおばあちゃん　新正子
童謡がとっても好きなおもちゃ箱　諷云児
童謡に新曲がないビルの街　比呂志
母を恋うとき童謡を口ずさみ　白光子
童謡で同窓会が酔っている　喬水
童謡を一つおぼえた乳母車　しげお
童謡を唄えば回り出す水車　鉄治
童謡のリズムに合せ靴が鳴る　ただし
童謡の子らが帰って行く夕陽　夢酔
童謡の川に螢が住めぬ色　博友
童謡が消えた野山へ酸性雨　サワ子
月の砂漠あの日の夢を積んだまま　あずき
童謡をバックに過疎の村興し　信義
童謡を思い出させた孫ができ　柳五郎
童謡は祖母のリズムで覚えられ　たつみ
童謡がない夕焼けへ塾帰る　可住
童謡に捨てた故郷がのしかかる　ちよ
童謡の世界に還る過疎の島　たかし
童謡をうたうと老化寄りつかぬ　艶子
孫の手が温いトンボの唄にする　虹汀
童謡を歌いつくして母待つ夜　寿恵子
童謡へお手手をつなぐ道がない　宵明
童謡も演歌も弾むしまい風呂　悦子
童謡を歌うと月がまんまるい　達子
童謡と軍歌が巡る走馬灯　恭昌
童謡の中へ夕陽が落ちてゆく　松本文子
分校の童謡を聞く道祖神　京子
CMソング童謡にして現代っ子　みつ子
童謡の流れる窓があたたかい　美智子
童謡が古里連れてくる夕べ　有一朗
童謡がブランコに乗る風になる　小鹿
夕陽け小焼け断絶の向う岸　螢
童謡が海の中から湧いてくる　蕗児
童謡が聞えてきます老いの森　枯梢
鳩ポッポ知らない鳩が病んでいる　保州
童謡を唄い続ける里の四季　元江
童謡も森繁節にさおり節　道胤
童謡が出て宴会も里心　四郎
童謡の半ばで飲ます風邪薬　二南
童謡の森でどんぐり脱皮する　雄々
童謡を詰めた枕に子を寝かす　彩子
赤トンボ少年の日は暮れやすし　正坊
童謡にもう弾まなくなった毬　正敏
童謡の中へストレス溶けてゆく　軸

初歩教室

題 ― 先走り

辻　白渓子

今月の題「先走り」は、先走って悔いが残ると言う着想が多く、平凡の感がありましたが、どんな悔いが残ったかという情景がそこに入ると面白い句ができると思います。次に本社経由で投句がいつも数人届きます。手間や整理の都合がありますので、直接、葉書でお願いします。

先走り千勝祝の鯛欠伸　章久
（お祝いの鯛飾っとく先走り）
人がよく先走っては後悔する　ひさ子
（後悔をいつもしている先走り）
先走り悔いを残して見送られ　すみれ
（先走り悔いが残っている不覚）
先走り言いすぎてから残る悔い　芙美子
（言い過ぎた悔いをためてる先走り）
集まれば先走る人いつも居る　登代
（先走るのがグループにきっと居る）
かげぐちがおひれをつけて先走り　君江
（先走る陰口歪めて伝えられ）
トラブルを生んで越えてく先走り　みつこ
（先走りあとでトラブル付いて来た）
先走る企業の丸秘に火花散り　志華子
（先走る企業丸秘を抱く金庫）
先走り見送る客の切符買い　美恵子
（見送りの切符も買うた先走り）
先走りされて話がまとまらず　絢子
（先走りされて計画駄目になり）
先走りいわずもがなの事で揉め　一乗
（先走り誤解をされて揉めはじめ）
先走り配達先を聞かず出る　昭治
（配達先聞いてなかった先走り）
先走るヘマも軽さで憎めない　幸枝
（憎めないヘマ笑うとく先走り）
めだとうと一番先に手だけあげ　夕峰
（一番に手をあげ目立つ先走り）
先走り世話役人の有難い　幟
（世話役の世話行き届く先走り）
この年でまだ先走る悪い癖　円女
（先走る癖が止まない親ゆずり）
先走るいつも彼奴にしてやられ　好花
（ライバルがいつもの通り先走り）
先走る気質直らぬまま老いる　時弘
（先走る癖が老いても治らない）
気がきいたようで間抜けの先走り　志重
（間が抜けていたのを気付く先走り）
世渡りが下手な男の先走り　金吾
（世渡りが下手につまずく先走り）
おせっかい先走りして悦に入る　静子
（先走りしておせっかい嫌われる）
先走り言うた言葉で頭打ち　高栄
（先走りしたのを悔いている言葉）
何事も先走る子のたのもしさ　茂章
（先走る子供をたのもしく思う）
ひっこみがつかなくなった先走り　ようじ
（訂正が効かなくなった先走り）
私の影おいとけぼりで先走る　美代子
（影もまた少し慌てた先走り）
先走る商法危険がつきまとい　サワ子
（先走る仕入れ不安がつきまとい）
先走る軽々しさが気にかかる　美子
（口軽いお人でいつも先走り）
目先利く割にでしゃばり多すぎる　武治
（出しゃばりが意見を通す先走り）
先走る独りよがりが的にされ　敬
（先走る男を当にした不覚）
嫁の縁談先走る母の迷い箸　春風
（嫁の縁談愚妻がいつも先走る）
でしゃばって幹事の役目持たされる　㊂和子
（でしゃばりの幹事しくじる先走り）
先走る熱気おさえて策をねる　清柳

（策練ってねって押さえた先走り）
先走り旅のホテルでもてている　呼風
（先走る幹事ホテルで行き届き）
先走り阿呆な女に見えてくる　房子
（先走る阿呆な人に逆らわず）
先走りわなにかけられ穴に落ち　秀香
（先走り仕掛けたわなにはめられる）
それほどでも無いのに先走り救急車　保夫
（先走り詫びて帰した救急車）
先走りさせない杭が打たれてる　艶子
（先走りさせない杭を打っておく）
先走りして助かったお家の値　しづ子
（先走り手頃な家を見つけ出す）
我ながら先走りして赤面す　喜代子
（酔うていた悔いが残った先走り）
腹痛を盲腸炎と先走り　繁男
（先走り盲腸炎にして案じ）
鵜のみして人のことまで先走る　豊子
（他人のことほっておけない先走り）
子離れができず行く先下見する　方子
（先走りして子離れはまだ出来ず）
先走ったばかり言い訳疑われ　芳水
（先走りした言訳がくい違い）
先走る私は常に悔いばかり　侑里
（悔いいつも残る私の先走り）
先走り何でも早い物が好き　一枝

（先走りおっちょこちょいが玉にきず）
思いきって先走り一度だけして見ようか　ミツエ
一寸、長すぎますね。短く詰めて下さい。
（好奇心一度だけした先走り）
先走り過ぎてころんでばかりいる　㈲和子
（先走りいつも失敗して倦きず）
先走る顔には才が走ってる　昭子
（先走る顔に自信を見せている）
先走り孫ワープロを打つ恐さ　隆
（先走るワープロ孫の腕たしか）
仕事柄冬着カメラで水着ショー　明吉
（水着ショー冬に撮ってる先走り）
招かれもせぬに一升瓶を提げ　隆雄
（一升瓶提げて祝いに来た仲間）
先走り帰りの切符買ってやり　春子
（先走り帰りも序でに買う切符）
マスコミが先走りして恋実る　義
（タレントの恋マスコミが先走り）
腰据えて聞かぬ慌ての先走り　軒太楼
（半分は鵜呑みに聞いて先走り）
先走り皆の視線で鼻を折る　彩子
（先走りさせない視線が取り囲む）
何事もつい先走りへまをする　姫女
（へマをまた繰り返してる先走り）
先走りするからいつも損をする　㈱隆
つい癖で先走りして損してる　登代

（先走る癖損しても止まらない）
先走る夫を助ける妻が居て　幸枝
（先走る夫に倦きず連れ添うて）
先走り二次会までも決めておく　いさ子
（二次会の店決まってる先走り）
先走り誰より先に風邪貰い　すみれ
（有難くない風邪貰う先走り）
気が利いて他人の分まで口走り　一乗
（迷惑が他人にかかった先走り）
英才もつまずき出した先走り　しづ子
（才能を過信しすぎに先走り）
一番にマイク取ったが歌詞忘れ　多峰
（先走るマイクへ歌詞が出て来ない）
先走り他人の事で喧嘩する　侑里
（先走り他人の喧嘩ほっとけず）
着想と表現が巧みな句　義
気がつけば一人芝居の先走り　〃
知られては困る噂が先走り　金吾
放送局という奥さんの先走り　ようじ
私の句
先走り勘に頼って買うた株　白渓子
先走る癖まで父に似て困り　〃

◇

題「**緊張**」　**7月15日締切**（9月号発表）
宛先　〒569 高槻市桜ヶ丘北町3―19
ハガキに**3句**以内　辻　白渓子

川柳と表記法

川柳こぼれ話

田中正坊

前回の「川柳と外来語」で、日本語には和語と漢語と外来語とがあるとのべたが、和語はひらがな、または漢字まじりのひらがな、漢語は漢字、そして外来語はカタカナで書くことが現代では定着している。つまり日本語は一つの国語で三種の文字を混用するという世界にもあまり例のない言語だが、最近ではPTAとか、NHK、JRなど、英字（アルファベット）も使うから、これを入れると四種ということになる。

これをわずらわしいと思うか、すばらしいと見るかは意見の分かれるところだが、たしか森中恵美子さんが何かに書かれていたのを孫引きさせていただくと、「漢字は硬い感じ、平仮名は天平美人のまゆ、片仮名はジャックナイフ、いろいろの特色を持つ日本語はすばらしい」と、詩人の草野心平が語っていたという。散文も詩も表記の道具が多いほど、多彩な表現ができると思うので、私もこの考え方に賛成である。

そこで問題となるのは、英字はしばらくおくとして漢字・ひらがな・カタカナの三種の文字を一つの文や詩の中でどのように用いるか、それによってどういう効果を発揮するかということである。会津八一の歌がすべてひらがなで表記されていることは広く知られているが、あることばを漢字で書くか、かなで書くかについて小室善弘著『歌帳句帳』（東書選書）は、次のようにのべている。

「全体をかなで書く場合には、漢字かなまじりにくらべて、読みの速度は緩慢となり、意味の明瞭性もいくぶんぼやけてくる。そのかわりに、一字一音がほぼ同じ重さをもち、ほぼ同じ速度で規則的にはこぶことになるから、漢字まじりより、語と語の間の緩急の差が少なくなり、したがってリズムは平明で、のびやかなものとなる。また、字画のこみ入った四角な漢字が目に飛び込んでくることもないから、全体は濃淡のないあかるい顔をもつことになる」。そして俳句では、

をりとりてはらりとおもきすすきかな　飯田　蛇笏

を例示しているが、川柳では、『現代川柳選集』第二巻所収の酒井路也氏の作品は全体としてかなが多く、ひらがなだけの句に、

おまつりがすんでわたしになるわたし

きれいごとばかりでなかよしになれぬ

があり、それなりの効果をあげている。

これとは反対に全文漢字表記の句もあり、

四顧蒼翠南總里見八犬伝　富安　風生

がよく知られているが、川柳でも、

脚線美汝元来日本産　川上三太郎

と、ないことはないものの、私の知っている範囲では佳句は少ないようである。さらにカタカナの川柳では、

ルーヴルでミレーゴーガンルノワール　中島生々庵

我田引水ながら私の句（車の課題吟）に、

メイドインジャパンの車ワンダフル

があるが、これもお粗末。

やや特殊な例を示しすぎたが、短い詩型で柳誌または句報に活字となったときの視覚的効果を考えるならば、どのことばをどの文字で表記するかについて、くふうの上にもくふうを重ねたいものである。なお付け加えると「人間」を「にんげん」、「レモン」を「檸檬」、「鉛筆」を「エンピツ」、「ビードロ」を「びいどろ」など、文字を転換することも一つの表記法であり、これ以上は作者と鑑賞者のセンスにまつほかはない。

柴田英壬子句集紹介

『夾竹桃』に夏が来る

高杉鬼遊

太古から虫は一つの顔で生き

この句に出合ってホッとした。そして嬉しくなった。選句を依頼されて、よい句にめぐり合えるほど、選者冥利なことはない。それは句会、句集何れによらず、選句をする者の喜びの一つである。

川柳歴からいえば、英壬子さんの方が僅かにしろ先輩だと思う。その人から句集の選句を頼まれたのは光栄である。平成元年の暮に督促の電話があり、鈍い自分を追いたてる。

釈迦如来ナップザックの娘にも逢い

この新旧の対比は、単なるスナップではない。変動の時代を堪えて来た者のみが知る深みがこの句の背後にある。重い内容をこんなに軽やかに詠えるのは作者のお人柄である。

宍道湖に語彙の乏しさ噛みしめる

夕景の宍道湖を見る女のシルエットが、焼きついて離れない。美しいものを美しいと言わず、自己を責める習性は、狂気の戦中戦後を生きた同時代人の哀しい性かも知れない。

平凡に福寿草の鉢買うてくる

師系に当る麻生葭乃先生の句集『福寿草』の一句、〝福寿草松にしたがいそろかしこ〟を想う。上句の「平凡」には、万語に尽きない苦節の数々が秘められている。

縁起よい夢暮れのうち見てしまい

平凡であればあるほど、何かを支えにそれを頼りに生きる女の明け暮れが、日常の些事を通じてコミカルに詠われている。美辞麗句をよりどころにする川柳から見れば、無視される存在であるが、ささやかな欲を見つめる作者の姿勢とこころは大切に残したい。

捨て石にもなれず二十年勤め

会社はことあるごとに、一身同体のように社員に恩を売るが、それは建て前であって、気づいた頃には婚期が過ぎていた。作者がそうだと言うのではなく、その時代を勤めてきた純真な責任感を見る。

男だけにしか敷かれない社のレール

職場の花も気がつけば〝水中花こんな花にもナルシズム〟と悟らざるを得ない。今ならセクシュアル・ハラスメントと騒がれるが、差別の中を生きてきた経験は、ほんものを見る確かな視点を持っている。

日の丸を見ると捨て身になる男

世の関白亭主を嫌ほど見てきた女性には、その愚かさを抱擁するやさしさがある。

海行かば緑の星となり給う

この一句には、青春の哀愁がこめられている。夜の海の彼方にまたたく星の数々は、戦場に散った兵士のいのちだと思う。

恩師から見れば常務のなま臭さ

この師は、故人になられた松江梅里、川村好郎お二人だと想う。川柳をやるものの誇りが感じられるのは、川柳人の自負である。

たたみいわし女系家族へ伺候する

この〝たたみいわし〟は、作者の庶民性であり、下句〝伺候する〟に、彼女の礼節を見る。好きな一句である。

夾竹桃の一途を享けてくれますか

句集『夾竹桃』の題になった一句と思う。戦さをくぐってきた人の勁い覚悟のほどを見る一句だが、構えや衒いのない心あたたまるよい句集である。

忘年会こよいは大阪市を離れ

大阪を出ては働くとこがない

大阪に生まれ、大阪に育った同郷の誼でいうのでない、一句一句に生活がある。

灯を消してわたしも寝ます仏様

■ずいそう

羽衣

布施幸子

天の羽衣ひらひらと／天女の舞いの美しさ／いつか霞に包まれて／空にほんのり富士の山

国民学校の音楽室で合唱しながら、富士山の上空はるかに去っていった天女に思いをはせた少女の日。おしゃれご法度の時代だったから、あでやかな天女のコスチュームに、憧れがいっそうつのりました。

『羽衣説話』は、古くから全国各地にありました。天女が羽衣をぬいで水浴びしている間に、地上の男に羽衣を盗まれて帰れなくなる。二人は結婚するが、天女はやがて天に戻ってしまう―というのが、たいがいの筋になっています。天人女房の話とされるこのモチーフは、日本だけでなく、ご近所の国々にもあるそうです。天女はみんなに愛されてきたのですが、ヨーロッパにもある『白鳥処女』説話も、同型の話です。白鳥と天女が入れ替っているのです。

天女のルーツは古代インドです。シルクロードを通って中国へ、そして周辺の国々へと広まって日本へもやってきました。

日本では、駿河国（静岡）の三保の松原が天女伝説の本家のようです。中世以来、能の『羽衣』によって有名になりましたが、平安時代のはじめ、文章博士の都良香（みやこのよしか）が「天女が富士山頂に舞うのを見た」と『富士山記』に書いており、もともと天女のお気に召した土地だったのかもしれません。

―漁師の白竜が、三保の松原を通りかかると、一本の松の枝に、この世ならぬ美しい衣がかかっていました。夜明けの空のような金色がかった朱色の、せみの羽みたいに透きとおった薄ものです。白竜が、家宝にしたいと手にとって眺めていると、天女が現れ、返して下さい、と訴えます。でも白竜はオーケーとは申しません。

「悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に帰らんことも叶うまじ。さりとては返したび給え」と嘆く天女は、これまた、この世ならぬ美しさ。

〝一挙両得〟が一転して、羽衣返せば天女も消える。けれども、白竜は良心的な青年で

兵庫ふれあいの祭典

川柳祭作品募集

作　品　未発表作品　3題（各1句）
題と選者（1題3人共選）
「路」北山青珠・遠山可住・保西岳詩
「磨く」植村客遊子・前川孤舟・山神まさ
「祭」泉梨花女・森田栄一・安川一酔
2次選者　去来川去城・泉比呂史・黒川紫香・小松原爽介・平山繁夫
応募料　1000円（定額小為替）
応募方法　所定用紙または便箋を使用、郵便番号・住所・氏名（ふりがな）・年齢・性別・職業・電話・大会出欠を明記
締　切　**8月20日**（当日消印有効）
作品集　1人1句掲載を応募者に配付
賞　文部大臣奨励賞ほか9賞
応募先　〒670　姫路市安田4丁目1
姫路市教委文化課内
姫路市ふれあいの祭典実行委員会

発表大会・表彰式

とき　11月3日（祝）午前11時開場
正午締切り

した。

「しかたありません、お返しいたしましょう。そのかわり、天人の舞いを見せて下さい」

「よろこんでお見せしましょう」

「まさか、羽衣だけ受けとって、舞わずに逃げるのではないでしょうね」

「信じて下さい。人間とはちがいます」

天女は人間との差を強調し、羽衣をまとうと、『月宮の舞い』を舞いはじめました。

うっとりするような神秘に雅びやかな舞い。羽衣をひらひらさせながら、天女は富士山の上空を高く高く天へと帰っていくのでした—

この天女は、月宮殿に住む三十人の舞姫の一員でした。月宮殿は、月の都に建つ御殿で、舞姫たちは毎夜、白い羽衣、黒い羽衣で踊ります。三十人全員が白衣で踊る夜が満月、一人二人と黒衣をつける天女が増えるごとに月は欠けてゆきます。全員が黒衣をまとえば闇夜になるわけです。

そういえば『竹取物語』も、羽衣伝説の一種とされています。かぐや姫は、月の世界の王女ゆえ、人間界の男性とは結婚できません。帝のおおせにも応じないで、天へと帰ってゆくのです。その夜は八月十五日、月宮殿の舞姫全員が純白の羽衣で舞う名月でした。

月に住む天女なら、月世界にだけいてくれたなら、物議をかもすこともないのですが、気まぐれに地上へ下りてくるので困ります。人間の王に恋をしたり、修業者の妨げをしたり、不注意からふつうの男に羽衣をとられてしまったり……だいたい、天女にとって最大の貴重品たる羽衣を、そこらの松にひっかけて、水泳なんか楽しむのがまちがいのもとです。住居の月宮殿には、定めし豪華なプールだってあるでしょうに。ええ？月にロケットが飛んでそんなものはないと確認した、ですって。不粋な発言はなさらないでください。私はいま、ロマンチックな天界の物語に酔っているのですから。

天女は、紀元前千年あまり昔に生まれました。古代インドの聖典『リグベーダ』に、おびただしく登場する天・空・地三界の神さまの一員として『アプサラス』と名のっています。神々慰問のため、空中で踊るのが仕事でしたが、やがて仏教にもとりいれられ、お釈迦さま説法のおりには上空から花をまくのが重要な任務になってきました。その花は、地に落ちることなく、宙にただよい、みほとけを飾らなければならず、かなりの技術が必要です。

天女のふるさとインドは、古代から薄布のすぐれた産地でした。二十五メートル巻いてターバンにしても重くない綿布。ヤール巾で指輪をくぐることができるダッカ木綿。布一枚がドレスとなるサリーは、「天衣無縫」といって縫い目のない羽衣に通じるように思われます。天女の衣裳には事欠かないわけです。

けれど、誕生した当時の天女は、べつに何もまとわずとも、自在に飛ぶことができたのです。そして、天女に限らず、天男もいて、仲よく仕事をしていたのです。中国でも敦煌初期の石窟には、ヌードの天男が描かれているそうですが、やがてまったく姿を消してしまいました。

天女びいきの人たちが、装飾的なファッションとして天女だけに羽衣をプレゼントし、やがてそれが大切な飛行用具になるに至って見捨てられた天男は淋しくどこかへ立ち去ったのかも知れません。

ところ　花の北市民広場大ホール
（姫路市増位新町2丁目12）

題と選者（各題2句・投句拝辞）

「椅　子」　大西　泰世選
「　輪　」　原田　北涯選
「移　す」　藤本静港子選
「　白　」　真殿舎句里選

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例　会　毎月第２月曜日午後１時　西宮中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西５分）

事務局及び投句先
〒663 西宮市高木東町９－４　西口いわゑ

黒川紫香	秋元てる	上田佳秋	奥田みつ子	奥山美智子	門谷たず子	西口いわゑ	林はつ絵
春城年代	春城武庫坊	藤村〆女	丸山よし津	山片紀雄	山崎君子	吉田笑女	

暑中お見舞い申しあげます

平成２年　盛夏

いずも川柳会

市電川柳より今年で49年を迎えました

川柳大阪

大阪市交通局互助組合文化部川柳部

部長　中田善三
責任者　中原比呂志
編集　高須賀金太
井上喜酔
岩井本蔭棒
児島与呂志
斉藤三十四
塩満敏
田中笑風
玉置重人
西岡洛酔
長谷川司
山下美津留
芳鉄心
※イロハ順

暑中お見舞い申し上げます

岡山　川柳後楽吟社

代表　行吉照路
直原七面山
鈴木九坡
荻野鮫虎狼
二宗吟平
花田たけ志
岩道博友
河野青銅
井上柳五郎
外会員一同

南大阪川柳会

毎月句会は19日です

お気軽にお越し下さい

参会者一同

暑中御見舞申し上げます

川柳塔まつえ

小西雄々　鳥取県溝口町溝口七五七
園山多賀子　出雲市東林木町九三五
吉岡きみえ　出雲市松寄下町二八四
久家代仕男　平田市灘分町一三九〇
金村青湖　出雲市大津町大曲二〇九七
松本文子　島根県八束郡宍道町一区
原　煩悩児　松江市朝酌町八三一一
門脇静恵　松江市上乃木町一七六一一
安食友子　松江市本郷町四一二五
浦邊静江　松江市南平台二一二五
福間芳枝　松江市東忌部町二二四二
竹内寿美子　松江市国屋町三八一
原　長三　松江市大正町四一八
柳楽鶴丸　松江市菅田町二四一九
舟木与根一　松江市西忌部町六一八一一
恒松叮紅　松江市雑賀町一六八六

高槻川柳サークル卵の花

暑中御見舞
申し上げます

京都塔の会

渡辺圭坊
高沢栄子
小林英子
山田葉子
都倉求芽子
松川芳子
松川杜的

お暑うございます

正本水客
黒川紫香
阿萬萬的
松川杜的
辻　白渓子
小池しげお
川島諷云児
藤村〆女
竹内花代子
奥山美智子
茂見よ志子
笠嶋恵美子

暑中お見舞い申し上げます

岸和田川柳会　一同

事務所　〒596 岸和田市上町７－36
植　山　武　助
電話（0724）39－0836

Y. F. C

海老池　洋
人見翠記
坪田紅葉
大塚節子
浅野房子
岸野あやめ
西尾栞

暑中お見舞い申し上げます

川柳クラブ　わたの花

高杉鬼遊
粟野千鶴子
生島ますみ
岩倉能子
大内朝子
小澤泰成
片上英一
川崎友甫
杉村龍襄
高橋初子
田中久美子
田中トシエ
田辺市子
西沢一雄
二瓶道子
橋本信江
服部春子
平川幸枝
松葉君江
松本芙美子
松本みき子
水谷その
宮崎弘直
宮崎シマ子
籾山　隆
安永暁子
山下美津留
吉村一風
鷲見　章

暑中お見舞い
申し上げます

春城武庫坊
年代

〒661 尼崎市武庫之荘五丁目二五―一七
電話 〇六―四三一―一一五二

入道雲になって三鈷が見ているぞ

新家完司

八尾市民川柳会

はびきの市民川柳会
川柳はびきの

佐野白水
榎本吐来
塩満敏
田中透太
吉川寿美

他会員一同

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内静水方

暑中御見舞い

申し上げます

会長　山内静水

副会長　小島蘭幸

会計　岩本笑子

時広一路　森井菁居　三宅不朽　古谷節夫　岡本清水　岩本文晴　古田太虚　古田比呂子　藤解静風　田村新造　石原淑子　信本博子　山内房子

ほか一同

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔社常任理事会

理事長
西尾栞里　小路

副理事長
阿萬萬的　塩満敏
橘高薫風　高杉鬼遊
黒川紫香　田中正坊
西田柳宏子　谷垣史好
野村太茂津　玉置重人

常任理事
板尾岳人　辻白渓子
榎本吐来　西出楓楽
神谷凡九郎　春城武庫坊
河井庸佑　吐田公一
河内天笑　藤井一二三
河内月子　宮口笛生
川島諷云児　宮園射月芳
小出智子　吉岡美房

柳界展望

集録―畝・武庫坊

★広瀬反省氏（日川協副理事長）の叙勲祝賀会が**4月21日**、大阪市都島区の太閤園迎賓館で盛大に行われた。

★いずも川柳会は、**4月22日**、銀輪荘で「尼緑之助師三回忌・いずも川柳会物故者追善供養川柳句会」を開いた。

★「川柳藤井寺」は**5月20日**、藤井寺市民総合会館で「句報百号記念大会」を行った。なお、同会は百号を記念して会員の合同句集を発刊した。

★『川柳水郷』**5月号**は米沢暁明氏追悼号として発刊弔辞・弔吟のほか、仲川たけし・東野大八・月原宵明ら28氏が悼文を寄せ、米沢フサノさん（暁明氏夫人）がお礼の言葉を述べている

★川柳ねやがわ15周年記念句会が**5月20日**、寝屋川市立秦公民館で84名が参加して開かれた。各題秀句は次のとおり。

半端者同士が午前二時の酒　住田英比古
捗った仕事のあとのお茶の味　上田　佳風
愚かにも核に応える核を持ち　高杉　鬼遊
ベテランが防風林となってくれ　宮崎　菜月
阿呆になり切れたら徳は積めそうだ　河内　天笑
竹の節にいのちをもらう竹人形　西出　楓楽

なお、15周年にちなんで15番目の句にも授賞した。

★大阪の代表的な人物を撮影した第14回「大阪の人」展が大阪府写真家協会の主催で**6月1日**から**7日**まで大阪富士フォトサロンで開かれた。この中には西尾栞本社主幹も含まれており、ひきつづき大阪の各府民センターで本誌表紙裏のとおり巡回展が開かれる。

★平成2年度大阪文化祭・第42回川柳大会の打合せ会が6月1日、大阪市役所で開かれ、次のとおり要項が決定した。

・日時　**11月17日**（土）午前11時開場
・会場　大阪府中小企業文化会館2階
・宿題と選者
「本」　岩井　三窓
「意外」　久保田半蔵門
「最近のニュースから」　三川　美左
「瞼」　友田茶の子
「幻」　高橋　古啓
「つなぐ」　辻　白渓子
・席題選者　片岡　湖風
安藤寿美子

★本誌の表紙絵でおなじみの日本南画院理事長の直原玉青画伯の「茶掛と茶陶」展（吉向窯による）が**6月8日**から**13日**まで京阪百貨店アートサロンで開かれた。

★礒野いさむ氏（番傘本社主幹）の句碑が大分県湯布院町牧場の家に建立され、**7月29日**、除幕式と記念川柳大会が行われる。

▼訃　報▲

■田中南都氏（番傘本社元幹部・番傘ひまわり会長）は4月23日ご逝去、謹悼。

▽**お便り**△

■小島蘭幸氏（竹原市・本社理事）から山内静水たけはら会長は、国立呉病院を退院され、自宅療養中とのことです。

■遠山可住氏（兵庫県・本社参事）「北海道の春の旅に来ています。雄大な山々の白雪と桜、いい句が出来たらよいのですが…」。

■岩本雀踊子氏（桜井市・本社会計監査）「妻が病気のため、会社も休んで看護しています。もうすぐ点滴がなくなればまた句会にも出席します」。

■米澤フサノ氏（大洲市・故暁明氏未亡人）生前のご厚誼にお礼申上げます。

▼訂　正▲

■6月号・73P上段24行目「迷う日に…」→「迷う**目**に…」、75P中段12行目・「羞なし」→「**恙**なし」、76P上段6行目・「乗せる思」→「乗せる**男**」と訂正します。

▽**ご芳志**△

■三輪通彦氏（岸和田市）から金一封拝受しました。

▼**お願い**▲

各地句会の動き、同人の消息などをご投稿下さい。

新同人紹介

野村静雄

―薫風・松本ただし推薦

柴田英壬子句集発刊記念

本社 六月句会

六月七日(木)午後五時半
メンズファッションセンター

今月は柴田英壬子さんの処女句集『夾竹桃』発刊を記念する句会とあって、まずセレモニー。本社常任理事会と川柳ねやがわから笑顔いっぱいの英壬子さんに花束を贈呈、つづいて竹原川柳会などからの祝電(祝句)が披露された。

そして朱に咲く一冊の本生まる　笑子

夾竹桃の赤いつまでもいつまでも　蘭幸

歯車はマドンナ寄りに回るなり　清水

さらに一通、「夾竹桃のアカはわたしのくにのいろ　ゴルバチョフ」は司会(天笑氏)のジョーク。おはなしは高杉鬼遊氏、句集の鑑賞に始まって、「川柳は芸術と言うよりはどちらかと言うと哲学ではないかと思う」という独自の〝柳論〟を展開した。

出席者八十四名、月間賞は上田柳影氏(大阪市)が獲得した。　(正)

(受付—みつ子・いわゑ)
(司会—天笑)
(記録—射月芳・月子)

出席者—白渓子・紫香・冬葉・千秀・春蘭利武・英壬子・笛生・諷云児・悟郎・シマ子小林英子・凡九郎・柳影・佳秋・武庫坊・年代・一途・かすみ・智子・達子・満津子・典子・鬼遊・柳伸・幸・萬的・柳宏子・喜風・勝晴・章久・薫風・悦郎・頂留子・奏月・史好・八斗酥・文秋・栞・半蔵門・天笑・月子楓楽・形水・一二三・透太・憲太郎・敏・章小路・射月芳・吸江・寿子・次男坊・勝美・三男・杜的・恵空・安藤寿美子・いわゑ・福本英子・二南・しげお・みつ子・眉水・正坊寿美・狸村・白洋・すすむ・太茂津・光代・ただし・ダン吉・重人・トメ子・保州・東雲楠昭子・美代子・満洲・岳人・庸佑・亜成

席題「じわじわ」　**久保田半蔵門選**

じわじわと地球の緑減って来る　次男坊
フロンガス地球じわじわ悲鳴あげ　英壬子
じわじわと地球を侵す酸性雨　楓楽
じわじわと日本沈没するらしい　寿美子
じわじわと無口が伸ばす棒グラフ　正坊
ライバルがじわじわ迫る棒グラフ　諷云児
じわじわと効く漢方に縋りつく　光代
通帳がじわじわ目減り落着かず　トメ子
定年がじわじわと来る寒い夏　典子
年金のくらしへじわじわ物価高　勝美
じわじわと近づいて来た黒めがね　満津子
じわじわと足音迫る夜の道　智子
じわじわとうそ寝の足が来て困り　しげお
じわじわと自白すすめる囲炉裏の火　英壬子
娘が嫁ぐじわじわ淋しくなって来る　次男坊
重箱の隅じわじわとつつく妻　ただし
じわじわと妻の皮肉が効いてくる　章久
ちょっとした嘘がじわじわ責めてくる　楓楽
じわじわと見えない皺が増えてくる　眉水
姑さん座り直してじわじわと　眉水
クレジットカードじわじわ首を締められる　鬼遊
じわじわと去年の分を責める税　小路
じわじわといじめてあげるよと悪女　文秋
じわじわとどこまで太る腰回り　東雲
よろこびがじわじわ湧いてまだ内緒　年代
末席からじわじわ効いて来る皮肉　萬的
核心へじわじわ触れる父の酒　柳伸
じわじわと喜び湧いてくる電話　小林英子
愚痴り出したらじわじわと腰が浮く　冬葉
玄関でじわじわ皮肉聞かされる　白渓子
重い口じわじわ痛いとこを突く　悟郎
じわじわと喜びが湧くハネムーン　柳影
じわじわとしてたら好きに逃げられる　かすみ
言い訳半分汗がじわじわ背なを這う　武庫坊
じわじわと美味い話の罠に堕ち　美代子
じわじわと亡父の言葉が効いてくる　いわゑ
情のある酒はじわじわ効いてくる　狸村
言い勝ってからの後悔じわじわと　みつ子
じわじわと追上げかける一点差　笛生
じわじわと核心笑顔で突いてくる　一二三
軸
鈍な男でじわじわと腹が立ち　半蔵門

兼題「真　珠」　柴田 英壬子 選

真珠湾攻撃なんて知るもんか　螢
真珠ひと粒一つの命光らせる　元江
真珠より妻にはエプロンよく似合う　吸江
温き潮の光をもつ真珠　亜成
黒真珠愛の言葉を聞いている　敏
花真珠きっと人魚の泪だろ　寿美
少女の頃は小に真珠持っていた　楓楽
許しましょ真珠の涙溢れてる　光代
真珠貝夢は追わないことにする　悦郎
夜毎泣く真珠とられたアコヤ貝　シマ子
真贋の真珠が並ぶフォーマル　悟郎
つける人の心を知っている真珠　奏月
ウインドーの真珠へ足を止めただけ　形水

花束を贈られる柴田英壬子さん

小さな恋に揺れる真珠のイヤリング　福本英子
傷に耐えより美しくなる真珠　みつ子
初恋の少女の涙真珠かも　射月芳
真珠黒し海の歎きを語り出す　みつ子
亡母からの真珠小さいが粒揃い　福本英子
手入れが嫌でパールリングはねだらない　次男坊
真珠買う秘訣を海女に聞いてから　岳人
酒癖に思う真珠のループタイ　小路
落ちつけおちつけ胸の真珠がゆらいでる　太茂津
あこや貝必死に夢を抱いている　恵空
自惚れ鏡で偽の真珠がよく喋る　幸
真珠色の涙で濡れた子の寝顔　八斗醒
真珠貝のとても悲しい性をみる　ダン吉
羽振りいい頃を知っている真珠　典子
人恋うて涙　真珠となる人魚　正坊
素晴らしい恋に恋している真珠　柳伸
欠けている丸み真珠でうめあわせ　頂留子
真珠が似合う娘だってきっといい娘だろう　奏月
迷いから醒めて真珠の肌光る　瑞枝

佳

真珠貝新人類を嫌いぬく　しげお
真珠貝玉はとられて捨てられる　柳宏子
磯笛はかなし真珠の海小雨　萬的
模造真珠の紐通しした立志伝　三男
丸くなり過ぎて個性のない真珠　保州

人

貴婦人の胸に模造が生きてます　柳影

地

ほんま物ですと真珠を転ばせる　二南

黒真珠味方に女まだ一人　天
里がえり真珠のぐちは一つのみ　軸

兼題「雫」　吉川 寿美 選

レモン一滴ちょっと素敵な今日にする　月子
愛も祈りも込めた輸血のひと雫　英壬子
傘たたむ小さな雫になる余韻　文子
しずく切る人に訣れがあるように　緑良
嵐去り松籟の雫に海は凪ぐ　重人
うつくしい別れにして来た花雫　光代
裸婦像が月の雫にぬれている　雀踊子
一つぶの雫が話反故にする　螢
身に滲みる人の情けに一雫　新正子
点滴の雫に揺れている命　章久
隠し味しぼった知恵のひと雫　諷云児
大胆な水着で少女雫する　満津子
そして雫に涙は語り終えました　白洋
ひと雫ずつおふくろの味になる　凡九郎
若者の汗の雫はよく光る　重人
反省をしてるらし瞳にひと雫　光代
野仏を花の雫がなぐさめる　一二三
傷心の再起へ愛のひと雫　千秀
一雫流した涙効いてくる　悟郎
百度石汗の雫に濡れている　八斗醒
雨垂れをぼんやり聞いている失意　紫香
先輩の雫にジャンプするわたし　美代子
若者の汗の雫はよく光る　冬葉
逢うて来た傘の雫を切れぬ夜　透太

ひと雫涙も武器にしておんな　美代子
掌の隙間漏れる雫で飢えている　福本英子
梅雨雫枕言葉の美しく　春蘭
傘の雫切って覚悟の扉押す　年代
血の雫流して平和訴える　東雲
ひと雫落ちて限界堰を切り　昭子
紫陽花の雫はざんげかも知れぬ　幸
フラッシュに記録の雫とりまかれ　頂留子
岩を掘る雫に焦り諭される　千秀
恋は魔物でほろり真珠のひと雫　柳伸
一滴の雫が思わぬ波紋立て　吸江
時効でも噂に残っている雫　悦郎
アジサイの花の風情を増す雫　吸江
敗将が雫を切って歩きだす　敏
心変りは花の雫を受けてから　達子
逢えぬ日の傘の雫が重くなる　文子
ひと雫だから光っている涙　保州
父の樹の雫を受けて父になる　楓楽
秀
花火師の汗の雫と火の雫　みつ子
軸
君と育む愛の雫が掌に溢れ　寿美

兼題「ＯＬ」　稲葉冬葉選

ＯＬの齢は聞かない御堂筋　しげお
ＯＬの恋が聞こえる御堂筋　狸村
ＯＬの話題が尽きぬビアホール　二南
ＯＬの男をしのぐ肩パッド　奏月
ＯＬの欲と思案の試着室　章久
制服を脱ぐとＯＬ二児のママ　諷云児
朝シャンが化粧に変わる娘の入社　福本英子
ちゃっかりと社内預金にして嫁ぎ　かすみ
ＯＬが噂通りになって辞め　白渓子
ＯＬの行状がでなテレビルポ　頂留子
月曜の朝ＯＬはよくしゃべる　眉水
とりすますＯＬ男の裏知ってる　悟郎
ＯＬの理想積んでる夢貯金　元江
母となる時間をＯＬおちつかず　どんたく
ＯＬを先ず手なずける新課長　憲太郎
暮れなずむ街をＯＬ足早に　勝晴
ＯＬが鏡に呪文を掛けている　悦郎
均等法職場の花にしてくれず　三男
ラッシュにはほしいＯＬ専用車　かすみ
あこがれたＯＬお茶を入れている　柳影
ＯＬも株の動きを気にしてる　紫香
五時からのＯＬを君知ってるか　正坊
五時からのＯＬはしゃぎすぎないか　千秀
ＯＬはお好み焼で会議する　東雲
ＯＬの二つの道にある迷い　勝美
制服を着てＯＬの顔になる　いわる
旅好きのＯＬ家事に疎く居る　喜風
ＯＬにほしいな日焼けした素肌　白洋
ＯＬが大胆になるビアガーデン　小林英子
佳
ＯＬが涙で踏んだ銀杏の実　英壬子
株抱いてＯＬ縁談には乗らず　小路
ＯＬに値踏みされてる新社員　憲太郎
ＯＬの余白に深い意味がある　智子
ＯＬの目にくたびれた男達　月子
人
存在感があるＯＬのパッド　荒介
地
ＯＬの皿でおとこが値踏みされ　寿美
天
社の顔でないＯＬの大ジョッキ　小路
軸
ＯＬの部屋に錠剤落ちている　冬葉

兼題「虫」　里　小路選

旭屋に今日もワンサと本の虫　敏
あの人が好きやと虫が言うのです　満津子
にが虫をこんなに噛んだ顔のしわ　文子
遊んでる足一本もない百足　福本英子
こめかみで押えきれない癇の虫　寿美
虫のいい話一席飲んで去ぬ　光代
美しい肌には虫が寄りたがり　利武
母さんが蝶だと毛虫まだ知らぬ　瑞枝
虫すかん男の横で酔うてこず　月子
虫の息心残りがたんと有る　悟郎
甲虫デパート売場を知っている　白渓子
虫けらの様に生きて行く権利　雀踊子
山脈を食べるブルドーザーは虫だ　荒介
かごめかごめ甲虫抱く児がひとり　一二三
天王寺村に住む虫陽気だな　岳人
青虫をつまんで妻はすましてる　月子
花がいとしゅうて虫は花を食べる　荒介
うじ虫と言われてもなお従いてゆく　柳影

古日記虫の化石が埋めてある　悦郎
虫籠に遠きよき日の虫が鳴く　武庫坊
虫のよい話の裏が読み切れず　庸佑
女偏の虫は追わない事にする　ただし
クウテチョンと鳴く虫なれば追い出そう　智子
落下点まで来て虫引き返す　亜成
癌告知虫籠の戸を開けてやり　章
妻も子も平気で泣かす芸の虫　楓楽
拗ねて泣く虫を女房が飼うている　諷云児
螢とぶ夜は恋文でも書こう　幸
住み付いた虫が啼いてるゴミ捨場　白渓子
どの虫も明日を信じて生きている　吸江
赤トンボふる里きれいに夕焼ける　萬的
世間にはちょっぴりうとい本の虫　楓楽
虫の良い話を提げて古い友　一途
泣き虫の妻にいつでも寄り切られ　ダン吉

みの虫の命の糸がゆれている　柳影
永田町に巣食う化石のような虫　史好
老眼鏡かけて灯を恋う虫となる　螢
きっぱりと別れて虫の夜を帰る　杜的
一生を短く生きた蟬しぐれ　雀踊子
秀

ゴキブリと出会う超一流のレストラン　柳宏子
軸

お隣もパジャマ電池で庭の虫　小路

兼題「舞台」　西尾栞選

句集発刊やっとわたしの初舞台　一途
舞台いま最高潮の津軽三味　寿美
かげろうがたって卑弥呼の石舞台　美代子
地のままでゆける舞台のよごれ役　千秀
回り舞台回らぬままに古希となり　次男坊
裏方の情けか紙の雪が舞う　鬼遊
大空が舞台花火師老い知らず　みつ子
「人生双六」寛美は既に死を悟り　杜的
回り道舞台の闇が深くなる　寿子
阿呆ばかり通し舞台の鬼が散る　恵空
わたしの舞台母妻女早替り　みつ子
生涯を舞台に寛美炎えつきる　福本英子
有為転変舞台は回る流れ雲　憲太郎
兄嫁の立場でネジを巻く舞台　悦郎
客席を泣かして楽屋で拭う汗　ただし
身に覚えあって舞台につまされる　二南
掛け声にセリフ忘れた村芝居　八斗酔
もう嫁に皆みせました舞台裏　シマ子
舞台からみれば母さん手を上げる　かすみ
憂国の檄なまぐさいバルコニー　鬼遊
大望を舞台の袖で抱いている　満津子
美しく老いたし舞台夕映える　瑞枝
舞台ならここらでグッと抱きしめる　正坊
大根役者舞台を出たり入ったり　しげお
喝采の舞台の袖に泣く人も　光代
太陽の幕で台本ない舞台　昭子
舞台から見ると客席よく食べる　勝晴
清水の舞台作ったやつもやつ　笛生
杉サマの舞台欠かした事が無い　諷云児
裏方の汗でつくった晴れ無台　透太
ちっぽけな私が生きて行く舞台　雀踊子
かがり火に花の舞台は極まれり　年代
佳

暗転の舞台ため息だけ残る　いわる
脇役の子役に食われている舞台　白渓子
清水の舞台で二の矢考える　どんたく
正直な奴だとぼやく舞台裏　悦郎
ひとすじに舞台へ生きた役者馬鹿　寿美
人

回り舞台端役一人乗り遅れ　半蔵門
地

舞台裏わかれば正論ひっこめる　吸江
天

初舞台立派な馬の脚だった　柳影
（清記―楓楽）

川柳塔社常任理事会（6月1日）

▽大阪文化祭第42回川柳大会について打合せ会に出席した萬的氏から報告。
▽「川柳塔」碑への合祀は、毎年7月7日までに連絡があったものとすることを決定。
▽今年度の同人総会は10月7日（日）に開くこととし、前日の6日（土）、高野山大霊園の「川柳塔」碑に参拝する行事を実施することを決定。
▽川柳塔社同人規約改正案について検討。
▽野村静雄氏（川西市）の同人推薦を了承。

▼路郎句碑募金　もちづき遊美・橋本龍典・中原比呂志・小西富士子・柴田英壬子・永田俊子氏を追加、総計一八九名。

川柳後楽　　従野　健一報

がんばれと試験地獄にくもの糸　拓治
温室の苺はみんな自信家で　草風
車座がいつも出来て右派と左派　鮫虎狼
合格の祈りに重く絵馬がゆれ　柳五郎
一善を聞いても胸がつまる性　たけ志
豆を撒き鬼と春とが入れ替る　金吾
優しさと痛さの解る子に育て　浄美
馬面の馬ヒゲでもはやそうか　九坡
冬の夜短い夢を抱いて寝る　みよ子
豊かさは真面目に生きて遠いもの　文平
見栄張って駄馬が駿馬の顔をする　義親
人間が良すぎていつも蟻になる　桃風
膝たたく後の祭りのボケ頭　吟平
薄命の花へ未練の水をやり　紫峰
国民の声どうして聞くつもり　佐加恵
酔い覚めてみるとこの世に戻される　健一
風媒化小さな春をのせてくる　青銅
濡れ落葉拾うてくれる人もなし　哲郎
平凡に生きてそこに妻がいる　玉水
大上段かざす正義が裁くミス　進
自信のないポーズで相手の隙をつく　清三
北風にかたかた絵馬のマンガ文字　美智子
傷いくつ父の背少し曲がっとり　照路
サクラサク絵馬はその日を待っている　秋月

川柳たけはら　　森井　菁居報

お日さまはいつも笑っていてくれる　小五史子
冬はおわったもうすこしだよ僕の春　小六裕次郎
気遣ってくれてた方に先立たれ　清水
有為転変縦貫道を抜けてくる　蘭幸
税金の還付やっぱり妻に言う　菁居
幸福な私と思う筆を持つ　ヤスエ
今日の日課終え手を合わす仕舞い風呂　麻代
福寿草にっこり春の台詞吐く　静佳
同じこと言って笑って老い二人　浪子
うぬぼれる髪一本がままならぬ　喜久恵
古雛を飾ると母の海がある　喜美子
私のコピーのような孫と住む　栄恵
ジョギングで親しくなって葱もらう　愛子
ジョークもう聞けないとこへ友が消え　勲
会長が例会に来て光射す　清水
美しく老いたし春の小径行く　一枝
星占い今年は吉とあるそうな　節夫
焦点の合わぬめがねを捨て惜しむ　博子
思いがけぬ訃報がつづく雨の音　房子
卒業アルバムセピア色なる午後である　笑子
ここからは明日のドラマにとっておこ　一路
抜かりなく家事をこなした日の疲れ　伸子
背負うものそれぞれにあり春がくる　比呂子
三枚に男をおろすティータイム　静風
湾岸を飛ばして夕日追う若さ　新造
百姓の子であり雨の日がすきで　政己
言い切って鬼になれない母である　千代美
ワンマンと言われ孤独の中に生き　笹舟
カスミ草引立て役にあきてくる　蝸牛
よく見たら地球はどこも傷だらけ　幹風

富柳会　　池　森子報

しの笛が僕を誘った秋の夜　昭水
質草の苦労を知っている手さげ　荘次
万引きをしてでも欲しい本がある　(伊)勇
女房には通る気ままと知って言う　花子
腹立てて見たとて先が見えている　トシエ
その似顔胸で画いている女　維久子
広告が歩く手さげの紙袋　(田)勇
矢印の方へ曲らぬ二人連れ　文次
不整脈温いニュースがほしくなる　美房
世を捨ててへんぴな里に住む孤高　智久
少年にかえる口笛すきとおる　花梢
腹立ちまぎれに殴ったのは自分　森子
ネクタイに山の話を聞かせよう　岳人

川柳大阪　　中原比呂志報

脇役に徹してはじぬきざみ葱　希久志
信用を得る指冬をひび割れる　洛酔
うっ憤を投げん波紋の石つぶて　雅巣
いらいらもはらはらもする大時計　重人
その時は投げ出す肚で持った役　本蔭棒
投げ返すボールに親の夢託す　鉄心
信頼を得るにまごころだけでよい　一歩
一石を投じて波紋広げよう　金太

プライドを捨てて会議の席に着き　与呂志
気心を知って言葉に礼を欠き　亮太
青信号お年寄りには短過ぎ　正之
飲むだけの会議と母さん怒ってる　司
会議中壁の向うは別世界　三吉
合格を祈って投げる五円玉　笑風
セールスマン鞄の中味うそまこと　柳弘
妻たちは井戸端会議で憂さ晴し　権八
活溌な発言会議を盛り上げる　天平
そんなこと言いはったんですか会議室　凡九郎
願望は花から花へと移りたい　敏
血と汗で得た年金が安すぎる　美津留
いらっしゃい寿し屋の鉢巻味のうち　喜楽
雑談の多弁が無口となる会議　比呂志

東大阪川柳会　森下　愛論報

押し入れの怖さいたずら知っていた　慶三
いたずらな狐が媚びる春の宵　しんじ
裏は寺表は医者の町に住み　愛論
裏通りだがはやっている味の店　文秋
もくれんの白がお墓の裏にある　作二郎
愛人を養っている裏帳簿　晋吾
胸さわぎ二つ返事がまだ来ない　頂留子
濡れ衣がすぐには晴れぬ春の雨　章久
すぐ来ると子供預けたままドロン　柳宏子
慶弔へ悪友すぐに駆け付ける　孤舟
やり直す決心をした広い空　信治
家よりは広いと妻を湯に誘い　二南
花博へ老いの足には広すぎる　勝美
兎小屋片付け上手広く住み　雅士
悠久の流れが石の角を取る　隆
向き合えば石と心が通いあう　美子
三月の石庭悪女にはなれぬ　比沙湖
企みの石頂上が近くなる　湖風

川柳クラブわたの花　片上　英一報

桜ひらく音聞いたような良い天気　シマ子
春かすみ乗せて花咲く今日の旅　一雄
六十歳　レアのステーキ欲しくなる　隆
見晴らしの風の行方は造成地　幸枝
晴れ着の娘よろこぶ犬を持てあまし　久美子
先達のひらめきパズルまねてみる　暁子
かび臭い質屋の奥の眼鏡ごし　英一
ずりおちる眼鏡の下の涙拭く　その
人を見る別の眼鏡はよう曇り　龍襄
テレビ見る夫がこっそり眼鏡拭く　道子
置き忘れ探す眼鏡に足が生え　千鶴子
よそゆきの眼鏡で夫うたがわれ　トシエ
色メガネはずして一からおつきあい　朝子
遠眼鏡　ピントの合わぬ春の宵　弘直
古ぼけた眼鏡で世間見ています　美津留
絢爛たるぼたんの陰にみどりあり　泰成
紅だすき　みどりあふれて茶摘み唄　春子
みどりの日　昭和の歴史遠くなる　初子
青空へ松の新芽がおどり立つ　君江
花博のみどりは花の脇役に　信江
平成に生まれ変ったみどりの日　みき子
青々とみどり美し米の苗　市子
ねむりさめ休耕田に緑萌え　ますみ
子の心信じて草の芽をなでる　一風
みどりの日　造花でますます共稼ぎ　友甫
新緑の街華やかにミニ乱舞　章
ドッグフードのCMを見るうちの犬　鬼遊

川柳化粧櫓　植村客遊子報

さりげない敬語がぬくい娘の育ち　輝月
手作りの良さを嫁から教えられ　サワ子
だるまの目入れて握手はもうしない　大鷹
本心にさぐりを入れる無駄話　岳詩
進学へ父の無学はうんと言い　礎石
肩書きの数で世間をとび回り　葉香
喧嘩を鎮めて部屋に花飾る　鈴代
小糠雨吉祥にして棟上がる　三青
紅ひいて女一人の戦する　悲子
月並みな弁解させぬ父のひげ　秋信

佳句地十選（前月号から）

林　はつ絵　選

生きるとはラッシュアワーに乗る電車　智子
桜散る燦々と地にわたくしに　螢
すぐ消える砂文字やけど書いとこネ　凡九郎
女結びがいつか仏の形になる　幸
馬鹿だから今まで前を向いている　満洲
無意識の無の字にいくさ待っている　維久子
教えられた通りで笑い湧いて来ぬ　文江
溜飲をさげた言葉に裁かれる　讃云児
森を抜けると風は無色になって吹く　武庫坊
自己採点だんだん甘くなってくる　満津子

言い訳へ傷口深くなるばかり　朱玉
手土産へあたためて飲む美味い酒　美代
亡き夫に今のスランプ聞いてみる　茂章
押し売りのチャイムが欲しい長電話　嘉
新学期若いと役を命ぜられ　姫女
あの社長お手て繋いで遊んだ子　好花
着飾れば皆他所行きの顔になり　はる子
気がつけば祖母と似た事くり返し　遊峰
春彼岸おしどり夫婦寺まいり　永楽
ピカピカの角帽ヒゲを置き始め　客遊子

南大阪川柳会　中川滋雀報

均等法女の歩幅広くなる　寿美
侮れば歩にも歩なりの意地を持つ　柳伸
チャップリンの歩幅で父が消えて行く　作二郎
僕の歩調ついて来るのは妻一人　悟郎
もう総て語り尽したよな歩幅　凡九郎
明日有るを信じ小さく歩を刻む　覚然坊
足下を車流れる歩道橋　しんじ
古くても歩きなれてる靴を履く　久子
物のない頃のなさけは厚かった　楓薬
たての物横にもしない人と添う　庸佑
物わかり大分遊んで来たらしい　頂留子
物差しの違う家風に泣いている　冬葉
嫁姑物のはずみに出た本音　文江
物腰の低い女で丸う生き　シメ子
物事が整い過ぎている不安　清水
生き方を問いつめている夜の底　智子
想い出にペンが進まぬ夜のしじま　憲太郎
言い過ぎた悔い眠れない夜の底　信治
春の夜月に招かれしのび逢い　和子

素顔のない都会に夜の飢えがある　雀踊子
熱い酒あおる別れのつらい夜　新造
思案橋夜泣きうどんの白い湯気　章久
母と同じことばで論すこどもたち　奏月
老母の炊く釜に異論のない旨味　章
論評はおだやかだけど針を持つ　文秋
長寿国寝たきりもいる福祉論　勝美
言論の自由総理をたまげさせ　喜風
音のない世界で聖書のページ操る　萬的
喧しい音だが我家という安堵　柳宏子
春愁や帰したくない雨の音　滋雀

久世川柳クラブ　二宗吟平報

過去はみな笑い話になるゆとり　江山
あたたかい孫のお粥が風邪に効き　秀香
句座楽し極楽浄土諸先輩　保恒
ネオン花極楽の道踏み外す　山人
極楽の浄土夢みて写経する　さわる
極楽へ出す履歴書がまだ出来ぬ　志重
此の世での極楽三食昼寝つき　伊久栄
極楽にみんな行けると言う法話　半仙
極楽にお布施の額が知れており　邦人
手土産の山を手ぶらが見て帰り　吟平
後からの客に手ぶらが居らず　恒心
古傷を一人でなめる昼の酒　賛平
手ぶらでは行けない義理の白い足袋　ふさえ
ほんとうに手ぶらですよとぶらり寄り　甫正

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

残り火を絶やさぬ歌に炎えている　百合子
花博に水の花咲くパビリオン　圭坊

バンドエイドをまた貼っている母の指　萬的
潮時の愛と知ってた社の人事　静江
水子地蔵に親の資格を裁かれる　諷云児
にんにくをたっぷり効かし風予防　恵美子
一本のタクトに酔うてフィナーレ　武庫坊
親になる資格ないのが子を宿す　よ志子
食品の移動へ迷う市場籠　花代子
資格だけとってあっさりやめて行く　スミ子
人事異動美人と席を離される　しげお
風車遠い昔を聞きたがる　美智子
買って出た異動に男の意地がある　京童
愚痴こぼすときから負けを意識する　白渓子
後継ぎを早く決めたい名演技　二南
酔うことで傷の深さが埋まるなら　礫
里の茶摘みにいそそと母の紅だすき　年代
残り福信じて朝の米を研ぐ　杜的
トンネルの向うの虹にあこがれる　(松)芳子
嫁がせて母になれたと後妻は言う　澄子
妻の資格を捨てて転がる坂がある　(河)芳子
靴の踵にくせと個性を秘めて老い　〆女
自己流は変えぬと決めて異動する　迢児
心尽しに酔うて黙って靴を履く　洋子
十七字また性悪い事言わはる　凡九郎
氷片が聞いてしまった小さい噂　美智子
助教授と言われて髭を蓄える　房子
ぎこちない資格を笑う注射針　英子
ひたむきに生き残照が美しい　晴美
犬猫の始末異動で考える　正坊

倉吉川柳会　渡辺菩句報

油断して造花の嘘も見抜かれず　紫香　雄々

この家にやっと揚った鯉のぼり　秋女
交番に留守は危険と書いて置く　独歩
誉めかたがとっても立派だと思う　螢
カイゼルの立派なヒゲにはかなわない　御前
ふところのわりに車が立派すぎ　康志
油断して出世街道から落ちる　公弘
油断せぬ人と酔わない酒を飲む　完司
安売りの老眼鏡が合うもんか　はるお
喜びは神が手加減して配る　次男
変人だが円の力で立派に見える　ひろし
落書きの寸評急所ついて居り　満春
安売りと祭りの好きな嫁姑　ゆり子
悔いの手が油断で焦げた鍋磨く　和枝
喜んでイミテーションを貰います　久子
ふるさとの山は富士山より立派　石花菜
賞められておだてに乗って油断する　千代子
ご立派と言ってあげたいアデランス　柳風
ちゃっかりとバーゲンの品買ってくる　碧水
傷物を安売りしてるお婆さん　寿満湖
挨拶はご立派な鯉のぼりでんなあ　菩句

岸和田川柳会　植山　武助報

波しぶきしっかり繋いだ手をちぎる　みのる
フルムーン波打ちぎわで貝拾う　喜久子
波風が絶えず破局となる夫婦　通彦
波のある世間へ狙い定まらず　武助
インタビュー波に呑まれた子にむせび　白光子
波の花熱い思いでママは盛り　甘平
アマリリス咲き点滴は終らない　文
菜の花の咲くのを待って蝶の恋　冨志子
咲いて散る花の涙は地に埋める　ひで

マンションにまかれた噂すぐに咲く　一弥
ばあちゃんがひと花咲かすのど自慢　狸村
モネの画に睡蓮が咲く水の色　萬的
余韻まだ覚めずドラマの中にいる　すみえ
激動のドラマ平成へと続き　けい子
一度ぐらい咲く日がくると思います　ダン吉
何色に咲かそうこれからの老後　希久志
子育ての母のドラマは逞しい　浪速子
メロドラマすんでお神輿やっと上げ　こう
ドラマからヒント離婚を考える　月子
背番号縁起かついで譲られる　二南
気に食わぬ奴がよく打つ背番号　勝晴
人間に番号つけるコンテスト　恵空
住宅公団一番違いで夢が消え　みよ子
谷底のこんなとこにもある番地　天笑

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

もう少し話合っても遅くない　放任
国訛り話の中で顔を出し　迷貫
話には出るがコースに入れない　吟笑
話合いしても解らぬ時代の差　光
世界の輪身振り手振りで話す顔　マサエ
土壇場で見合いの話あきらめる　いさむ
まだ続く硬い話に肩が凝る　迷香
方言を話す笑顔の暖かさ　よしみ
無口でも愛のきずなでぬくい人　日柳子
ダイヤルへ頭下げてる話下手　かおり
咄家が出るとむっくり起き上がり　スミエ
旅の宿よもやま話に夜が更ける　明人
迷子になって話の種になり　チカエ
よい話聞くだけ聞いて抜けてゆく　迷観子

南海川柳会　飯田　悦郎報

急ぐ時弱味に情けない性質で　喜風
せかすからついつい手抜きしたくなる　重人
早よ早よと急かせた妻は未だ鏡　覚然坊
花冷えに案内の僧の白い足袋　眉水
案内書送る打診をする電話　柳伸
案内が来て喜びの下稽古　しんじ
鉄道案内ふる里少しずつ消える　ダン吉
独走になってテレビ気にかかり　花仔
独走がこわくなかった五十まで　しづ子
独走の父は朝から酒を飲む　東雲
独走のつけが廻って来た余生　真砂
独走をはばむ男へ旗を振る　勝美
独走の日本世界を気にしすぎ　度
最後まで粘り仲居にほっとかれ　甘平
病む友の最後になった年賀状　信博
何度目の最後か母を困らせる　凡子
最後には抜ける自信の距離をとり　庸佑
鶴の一声揉める会議をしめくくる　柳宏子
三十三不動巡って罪洗う　志華子
三割を毎年打って四番打者　美津留
お不動さまのまな裏にみるおだやかさ　文
にらめっこお不動さんが笑い出す　月子

三幸川柳教室　桜井　千秀報

新聞がコトリと朝を告げてゆく　澄子
友からの誘いが来そう今朝の空　(前)美子
張りつめた空気を破る朝稽古　和子
人許す日の朝軽い靴を履く　鉄治
朝の蜘蛛逃げ道そっと開けてやり　重次

朝快晴十パーセントの雨に濡れ　(福)美　子
くやしさの涙出そうで上をむき　(仲)幸　子
塩っぱい涙を拭いている拳　桂　香
宵やみに涙を見せぬ百度石　かなめ
敗者復活君の涙は美しい　高　夫
好きだから涙で歪む顔も見せ　靖　子
リハビリに堪えた涙に春がくる　玉　枝
フラダンス土産がわりに披露する　千　秀
手みやげに毛バリがついていた不覚　保　州
お茶請けに出たのでみやげ買ってくる　嘉寿子
日帰りのみやげに迷う小半日　精　子
気楽さはみやげも持たぬ一人旅　千枝子
買い過ぎたみやげ両手にヤジロベエ　定　子
口紅を少し色濃く春の街　公　子
よもぎ餅母の香りをかみしめる　純　子
春日向羽織をかけて仮寝する　好　笑
パレットに春の絵具があふれだす　朱　夏
ムーンライトソナタに酔うた春の宵　孝　子
花時計日がな一日人を待ち　茜
早春の駅の広場に野菜市　親　踏
春が来て亀裂の時を埋め合う　みね
春はよし見知らぬ人と花筵　(上)幸　子
待ちかねた酒が囲んだ三分咲き　結　実

ささやま川柳社　遠山　可住報

同級会昔の顔で寄る規約　まさの
損得に触れず協力温い友　貞　子
女系家族規約にそった婿が来る　とみ子
協力で咲かせた花にある和み　靖　子
こと金になると協力後ずさり　テル
風薫ることにはふれず山無言　ヒサ子
銀行に縁なく今日も引く屋台　百合子
協力の汗を詰めこむ米袋　千代子
協力を踏絵のように踏まされる　冨　美
銀行のおっちゃん知ってる内緒金　エキオ
協力を惜しまぬ妻が居る安堵　金之助
無言でも父の睨みが身に応え　素　水
助け舟出せば規約が反古になる　和　子
協力が人文字書いていく園児　つや子
お答えをしますと規約の顔になる　文　平
協力は飲ましてもろたからやない　可　住

川柳塔あおもり　波多野五楽庵報

人と樹と自然に媚びて穫るりんご　實
自然食摂っても哀れガンになり　一　花
さあ妻よ天才つくろう支度せよ　風　樹
おもてなし上手で帰りそびれてる　トキ
古里で厚いもてなし孫がうけ　進
黒人も国賓王妃手を握り　凡凡子
通訳も斜め後ろに居る茶室　黙　人
花見酒大トラ小トラで盛り上る　つとむ
目に余る膝を見ている花見酒　一　光
花見酒となりの莫蓙で酔いつぶれ　つ　る
アルバムの中から青春飛んでくる　花　峯
懐しい言葉何度も巻きもどす　和香子
自転車が錆びてトイレの横にあり　叶
懐しい顔が揃った盆の風　甲　吉
雑草と呼ばずに欲しい花をつけ　五楽庵

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

連休を気の散るように人込みに　四　郎
万札を割ればすぐさま羽根が生え　高　明
振り上げた鞭に手を揉む蠅が居る　旭　恒
宴会で飲めもせぬのに隠し芸　剛　司
歩に弱い桂馬個性は知っている　虹　汀
農政の不備で休耕田へ補助　朴　竜
猫の跳ぶ古城の石垣毬となり　ハ　ル
オバタリアン重量感で勝負あり　遊　女
天寿なる人へ経歴ひもとかれ　實
完敗が判ってからの爽かさ　義　美
試飲会生酒の味に一寸酔い　喜久亭
渦潮に入りて出れぬ日の焦り　治　幸
今日だけは酒を道連れ俺お前　紀　一
忙という一字私を離さない　ふさ子
お人好しかけひきするよな場も持たず　ちよ
連休にストレス溜まる籠の鳥　正　敏

岩美川柳会　羽津川公乃報

彼女出来親子の紐も細くなる　さなへ
短い紐引っ張り合って愛結ぶ　美代子
結び目が解けず紐付き苦労する　芳　江
巣の中に金の卵が一つある　公　乃
田舎です空巣も来ないのどかです　きみ子
巣立ちする翼見守る眼が温い　美恵子
押し花にしたい恋です散り際に　幸　代
逢う時刻逢いたい時間念を押す　螢
そのボタン押すと地球がこわれます　單　車
ねこ車押して孤独に耐えている　照　女
横車押して頂上までゆけぬ　忠　良
活造り泳ぐ姿勢を崩さない　由多香
重い荷を背負った道を振り返る　長　治
軽くなる母に心は重くなる　大　漁

八尾市民川柳会　　宮崎シマ子報

飛び込んで川の深さを知る若さ　　度
サアそこが若さだけでは越せんのヨ　　凡九郎
若い気でいても苦手な流行語　　頂留子
化粧しても若さに負ける顔の艶　　覚然坊
上原謙は自分の若い映画見る　　隆
剝りあとが一際あおく逢いにゆく　　シマ子
遠足のみやげどんぐり喋りだす　　重人
陽炎の絵に遠足が溶けてゆく　　章
遠足のつもりで少女海を越え　　美幸
遠足の子らの喚声無人駅　　弘直
鶯をとろりとろりと聞く若葉　　欣之
目に青葉芭蕉が邪魔をして困る　　英一
ケーブルにみどりの壁がせり上る　　春子
目に若葉無沙汰を詫びて飲む集い　　雅士
若葉摘む畑に娘等の紅だすき　　しんじ
汚染した空気に若葉泣かされる　　美津留
条件が揃うと海は時化てくる　　甘平
条件がのしかかってくる盲判　　柳宏子
条件を言うておれない嫁不足　　勝美
条件がみづほの国に米を売る　　しづ子
条件を飲んだくせしてごてている　　和子
木簡の悲しい文字につき当たる　　作二郎
老いて今当たり外れの古女房　　一志
流れ矢に当り運命変えられる　　冬葉
自己過信よもやの壁に突き当たる　　春堂
インプットミスで当たったとも知らず　　律子
当たらぬと思う八卦が気にかかり　　一風
図に当たる打つ手打つ手が恐くなる　　恒明
当たったら砕ける恋よ花冷えよ　　夕花
陽のあたる縁側ネコと夢をみる　　朝子
公団が当たり不便と仲良しに　　柳伸

川柳塔鹿野みか月　　土橋螢報

じぬしの顔に約四じょうの家たてる　　由香
子等母を静かな土地に眠らせる　　きみゑ
ふる里の石に私の名を刻む　　みさ子
土地売って雑兵きのうの顔でなし　　独歩
樹を切って童話の森も地価上がる　　雄々
ご先祖の土地から絆もめている　　忠良
過疎地にも煙出さない生活ぶり　　房子
温い土地の訛りにほだされる　　喜与志
この土地に花を咲かせる夢を追う　　和子
学校を休んで知恵の輪解いている　　大漁
家系図に生きたと描いてから休む　　公弘
喧嘩する元気が溜まるまで休む　　完司
十字路に立って帽子に手を触れる　　三千代
帽子ま深に昔の人をさけている　　くに子
お地蔵さまどんな帽子が好きだろう　　夕峰
天皇が帽子被ると罪が消える　　石花菜
ふり向きざまに風と帽子が戯れた　　幸代
結論を日記の中に書き記す　　正道
正論を吐けば弓矢が背にささる　　静生
結論を出してゆとりの酒をくむ　　ちえ子
母と娘の夜長を語る灯が明るい　　保子
反論を唱えた右手世をすねる　　正恵
平行線論の火花が散る会議　　かつ乃
み仏と静かに法を論じてる　　汲香
理論には弱いが腕のいい大工　　早苗
再就職幸福論を書きかえる　　しげる
いい帽子あるから貴賓席につく　　盛桜
みじかい詩に人間さんを踊らせる　　讌人
あの世へは無論はだかで往くつもり　　隆風
老人が二十一世紀を論ずる　　はるお
好きだから真っ赤なネオン抱いている　　百合子
旅人をほんのりかこむ湯の煙　　八重子
一本の煙絵になる七変化　　きみ子
善人で背の煙に気がつかぬ　　富恵
湯煙は不倫を少しかきたてる　　敦子
花博へ団子つくって食べに行く　　覚
野の花を壺いっぱいにして無口　　美っ千
死ぬことが怖くないから油断する　　蛍

京都塔の会　　松川杜的報

子の成長ふっと亡父をだぶらせる　　栄
幕の内軽い約束してしまう　　正坊
幕切れはとうに承知の二人です　　葉子
幕引くと美女に替って出た手品　　白渓子
手内職手だけ休めてお茶にする　　求芽
人生の峠で欲しいひと休み　　福子
人間に疲れ河原の小半日　　英子
カラオケの順番が来た箸休め　　花代子
休日も同じリズムの老夫婦　　芳子
名鐘の余韻静かに古都暮れる　　〆女
散る桜残るさくらにある余韻　　麗水
求愛の余韻に鼓動鳴り止まず　　紫香
花束の余韻未来を覗かせる　　はつ絵
再会の余韻に溶ける角砂糖　　讌云児
愛の余韻を引きずっている夫婦箸　　年代
バイオリンの余韻わたしを離さない　　百合子
卻して余韻嫋々寺の鐘　　圭坊
人生の余韻へ道草したくなる　　杜的

未来図に少し色足す健康法　達子
くるしま海峡見下ろすさくら極まれり　水客
オーケストラの余韻に愛がはぐくまれ　武庫坊
いい休みだった湯疲れして帰り　飛鳥
休むのが美徳となった労基法　ただし
たかぶりは愛たしかめた夜の余韻　倫子
出る幕でなかったさみしく口つぐむ　美穂

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

一線を退いて気楽な二度の職　温子
電線でつばめの恋の物語　幸子
砂浜で泳がぬギャルの脚線美　玲子
橋かける大事な線を太く引く　小鹿
白線の内に飛び込む魔の車　明治
生命線の長さを余生信じてる　典子
すれすれの線で善悪生かされる　寿美子
矢印のとおりに死線越えてきた　螢
一直線の若さ阿呆になりきれぬ　早苗
五線符を越えて嘶く馬もいる　妻子
境界線踏まれてからの微熱にて　たつみ
途中切れの生命線にある不安　佳女
白線帽打ち振り老いの賛歌　紫映
魚臭漂うローカル線の旅もよし　杜的
電線に内緒話が乗ってきた　ひさ子
電話線切ってやりたい長話　喬水
線上に乗らぬ大魚がはねている　節子
電線の雀が見てたハプニング　雄々
いい線にいると気休め言ってやり　弘朗

川柳岩出　小倉　アサ報

水晶の瞳の奥にある野心　精子
婿選びよいとこづくしでいったのに　忠雄
型古く名残りが針を休めない　綾子
この人と選んだ道を意志通し　昌子
花選び野生の種に事尽きる　義美
近頃は物ありすぎて選ばれぬ　千代子
神代より流れて清し五十鈴川　喜市
選ばれた情けも透けてくる器　アサ
紀の川の水の力は山を越え　英子
選抜に陽が舞いおどる甲子園　正直
あびるほど呑んでも狂えない時計　永年
ジャジャ馬も相手を選ぶ権利あり　愛子
不機嫌をとばす言葉を選る女　春子
水割りに心の動き覗かれる　和子
銀時計生涯ついて廻る晴れ　瑞穂
春に撒く水は心をなごませる　与呂志

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

倒れ伏す木々の歎きが森に充つ　ゆき
砂山がくずれて少女目を伏せる　千春
目を伏せる方が此の頃男の子　富美子
北風が吹く日は草も伏せている　田鶴
大きな家隣でいわし焼く暮し　登栄
四十でやっと恋人できました　保子
孫の声きいて静かな祈りする　やえ
メロディで若やぐ恋をつれてくる　朗子
失恋は川面に石を投げて消す　八重子
初恋の香を移してる黄八丈　より子
鏡の中にキラッと真夏の恋が降る　瑞枝
人恋しゅうてとうとう声を張りあげる　亜弥
噂では心変わりの梅雨の花　寿々子
恋心うかつに握手いたしません　日枝子
みの虫よそろそろ恋を見つけなさい　てい子
ふつふつと心がたぎる恋かも知れぬ　荒介
恋二つ冷凍させて嫁ぎます　玲子
花の下毛虫も恋の綱渡り　恵子
昔の恋よ君の出番はすでにない　千代

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

言葉尻透けているとも思てない　凡九郎
職退いてから人生が透けて見え　柳影
透けた髪見せ合っているクラス会　みち子
丁寧な言葉の裏が透けてくる　園歩
露天風呂自分の足も白く透く　紫香
円空微笑ざんげいくたび透けている　作二郎
学校も塾も休めぬ闇地獄　文夫
闇討ちにあうことも無い職を退く　敬
回廊の闇で仏と出逢う鍵　芳子
廃坑の闇のむこうにいる仏　静夢
闇討ちに会ったようです訃の電話　年代
くらやみに住み馴れている深海魚　白渓子
軽い波紋娘恋人連れてくる　英子
母の日の母は波紋の外に居る　杜的
子の逝った池の波紋は還らない　正一
モリアオガエルが落ちた波紋に音がない　萬的
勝ち目ない波紋静かに受けとめる　歌子
お隣へ聞こえるような声を出し　しげお
小宇宙宿して十月十日満つ　伊三郎
梵鐘の余韻　聖のつぶやきか　武庫坊
願掛けをするのに女菩薩選っている　求芽
マイカーの駐車場までバス通い　〃栄
真心の伝わる温い手を握る　〃女
マンションがいやだと猫が家出する　保蔵

久々の友の便りに写真あり　正子
思い出し笑いを時にして夫婦　定人

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

女一人見栄も張ります生きるには　澄子
遍路衣にネクタイ締める見栄っぱり　弘治
花嫁にハデな荷物も親の見栄　保蔵
よく似てるブランド品に騙される　敏之
似ていても足は知ってる我が靴を　いわお
似顔絵の鼻がすこうし気にいらぬ　美智子
連れ添ってこうも似てくる夫婦箸　すみ
母に似た人が気になる歩道橋　昌子
地下街を歩く私に似た他人　佳秋
そっくりさん同じ衣装で現れる　紫香
似ていても気立てがちがう姉妹　定人
鯉幟隣と仲良く泳ぐ風　義嗣
低気圧生簀の鯉が又跳ねる　向西
麩を撒けば阿修羅の如し鯉の口　六浦
滝のぼり忘れてしまった錦鯉　十四郎
投書欄すみからすみへ読む無趣味　寅之助
藤棚のバス停がある尼の町　歌子
前にいて手品師に手を借りられる　石舟
先ず亡父に報告をする初月給　夢之助
大正の話途切れぬ花見酒　武庫坊

城北川柳会　神夏磯典子報

何のその負けてなるかよふきのとう　輝子
ゴミ捨て場鳥が空から狙ってる　午郎
嘘ついて丸く納める長老者　敏子
押し花を手紙に添えて娘より　寿美礼
人形にも人生がありゴミ捨て場　春雄
病む人に悲しい嘘をついたはる　昭子
大風呂敷嘘を包んで持ち帰る　文子
ゴミ溜めの隅に一輪すみれ草　久留美
粗大ゴミ　バリバリと食う回収車　秀夫
マンションに家相のことなどいうとれず　眉水
帰ろうか田舎の家の雪月花　史風
回顧録よくも歩いた幾山河　登美子
うれしさは花の名所に近う住み　テルミ
子を育て人生何んぞ一人住む　きくゑ
歩いて行こういろんな人に逢えるから　満津子
少しずつ譲って丸い家の中　典子
ゴミの街心斎橋の午前九時　新一郎
耳遠い夫婦で内緒が話せない　ふみ
定年の城にひっそり牡丹咲く　静歩
春ですね噂も一人歩きする　達子
買物にちょっと出かけるパスポート　白峰
毒にもなる薬を貰う医者通い　温子
やかましい上司の湯呑みよく割れる　ふさ子
急がないくらしにも春走り抜け　倫子
窓ぎわでゴミになる日の爪みがく　ただし
老いてなお闘う朝の定期券　静子
夫の背見つめ歩いた五十年　右近
一歩ずつ仏に近くなる歩み　公一

翠洋会　中西兼治郎報

信じてる空から怖い酸性雨　兼治郎
明日こそは今日のしくじり糧として　みよ子
背をしゃんと伸ばすと明日が見えてくる　石舟
言いきったあとであさはか気の重さ　絹子
酸性雨青い地球を枯野にし　真
明日に夢託してばかり無為無策　恭昌
紫陽花の雨に明日はどんな色　すすむ
浅はかなことばかりする地球人　英一
散髪は明日の気構え知っている　正雄
あさはかで殺し文句にすぐに乗る　佳秋
あさはかにピエロ演じて人嫌い　千歩
人類の浅はか地球食いつぶし　さと美
空におる雷さんを山が分け　東雲
今降ってくれれば明日は大丈夫　春子
代理には長し短かし帯襷　為子
母と子と鳩をあしたの絵の中に　楓楽
この空を子らに残せるかと思う　良江
行く水は明日を願い今日に生く　照子
明日会うと言うて別れて早や三月　仙吉郎
母と子で明日を待った入社式　綾子
もう少し待てば良縁あったのに　登志実
貯めることばかり余命を考えず　光子
浅はかにも言葉の裏に気がつかず　みつ子
あすもまた大入り拝む法善寺　いつを
汚職劇幕引く課長代理の死　正坊
あなたでも社長になれる本を買い　鬼遊

川柳塔わかやま　牛尾緑良報

海苔巻が上手になって娘は嫁ぎ　紀美女
登り坂得意の鼻に雨が降る　忠
家中が安堵野太い父の声　柳宏子
野太さに惚れて貧乏な夫といる　柳太
野太くて優しいとこも父譲り　英子
野太さを分け合うてきた夫婦坂　輝子
妻子には野太い男演じきる　保州
野太さと妥協している妻の位置　和子
野太いが痒いところへ手が届き　正博

野太さに少しこだわる葱坊主　栄美子
真面目だが少し野太い彼を買う　光代
こんな時野太い方が押しが効く　克子
泣きたいが野太い面を外されず　呑天
もう少し野太く生きよパンの耳　稚代
海苔巻の芯に我が家の彩がある　登志代
寒風の海苔舟妻子目にうかべ　好笑
海苔舟のまこと小さな一丁櫓　結実
海の子は見よう見まねで海苔を干す　萬的
いい機嫌女将のおごりの海苔茶漬　千寿子
海苔巻きに寄添う妻の茶がうまい　綾子
油漏れ海苔が病んでる日本海　忠雄
子の登る梯子の刺は抜いておく　鉄治
修羅くぐりひたすら登るけものみち　寿子
子が登るはしご長持ちするように　豊太
あすなろへ登る一歩に今日の鞭　アサ
それぞれの答えを試す登り口　桂香
まっすぐに生きて舞台に登れない　武雄
人生の坂を女房連れ登る　守
一歩ずつ登るたしかな土踏まず　信
明日登る山の夕陽に手を合わす　三男

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

水仙に見惚れる位置で風邪をひき　民子
水仙が妊ったのは二月　鈴江
網棚に忘れ去られた傘の私語　かつ子
網棚の他人の荷物が気にかかり　ヒデ子
水仙が小首かしげても思い　好栄
網棚で迷い子になった土産物　聖子
ぶらんこが人生いろいろ知っている　智重子
黄水仙吾に乙女の日のありき　はるみ
もの思いぶらんこゆらりゆらり揺れ　歳栄
ブランコでふわりスカート風誘う　北斗
廻転ぶらんこ春だみんなで廻そうよ　博利
出来たての名刺まきたくて撒きたくて　悦良
水仙が咲けば黄砂がやってくる　世似
地球にも飽きてぶらんこに乗ってみる　清泉
ぶらんこで地軸のありか見とどける　白汀

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

幻の名物探す金余り　清志
名物を旅のしるしに買ってくる　雪子
ラベルだけ違えて名物同じ貌　多賀子
真直ぐに生きて名物男です　与根一
別荘は一人では来ぬ高級車　一進
別荘の孤独に慣れた人嫌い　たつみ
別荘へみそぎの済んだ顔で住む　雄々
別荘を横目でにらむ飢えた犬　昭二
別荘が欲しいね森を歩きつつ　きみ子
稟議書が矢印ついて舞い戻り　代仕男
出来がよく矢印がつく初西瓜　幸枝
矢印をたどると元に出てしまう　小鹿
矢印の道を歩いて平社員　操子
子には子の矢印があり出て行った　文子
矢印に逆らう風になってみる　寿美子
川柳の矢印ばかり追っている　妻子
いつか子の為に矢印付けておく　ちかし
中年の矢印すこしずつ痩せる　博子
矢印のときれたとこで終る旅　久枝
歯にしみる美味さなくした総入れ歯　長三
ご馳走が入れ歯の中で狂い出し　静江
親にお礼言いたい入れ歯縁がなく　みえ
箸運ぶことがすすまぬ休肝日　きみえ
なんとなく膳を見ていた休肝日　章峰
休肝日妻のおしゃべり聞いてやる　房子
休肝日一升びんは落ち着かぬ　満江
休肝日夫はため息ばかりする　清子
休肝日もう逃げ口上にはならぬ　鶴丸
ことの外休肝日には飲む誘い　日出子
酒屋から粗酒が届いた休肝日　叮紅

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

末席の椅子から軋む音がする　佳秋
上りつめたトップの椅子が軋みだす　正坊
荷物だけ置いてる椅子が残ってる　凡九郎
駅のベンチに座布団並ぶ風の町　みつ子
耐えぬいた椅子のへこみをなつかしむ　柳影
子供会じゃがいも掘りも企画する　きよ子
生野菜ぐらいでしわは伸びまへん　勝紀
野菜やさい一つおぼえの栄養論　てる
母のサラダがいつもの皿に盛ってある　(河)芳子
仏壇体彫って許しを乞う男　光代
ひたむきに彫り進めると亡母の顔　富喜子
雨の夜に彫刻刀は喋り出す　柳右子
遊覧船池の広さに四季が有る　白渓子
猿まわし池の堤防でヒルにする　保蔵
地下街の池はお化粧して眠る　武庫坊
殿様蛙が池に飛び込み夏開ける　しげお
好物を皆取り上げて診断書　園歩
母の日は可愛い母でいたいもの　江美
共犯にされて合鍵渡される　静子
逢えた日の五月の風がここちよい　美智子
曲り角ごとにコーヒー販売機　萬的

思い出を辿る故郷のダムに佇つ　〆女
預った隣の犬がよくなつき　英子
緑蔭に吸い込まれゆく老夫婦　春蘭
企みへぼたんの白がまぶしすぎ　いわる
限りない欲で地球が傷み出し　宣子
溜息を大きくついて諦める　よし津
怒らない妻がいちばん恐ろしい　柳伸
花びらが戦士の墓に舞う霊地 -　圭坊
ポスターの海の蒼さにだまされる　杜的
干上がった池に伝説だけ生きる　年代
菱の実を摘みとる池のタライ舟　石舟
祖父に似た彫刻像に髭がある　紫香

川柳泉尾　吉川　寿美報

太陽の塔は千里の道しるべ　悦子
太陽が昨日の涙消してくれ　敏
太陽だ花だと言われ嫁になる　マリ子
太陽と水と空気のある安堵　(寺)文子
太陽を信じて生きる夫婦舟　美南子
前向きに生きようきっと花は咲く　はつ子
子離れをしてから花を咲かせる気　可愛
命みな打ちこんでいる花の彩　洋子
花博の犠牲たんぽぽ野のすみれ　伴子
眼鏡越しジロリとにらむ申告書　文子
白内障洒落でかけようサングラス　きよ子
見たくもないものまで見えた遠眼鏡　美代子
老眼鏡見えすぎて抱く春の鬱　トミ子
老眼鏡さびしい景色見えて来る　美津子
眼鏡はずすと真実がよく見える　タカ子
水面でよろよろ浮かぶ根無し草　あさこ
よろよろと大地へ一歩あるき初め　淑子

春の月よろめくように花かげに　義一
よろよろになっても財布握りしめ　昭子
川風によろよろよろと流しびな　シマ子
よろよろとあなたまかせの雪柳　一枝
お水取り火の粉火の輪で春の音　恵美
一矢また一矢ハートに的しぼり　靖子
春眠でよろよろしてる電話ベル　敦子
しゃぼん玉たった三日の夢でした　途子
消費税アッと言う間の一周忌　満洲
難題を明日に持ち込む時間切れ　シマ子
すぐ剝げる嘘へ懲りずに化粧する　シメ子
花嫁の父の祈りか雨上がる　加奈子
銃口の向こう満々と水がある　美子
眼鏡からコンタクトにかえ恋摑む　みつこ
饒舌な手帳と旅の三日ほど　寿美

いさり火川柳会　尾崎三代治報

連休の暇へお金がついて来ず　豊子
連休は民族移動のうずが巻く　三代治
連休に子もりたのめる老母が居る　孝人
連休はお墓まいりが齢に合い　武士
連休の無事故をいのり部署につく　由多香
粗大ゴミ長い連休持て余す　伊都子
連休へ心を洗う旅に出る　八重子
連休の渋滞覚悟はしたものの　智恵子

川柳塔とっとり　岩原　斎水報

目ざわりな男がいつも側に居る　侑里
連れ合いが世辞を言う日は何かある　艶子
立て板に水のお世辞で砂を噛む　林太郎
嫁姑うまいお世辞で仲が良い　友夫

世辞を言う魂胆すでに見抜かれる　粗粒
ほどほどの世辞世渡りに使い分け　由多香
孫達が世辞を覚えて買わされる　秀和
金持ちか男前かに娘は迷い　呼風
甘言に迷い男をさらけ出す　一歩
鮮やかなせりふで人を迷わせる　一枝
花冷えに愛の迷路をぬけ出せず　圭一郎
迷いつつ自問自答の木を揺する　山人
大志揺れ迷う故郷の子守唄　帆雀
新人が店のイメージチェンジする　多可志
わが社にも新人が来て活気づき　新風
新人よ世間の鬼が待っている　砂山花
新人に悪い酒癖教えとく　喬水
新人の一日おじぎだけで暮れ　旋風
新人が来て末席を明け渡す　俊路

川柳藤井寺　高田美代子報

招かれてふと出合ったのが良縁で　須美
お祝を持って来てねと招かれる　たかし
還暦で若い嫁さん募集中　敦子
自画像はどれも若くて美しい　志洋子
コツコツと若さを鳴らすハイヒール　治子
恋心私の心も若やいだ　三郎
花の色茶飲み友達若くする　与呂志
若いから出来る苦労に背を向ける　信子
初夏の音若い季節の鼓動かも　彩
くちばしの黄色いままで成人し　紀子
このままの若さを保つ莫迦でよし　一屯
若い日の苦い薬が効いてくる　美房
家計簿の裏に賭けてる小さい夢　寿美子
生涯の賭けとも知らず嫁に行き　てつお

マイホームくじ一枚に賭ける夢　悦子
開業医子供に賭ける夢を持つ　キミ子
追分で身の振り方を賭けてみる　ときお
どの子にも何かを賭ける夢を持ち　吸江
生涯を賭けると言うてもう別れ　つや子
この列車切符二枚に賭けている　昭子
ぎりぎりの賭け泥舟に乗る覚悟　美代子
橋渡る結果がどうであろうとも　和子
かもしれぬ明日へ勝負賭けてみる　修六
泣き癖の花を濡らした通り雨　きよし
童心に立ち返らせた父の凧　繁男
合格を見た若者の光る顔　宗一
昂ぶりを真紅のバラに覗かれる　淑子
定年の夫と居ります日の長さ　婦美枝
花柄を選んで女蝶になる　政代
春の海美しすぎる小さな過去　正枝

川柳ねやがわ　高田博泉報

列離れ孤独の影を温める　てまり
妻の座を離れてからの無重力　時弘
休日が済んで会社でほっとする　庸佑
休日はお肌いたわりノーメイク　かすみ
世界中の珍花楽しむ花の博　亜也子
外孫が来て夕食を二度も食い　覚然坊
寝てる子が楽しい笑顔見せてくれ　三郎
切り札は胸に持ってるだけのこと　シマ子
切り札を抱いた男の謀反劇　章
切り札が無くて流れに任す運　権太
六月で今年も阪神終るのか　博泉
葉桜になって安らぐ六地蔵　静江
模様ながめという年齢を思いおり　礫

短冊にあえてうれしい通り抜け　頂留子
老衰の母へ花博語らない　英千子
休日の雨ゆっくりとあきらめる　三峰
すれ違うセーラー服が楽しそう　藍子
休日の別な素顔を見て帰り　菜月
残り火を育まれつつ日々楽し　一笑
切り札の一票を抱く庶民の目　光子
耕耘機牧歌の春を混ぜ返し　一鬼
すきだらけなのに踏み込めない女　一芳
言われても改めようのない素顔　一途
ゆずられた席で自分を意識する　小路
週休二日鬼が淋しい顔になる　良三
連休へ夫婦の歩幅整える　おさむ
光が遊ぶ水が遊ぶ子が遊ぶ　亜成
切り札はコピーしてある貸金庫　冬葉
切り札を生かす度胸のない恨み　あやめ
馬鹿呼ばわりに耐えて勤める定年後　度

川柳高知　川竹松風報

ネクタイを後悔している参観日　和広
母さんの愛が詰った新学期　春童
定年と共に歩んだ靴磨く　恒子
傍目には気楽に見える物貰い　一求
過半数割れて気楽な野党席　功
借金がないだけましと言う気楽　佳風
損得を捨てて気楽な浪花節　千恵子
気楽さはお国任せの医者通い　朱坊
孫を抱く姑が仏の顔に似る　菊野
成人の記念のポーズ妻に似る　竹萌
花吹雪くぐり若者門出する　妙子
父に似たところを母に叱られる　松風

川柳はびきの　塩満敏報

大物でないが優しい人と添う　泰子
齢よりも若く撮りたいカメラ買う　敦子
大物へ野心をいだく蟻のむれ　悦子
脱いだ靴片方飛んで強談判　繁男
願わくば美女掛け給え二人掛け　かつみ
もう八十まだ八十よ習いごと　志津江
大物は貧乏神にも鍛えられ　みつこ
人生のとんぼ返りがしたい春　利武
花手桶喧嘩相手に逢いに行く　絢子
花を眺めて花のこころになっている　美代子
ルール通り走って運転バカにされ　伴子
良い便り春のポストへ出しに行く　トミ子
不動だと思った地球老けはじめ　美津留
喧嘩しているお隣で猫の恋　白水
太る筈三食ひる寝おやつ付き　志洋
大物になれば大きな嘘も言え　たけし
鉛筆の未練は消しゴム知っている　重人
人間の心がカードに狂わされ　与呂志
八連休の話聞いてる終電車　ダン吉
湖の大物ロマンにしておこう　一枝
一杯の酒で喧嘩になるのみ屋　キミ子
桜散る少年兵の墓思う　比沙胡
大阪弁喧嘩を丸く治めてる　隆
納骨へ手のぬくもりもついてゆく　ケイ子
鉛筆のひらがなばかり母の文　蛙声
思い出のチビた鉛筆捨てかねて　ぎいち
四桁の呪文でカネの出るカード　一屯
花散って今年の色が見えてくる　吐来
テレホンカード愛の言葉が詰めてある　敏

サークル樺様　大澤三四子報

出し抜けの旅立ち別れ告げられず　今日子
旅好きも年には勝てぬ老いを知る　登美子
旅先で集めたこけし捨てきれず　千代女
素人の投げた釣餌を嗤う鯉　三四子
ひとり旅隣の席が気にかかり　美子
足二本あれば案山子も旅に出る　智恵子
旅半ば去ってゆく人出会う人　泰子
北をゆく旅人いつか風になる　剛也
旅先の朝市主婦の目にさせる　澄子
旅先の夕日に我が家思い出す　美緒
間違って投げたコインをのぞき込む　雅子
心なき風にさくらの散り急ぐ　光梅
髪飾るように私に花吹雪　恵峰
さくら散り花びら舞いし妻の位置　英楽
さくら散る道を主人と久しぶり　千松
今に投げ出す奴は甘ちゃんだ　薫風

川柳後楽　従野　健一報

派手過ぎた分だけ人生もぎ取られ　たけ志
いつからか妻にあわせて老いている　美智子
紙一重の差から敗者の列へ入り　柳五郎
嘘も方便母の芝居のはじまりぬ　義親
あご紐を締めて無事故の顔が生き　青銅
難聴の耳は噂が通り抜け　金吾
無器用な握手で君を信じよう　拓治
古い唄ですがとマイク握りしめ　哲郎
三面鏡好い年寄りになれと言う　みよ子
今だから大事にしたい雪月花　草風
子育ては親と子供の耐えくらべ　健一
名案を聞きたい神の声探す　博友
欲望の構図未完のまま終り　桃風
リズミカル嬉しい人と万歩計　佐加恵
ここだけの話が嫌いな糸切り歯　正秀
ユーモア度朴念仁の札がつき　吟平
真直ぐに生きた親父の小さい墓　秋月
見送りが済めば無言となり夫婦　鮫虎狼
六十路まで生きて社会の踏石に　玉水
凡夫婦喧嘩しながら助け合い　照路

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

職人として早飯も業のうち　石舟
朝シャンの娘の早起きに負けられぬ　富子
人間のエゴで釣針呑む野鳥　明光
平行線　姑の針　嫁の針　きく子
千人針抱いて生涯終えた母　〆女
善人の帽子に止まる赤トンボ　正坊
猫がふと止まって私見つめてる　露児
息止めてレントゲン技師さりげなく　(小)英子
酒止めたとたんに洒落が出なくなる　武庫坊
肩書が多く出勤して困る　白渓子
これ以上言うと互いに傷がつく　諷云児
友は去り樹海の中の車椅子　つえ子
献立はコンピューターに任せます　福一
心にもないお上手と知りながら　(玉)英一
ファミコンに夢中で豆がこげている　寿美子
よく降った挨拶よそに蝸牛　圭坊
友引で葬儀屋さんも千鳥足　とく子
あの世でも一緒ですよと墓立てる　登志実
ポケットの櫛老いらくの恋をする　しげお
親友の顔思い出す豆ご飯　博史

第21回 奈良新聞川柳大会

とき　8月5日(日)　午前10時開場
ところ　薬師寺東僧坊
（近鉄橿原線西の京下車東へすぐ）
お話　薬師寺執事長（交渉中）
席題　歌藤　一麦選
宿題　「野　菜」　古川　佳子選
「手」　杉森　節子選
「電　気」　宮口　笛生選
「花　火」　伊藤　定子選
「自由吟」　河合　渡口選
「西の京雑感」　片岡つとむ選
各題2句・出句締切11時半
会　費　二五〇〇円
（昼食・拝観料・発表誌を含む）
◎出席申込みは7月30日までに左記へ
〒630　奈良市三条町六〇六
奈良新聞社文化事業部川柳係
電話〇七四二―二六―一三三一（代表）
◎欠席投句は7月30日までに左記へ
〒630　奈良市北市中町七一　杉野睦朗
電話〇七四二―二三―三一二八
主催　奈良新聞社
後援　奈良県川柳連盟
奈良県教育委員会

■各地句会だより

川柳あしなみ会

保西岳詩

私たちの川柳あしなみ会は、昭和三十一年十一月二十五日に創立句会を開催して誕生したのがはじまりです。

当時、姫路地方では、時実新子さんらが、「ふあうすと姫路の会」を作られ、句会を開催されていましたが、それ以外には川柳の会はなかったのです。

植村客遊子さんが大阪鉄道病院で「川路」という川柳の会に入っておられ、退院後、姫路にも国鉄職員で川柳の会を作ろうではないかと、中田白李さんや「大鉄川柳」に入っている面々と話し合い、「ふあうすと姫路の会」の応援を得て、大阪から正本水客さんを指導者に迎え、姫路鉄道病院事務長だった大西雨雀さんを会長として、国鉄のサークル活動の一環として「国鉄姫路地区川柳あしなみ会」として発足したのです。

今の名称の「あしなみ会」は、創立句会で名称を募集し、時実新子さんが「国鉄職員が足並みを揃えて川柳の会が発足した」ということで「あしなみ会」と提案され、これが採用されたのです。

しかし、〝転勤〟という弱点を持つ職場のサークル活動の宿命は、私たちの「川柳あしなみ会」も例外ではなく、主だった人々の転勤や退職によって、発足当初、百名を越す会員も四、五年で二十名にまで減少しました。そこで、職場川柳から脱皮して一般の方々も迎えて、名称も「川柳あしなみ会」として再出発しました。現在、川柳会としての運営は、会費と寄付金で賄い、句会は参加者の参加料で賄っております。会員は流派に関係なく、川柳を愛好する方ならどなたでも入会して頂いています。句会は毎月一回、第二土曜日の午後一時からNTT姫路しらさぎ会館で行い、毎月三十名前後の出席とほぼ同数の投句者があり、まずまず盛会に推移しております。

また、年に一回、五月には吟行句会も行って会員の親睦を深めております。吟行句会の場所も播州地方一円で、これまでに行った主な吟行先は、有年の験行寺、播州赤穂、相生の瓜生羅漢、龍野聚遠亭、姫路城、書写山円教寺、手柄青年の家、広畑夢前会館、英賀神社、廣峰神社、北条五百羅漢、大河内町の峰山高原、志方町円空廟、高砂鹿島神社、鶴林寺、日岡山、滝野鬮龍灘、西脇長明寺、明石大山寺、神戸異人館街のほか、但馬柴山一泊吟行などです。

何はともあれ、「川柳あしなみ会」が、三十有余年の永きにわたり、台風とストにより過去二回休会した以外、毎月欠かさず例句会を、そして三十周年大会まで年一回の大会を行ってこれたのも、発足当初の正本水客さん、時実新子さん、そして植村客遊子さん、阿萬萬的さん、辻白渓子さんといったよき指導者にめぐまれ、また、川柳に情熱をつぎこんだ各先輩方のご指導・ご支援があったればこそと、ここにあらためて厚く御礼申しあげます。

7月各地句会案内

	日/時および題	会場と投句先
堺川柳会	1日(日)午後1時から 気分・聞く・消える・嫌い	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2−9−2　河内天笑
尼崎いくしま	6日(金)午後1時から 往復・お世辞・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔まつえ	7日(土)午後1時半から 先生・出番・風鈴	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔わかやま	8日(日)午後1時から 火種・引く・ヒント・ひらめく	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市鷲町14　野村太茂津
西宮北口川柳会	9日(月)午後1時から 雷・雄々しい・困る	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわを 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
八尾市民川柳会	10日(火)午後6時から 日盛り・浴びる・接待・福祉	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2−141　飯田悦郎
川柳ねやがわ	15日(日)　正午から 選択・ネジ・写真・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6−9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
もくせい川柳会	16日(月)午後1時から 園・迎える・サラダ・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
富柳会	19日(木)午後1時から 八百長・約束・八つ当り	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353　池森子
高槻川柳サークル卯の花	19日(木)　正午から 常連・癖・一坪・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1−7−7−905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
南大阪川柳会	19日(木)午後6時から 威力・消える・資格・着眼	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
南海川柳会	20日(月)午後6時から 武器・困難・一般・弁解	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18　寺井東雲
岸和田川柳会	26日(木)午後6時半から 階段・冗談・機嫌	岸和田市上町町会館　南海線岸和田駅東南徒歩10分 〒596 岸和田市上町7−36　植山武助
川柳東大阪	28日(土)午後6時から 脱ぐ・買う・ベル・砂	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5−6−23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

編集後記

☆七月となれば路郎先生のことが思い出される。昭和四十年七月七日に逝去されているから今年は満二十五周年になる。その後一年の間に、番傘の岸本水府氏、ふあうすと社の椙元紋太はんが他界されている。水府氏、紋太はんと呼ぶのは、それぞれの先生方の句風が私にはそんなように思えるからである。

☆私は常々、川柳作家には先生はないと言っている。川柳は自分の句でなくてはならない。だから先生は自分の中にあるので、自分を掘り下げて行くことこそ、本当の作句だと思っているからだ。

☆さて路郎先生が日頃から言っておられた「いのちある句を作れ」が思い出されてならない。いのちある句とは、近年、一部の作家の間で作られている抽象的で無理な比喩の言葉の遊びに近い句には本当の意味での「いのち」は見出せないのではなかろうか。

☆ある一流画家の展覧会で多くの大作を見た後、その一隅にスケッチの数々が並べられていた。そのスケッチの中に私は本当の意味の鋭さを感じた。川柳もそうだと思う。色々と道具立てをして無理にまとめた句はじっくりと読み返してみると、物足りなく感じてしまうことがある。川柳全集(2)麻生路郎に末弘博士の「暴政は人を皮肉ならしむ」を読むという項がある。大正時代にすでに今のご時世を見透しておられたように感じた。（萬）

▼五月二十日をゴミ零の日という。終日ゴミを出さないようにしましょうと言うことだろう。二月十四日のバレンタインデーは、チョコレートで男を喜ばせる日であり、四月二十九日は、みどりの日であり、その一日から開かれた「国際花と緑の博覧会」の会場づくりに、立木三万本余りの緑が切りとられたという。

▼五月十三日は母の日であり、六月十七日は父の日とその設定に苦労のほどが見える。もちろん、成人の日もこどもの日もあって、万民等しく自分に当てはまる日はあるが、目的も自覚も持っていない。

▼街路樹の根元に雑草が茂り、空缶や犬の糞、毀れた家具など、よいことのように捨てられていた。それがある日、見違えるように、草は刈りとられ、土はならされて、空缶もゴミの影も消えていた。市の清掃局がやったのでもなく、また、公徳心が芽生えて、ご近所の人たちがやったのでもなかった。それは近くに住む六十歳すぎの一人の男性が黙々と日を重ねてやったことだった。一杯のかけそばどころでない美談である。

▼ある日、向うから来た小学生がジュースの空缶を道路わきの草むらへ投げ捨てた。完全なポイ捨てである。両肩に手を置き、「拾いなさい」と草の中から拾わせ、ゴミ籠へ入れさせた。何かブツブツ言っているのがわかる。（き）

★岩波新書の『豊かさとは何か』が静かなブームを呼んでいる。著者は埼玉大学教授の暉峻淑子（てるおかいつこ）さん。生活経済学専攻で、何冊かの著書はあるが、あまりジャーナリズムにはのらない地味な学者だ。昨年九月に発刊され、口コミによる評判を聞いて私が買った四月には11刷を重ねており、いくら刷っても売れるという。

★もちろん、経済の本だからいろいろな数字や統計も出てくるが、一年間を西ドイツですごし、ヨーロッパのいくつかの国に何度か滞在した経験と対比させながら、物と金があふれる世界一の豊かな国・ニッポンの実態を解明しており、日ごろ、漠然と感じていたことが「やっぱりそうだったのか」と納得させられる。ドイツの国民によれば「豊かさとは創造的で自由な生き方ができることであり、それを最大限に可能にする政治、社会である」という。

★ところで、川柳は諷刺の文芸であると言われながら川柳全体で時事川柳の占める比率は少なく、その地位は低い。この人間らしい生活を犠牲にして繁栄する現代の社会は、『柳多留』を生んだ江戸時代の爛熟期やいわゆる〝新興川柳〟が花開いた昭和初年と比べても諷刺の対象に事欠かない。しかし、ただ時事吟を詠めばいいというのではなく、当然のことながら作品としての質も要求される。私自身も初心に返り、川柳を理不尽な社会を斬る剣とするために、もっともっと作品を研ぎすまさなければならないと切に思う。（正）

作品募集

9月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）八木千代選
課題吟（3句）「曲」丁坪サワ子選
「防ぐ」桝本蕗児選
「世界」工藤甲吉選
初歩教室「緊張」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

10月号課題吟「法」「降る」「鉄道」

路郎忌 本社7月句会

日時　7月6日（金）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　宮口笛生
兼題「植木」「板」「膨れる」「からい」「船」
桜井千秀選　田中正坊選　野村太茂津選　片岡つとむ選　西尾栞選

席題1題　当日発表　各題2句以内厳守
会費　500円
投句　柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社8月句会　7日（火）

兼題　「情け」「逆」「倉庫」「旨い」「弾む」

NHK川柳作品募集

課題「遊ぶ」　橘高薫風選
ハガキに3句　7月10日締切
投句先　大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　7月29日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「雨宿り」　橘高薫風選
ハガキに3句　7月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

同人費・誌代などのご送金は、川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へお願いします。
〒581 八尾市中田2―302
振替口座　大阪 8―33368
誌代　半年分 3,800円（送料共）
1年分 7,500円（送料共）

定価 六百円（送料56円）
平成二年六月二十五日印刷
平成二年七月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六一六九―一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二年六月二十五日　印刷
平成二年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七五八号　川柳塔　七月号
定価　六百円（送料　五十六円）

KIRIN
21世紀へ乾杯
本格派。
旨さの辛口。
アルコール度数高め
キリッとしまるドライ。
キリンビール株式会社
キリンドライ

標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。
OSK JEFF ORIGINAL DESIGN
株式会社オーエスケー
〒540　大阪市東区南新町１－13
☎ 06(941)８０１５

雑誌　05703－7